

激ウマ…いや、激マズ日和

黒鋼

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

色々あってGOD EATERの世界に主人公として転生させられた主人公。美味しいものを食べることが好きな主人公にとって、食糧事情の厳しいこの世界は地獄以外の何物でもなかった。しかも、神機で捕食したらアラガミの味が分かるとなれば……。一応、身体能力とかが上げてもらったけれど、そんなもの雀の涙。死にたくないから、出来るだけ美味しいアラガミを探しながら、頑張ります。ああ、初恋ジュースが美味いぜ……

目次

プロローグ	1
1 品目 俺を喰うならアラガミを…!!	15
2 品目 上よりも下を気にするべきだろう!!	25
3 品目 挨拶回り↑重要なのは、やはり食	36
4 品目 支部長って暇なんだろうか?	47
5 品目 情報確認って大事だよな	58
6 品目 ゲームのチュートリアルⅡ地獄or新人虐め	66
7 品目 祝?神機デビュー(やり過ぎは程々に)	75
8 品目 最終訓練とは恐怖の対象である	85
9 品目 初ミツシヨン…:…なんだけどなく	97
10 品目 報告書作成の裏で…:…変なフラグ発生	107
11 品目 繭じゃなくて鬼と虎	118
12 品目 普通の新人ってどう動くんだっけ?	129
13 品目 跳んで、駆けて、また跳んで	138

プロローグ

もぐもぐ

「あー、やっぱりこのたこ焼は最高だな」

口一杯にさつき買ったたこ焼を頬張りながら道を歩く。つい先日見つけたばかりの店で、まだ誰にも教えていないから特に並んだりもせずサツサと購入出来て非常に機嫌が良い。なんせ、この店表通りから少しばかり外れたところにあるもんだから、初めて来た人は誰も近寄らないし。

「暫く、あいつらには教えないでおこう」

自分が学校で所属している部活の面々の顔を思い浮かべながら、ニヤリと笑みを浮かべ、再び一口。

あくん、もぐ

「あ、あふう!!」

中に入っている蛸とか具材が飛び出してきて火傷しそうになるが、それがまた良い。

「むふう」

いや、それでもやっぱり熱いし……何か飲み物を……

ちょうど近くに自販機があるので、急いで財布から硬貨を取り出し機械の中へと投入する。自販機のランプが点灯すると同時に、ボタンをプッシュ!!

ガゴン

という音と共に降りてきた商品を急いで引っ掴むと、

「あつふう!!」

まさかのHOTのお茶（ペットボトル）。

アホか俺!!冬場ならともかく、夏場にそんなものいるか!!あ、因みに今は8月の中盤である。

「は〜、は〜」

仕方なく近くの路肩に座り込み、口を大きく開き慌てて冷やすが、「うわ〜……口の感覚が……」

口の中を火傷してしまい、違和感抜群だ。まあ、仕方ないと思い

さつき買ったばかりのお茶を飲むが……沁みるわ!!

「ぐう〜!!」

ビクン、ビクン!!

二重トラップとは……やるな!?

自身の情けなさをヒシヒシと感じつつ路肩で震えている俺を、通行人たちはおかしなものを見る目で見ながら歩き去っていく。

……まあ、傍から見れば仕方ないことなのかも……

なんとなく理由は分かるため納得するが、それでもあまり好ましい視線ではないので急いで立ち上がり、たこ焼のパックを閉じて輪ゴムで止めたのを引っ掴み、お茶の蓋を閉めると、二つとも鞆の中にブチ込んでサツサと歩き出す。

今日は折角試験空けの食べ歩きの日なのだから、少しでも多くの店を回りたい。財布の中身も十分だし、胃袋にもまだまだ余裕がある。この調子なら、時間までに結構な数回れるはずだ……うう、口内火傷が響くなあ……

若干気落ちしつつも、次の店に向けて雑踏に混じりながら歩いていると、

「ん?」

何やら不審な人影を発見。挙動不審というほどではないが、周囲に気を配りつつ路地裏の入り口に立っている。

中肉中背、服装もどこにでもいる感じだし、髪も黒。身長だって170になるかならないかぐらいだろう。

どこにでもいる日本人のだが、何か引つかかる。けど、俺別に警官でもないし、ほつとくか。触らぬ神にんとやら、だ。折角の食べ歩きの日を潰す訳にもいかない。

そう思い直し、不審人物を見なかったことにして歩き去る。

ま、変な奴なら他の人が警察に連絡するだろ。

……そう、区切りは付けたんだが、やっぱ気になるな

何が引っ掛るのか自分でも分からないが、数歩歩いたところでもう一度振り返ってその人物に目をやる。

と、

「危ねえっ!!」

その不審人物の上から工事中の巨大な鉄骨が落下しようとしていた。しかも、さつきまでの雑踏はどこへやら。こんな時に限って周囲には俺とその不審人物しかいない。

今から駆け寄れば、あいつを弾き飛ばして俺もその勢いで逃げられる!!

不審人物とはいえ目の前で死なれるのは流石に気分が悪い。助けられる奴は助ける!!

「あんた、さつきと逃げろ!!」

動こうとしない男に声をかけながら駆けより、付き飛ばそうとしたら、

「ふん」

「…え…?」

何故か男が俺の横をすり抜けるように俺を避ける。

しかも、

「…?」

俺の腹が異様に熱い。それに、熱だけじゃなくて鈍い痛みもする。

ゆっくり、ゆっくり、手をやってみると、

ヌルリ

何か生温かい液体の様なものが手に触れた。呆然となりながらも腹部に持っていた手を顔の前に持って来る、

「は、ははは…」

なんだよ、これ」

俺の手が真赤に染まっていた。

ポタ、ポタ

手から、腹から、液体が流れ出していく。どういうことだよ……

「キヤアアーーーーッ!!」

「……………?」

後ろから女性の悲鳴が聞こえる。その声につられ、ゆっくりそっちの方向に振り向こうとした俺だったけど、

グシャッ!!

結局振り向けることなく意識が亡くなった。

◆ ◆ ◆ ◆ ◆

「俺のたこ焼……っ!!」

ガバツ!!

勢い良く体を起こす。

へっ?

俺、いつ寝たんだけ…?

いや、そんなことよりもたこ焼、たこ焼は!?!もしかして夢だったのか!?!?

慌てて周囲を探してみるもたこ焼のパックはおろか、たこ焼を入れていた筈の鞆すら見当たらない。

「ちくしょーっ、夢か、夢だったのか!?!」

地面に四肢を付いて、滂沱の涙を流しながら腕を叩きつける。

ドンツ、ドンツ!!

「返って来い、俺のたこ焼よー!!」

もしくはお茶よー!!」

結構な値段がしたのによー…:あ、夢なら損してないのか?

「いや、第一声がそれって、お主どれだけ食い意地が張つとるんじやい…」

「ん?誰だ爺さん?」

俺が地面を叩きながら悔しがっていると、後ろから見知らぬ爺さんが話しかけてきた。やたらと威厳たつぷりで、無駄に神々しさがあるが、所詮爺さんは爺さん。ご老人は大事にしなければいけない、と教えられてきた身としては相手をしてやらねばなるまい。

「別に、嫌なら相手せんでも良いんじやぞ…?」

若干額に血管を浮き上がらせながら言葉を掛けてくるご老体。

「うお、心を読まれた!!」

「じゃから、ご老体って、お主…」

まあ、ええわい。

溜息を吐きながら話を続けようとする爺さん。よし、話ぐらい聞いてやろう。

「で、貴方は誰ですか…?」

腕を地面から離し、

「おいしよ、っと」

二足歩行の体勢になり、しっかりと立ち上がる。流石に相手は立ったままなのに、自分が座ったまま目上?の人の話を聞くのは失礼だしな。

「儂は、神じゃ」

…はい…?

俺が立ち上がると、目の前の老人は自身の正体を明かしてきた。

きたのだが…

「What's?」

カミって言う…紙?それとも髪?

「GODじゃ、GOD

paperやhairだと自分で名乗る奴がどこにいる!」

「…え、違うの…?」

「当たり前じゃー!!」

激昂される「自称」神様。

いや、いきなり神様だとか名乗られてもなく

信じられる奴の方がおかしいと思うのだが…

「そりゃそうかもしれんが…まあ構わん。

取り合えず儂の話を聞け」

自分でも仕方ないと思っているのか問題の部分を通し話を続けようとする。まあ、俺もいつまでもこんな爺さんと話してるつもりはないから喜んで話につき合うことにした。

「いいでしょう。」

で、その「神様」が俺に何の用ですか…?

今更かもしれないが、周囲は極彩色で彩られた空間で、上も下も、果ては右も左も曖昧だ。…まあ、今は俺の向いている方向で考えてくれれば良い。

「ああ、お主が予定調和を乱してくれた所為でな、その処分内容を伝えに来たんじゃ」

「処分内容…?」

「やたらと不安が残る言葉を発せられる目の前の髭爺。処分って何さ…?」

「うむ」

「俺が不安に脅えつつも頭を捻っていると神様?は鷹揚に頭を縦に振り、肯定の意を示している。」

「お主、自分がさつきまで何をしていたか思い出せるか…?」

「さつきまでって言う…?」

「えっと、記憶にあるのは、折角の休日だから食べ歩きをして、その途中で不審人物を見かけて…」

「あ!」

「思い出した様じゃの」

「そうだ、その不審人物の上に鉄骨が落ちてこようと下から助けようとして…」

「…:死んだ…:のか、俺は」

「そうじゃ」

「は、ははは…」

「死んだ、死んだ、シンド、シンド…:…:嘘だ!!」

「嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ!!」

「頭を抱え、必死に首を振る。自分でもなんでそんな行動に走るのか分からない。分からない、けど、まるで、そうすれば今この事実が否定できるのかもしれない、と思っているのか。」

「どっちにしろ、」

「嫌だ!!」

「あんた、神様なんだろう!」

「生き返らせてくれよ!!」

「俺には到底認められることじゃない。信じられないし、信じたくないい!!けど、自分の記憶は確かにあの瞬間、鉄骨が落ちてくる瞬間をはっきりと覚えている。目の前の爺さんに縋りつき、涙を流しながら」

頼みこむ。こいつが本当に神なら俺を生き返らせるぐらい簡単なことだろ!?

だが、

「残念じゃが…無理じゃ」

目の前の爺さんは淡々と否定しやがった。

「そん、な…」

ドサツ

爺さんに縋りついてた手が離され、脚の力が抜けた俺はその場に崩れ落ちる。そんな俺を気の毒そうに見つめる爺さん。

「…俺は、まだ何にもしてないのに…」

生れて16年。

まだ、親にも、友達にも、何もしてやれていない。彼女だつて出来たことないし、一度ぐらいセックスを試してみたかった。こんなにも、まだまだやり残した事が、思い残した事ある。

それに、何より、

「まだ、たこ焼が残ってたのに!!」

あの美味しい食べ物たちを俺はまだ食べていない!!

「は…?」

今迄ただ憐みの視線を向けていただけの爺さんが、呆気にとられた様子の表情に変わる。鳩が豆鉄砲をくらった時の様な表情というのはこういう時の顔のことを言うのだろう。だが、俺はそんな爺さんの表情の変化を気にも留めず、言葉を続けていく。

「あの店のラーメン、テレビで放送してたお好み焼き…食べるつもりでいたのに!!」

「……………」

「ケーキとか、ゼリーとか、スイーツ類の新情報を仕入れたばかりだったのに!!」

「……………はあ…」

「折角、今日の夕飯は母さんが作ってくれた煮物なのに!!」

「……………せーの…」

「折角…」

「いい加減にせんか!!」

ゴンツ!!

「ガツ!!」

俺が食いそびれたもの、ことを悔んでいると、〃自称〃神様が思いつき俺の頭を殴ってきやがった。

いきなり何すんだこの野郎!!出るところ出るぞ!!

「友人知人のことを悔むなら、そつとしておいてやろうと思ったが…

お主は食い物のことばかり気にしおってからに!!」

「う…」

そうだ、食べ物のことを考え出したら止まらないのが俺の性格。両親や、友人たちにも散々指摘されてたっけ…

さつきまでの同情の視線はどこへやら、爺さんが俺に向けてくるのは凄く情けないものを見る視線だった。

やめてくれ!!

俺はそんな視線を受けて興奮する様な性格じゃねくんだから!!

……ごほん、とそんなことより

「で、俺は本当に死んだのか?」

「ああ、そうじゃ」

「……………」

改めてハッキリ言われるとかなり堪える。食べ物ことは勿論残念だけれども、それと同じ、或いはそれ以上に両親や妹、それに学校の友人のことが。

……兄は知らん!!

「…本当に生き返るのは無理なんだよな」

再度の確認。

生き返られるなら生き返りたい。例え、何らかの障害が残るのだとしても、俺はまだ〃あいつら〃と過していききたいのだ。

そんな俺の願いも、

「ああ、無理じゃ」

あつさりと否定される。

……ああ、結構きついな。

未だに自分が死んでいるという実感は湧かないけれど、二度と彼らに会えないのは嫌だ。

そんな感傷に浸りながらも、どこか冷静に現状を分析している自分がいることに驚く。

「なら、なんであんたは今俺の前にいる？」

生き返らせるつもりが無いなら神様なんて出てくるんじゃないよ!!天国に連れていくにしろ、地獄に連れていくにしろ、それは天使とか死神の仕事であって神の仕事じゃねー筈だし。

……まあ、宗教によつて違うけど、そんなもん大した問題じゃない。「じゃから、言つたじやろう。」

処分内容を伝えに来た、と」

そう言つて、懐から一枚の紙を取り出し、俺に渡して来る。特別拒否する理由もないので、受け取り、ザツと目を通す。世界共通言語になっている英語ではなく、日本人である俺に分かりやすい日本語で書かれているから特別詰まる所はない。

「えくと、なにになに…」

【通達事項

貴方は我々が定めていた人間の生死のバランスを勝手に乱しました。

よつて、本来であれば不要であつたはずの調整を施さなければならなくなつたため、普段でも忙しいというのに、輪をかけて忙しい日々を我々は送らなければならなくなりました。

なので、罰を与えます。

罰の内容は、とある世界に転生して、そこで生き抜くこと。

また、罰なのである条件を付けておきます。

その辺りとか詳しいことは、そこにいるのに聞いてください。

我々も忙しいので（どっかの誰かの所為で）

というか、ムカつくから、せめて私たちに娯楽を提供してください。

まあ、精々頑張れや」

「…は…?」

どゆこと?」

「まあ、詳しく言うと、お主が助けようとした人間は元々あそこで死ぬはずだったんじゃないが、お主が余計な事をしたせいで死ななくなつた。」

その所為で、いらん調整をしなければならなくなつたから、人間の生死担当の神が非常に多忙になつたんじゃないや。

お主が罰を受けることになつたのはそいつらがムカついたせいじゃない

「なんだそりや!?!」

神様にしては何て身勝手な!!もつと人間のことを考えてくれよ!!
「考えるわけ無かろうが。」

ギリシヤ神話の神々を見てみい。

好き勝手やつておるじやろ。

そもそも、神と人間の感覚を同じように考えるのが間違つとる」

「ぐ!!」

そう言われると、答えようがない。同じような姿をしているとは言つてもそこは神と人。

ヒト、という生命の価値観についても考え方が違うのだろう。それこそ、人の生死を取り扱っているところなのならば、あまり重要視しなくなつても仕方ない……のか?

認めるつもりなんてさらさらないけれど、感覚としては、人が蠅や蚊を殺す時の様なものなのだろうか……?

あまり想像したくはないが、そうとでも考えないと、やってられない。い。

「……はあ、納得はしたくないですが、とりあえず理解はしました……それで、私が行く世界とか付けられる条件、ってなんですか……?」

凄く平和で食べ物美味しい世界だと良いな〜あ、危険でも月曜日に発売される某週刊少年漫画雑誌で連載しているグルメハンターみたいな世界だったら良いや。

「GOD EATERという、ゲームの世界……と聞いておる。」

なんともふざけた名前じゃの」

「……はい?」

Really?」

俺の希望を裏切り、神が提示してきたのはかなり死ねる世界だった。

マジですか…? あんな死亡フラグ満載の、世紀末の世界に逝けと…!?

しかも、危険度MAXで食糧事情最悪の世界じゃねーか!!

一応、原作のゲームは無印の時からやり込んでたからよく知っているが。

「本当じゃ。」

因みに、お主に付けられる条件は「立場はゲームの主人公」で「神機を使って捕食した際、アラガミの味が分かる」と言うものじゃ」

「…なんですか、その虐め!?

俺が食べることに好きだって知っててその仕打ちですか!?

アラガミの味なんぞ知りたくもないわ!!

BURSTでアナグラの人間から大不評だった初恋ジュースを、レオンはアラガミなんかよりずっと美味しい、と言っていた。それすなわち…アラガミは非常にマズイ!! しかも、ゴッドイーターが捕食しない訳にもいかず…地獄だ。つまり、ミッションが全て地獄になるわけ…嫌だー!ー!!

は、そうだ!!

せめて、俺の記憶とか、人格とかその辺のもの全て消してもらえれば、それはもう別人だから…

「すいません、俺の記憶とかがって消したり…」「罰なんじゃからする訳ないじゃろう」…「やっぱりかー!ー!!」

ちくしょー

もう、どうしようもないのか…!?

と思い、不審人物を助けようとしたあの時の自分を呪っていると、「まあ…あいつらの言い分も儂には分かるが、人を助けようとして死んだお主がこんな目に合うのも若干不憫じゃし…

1つ…いや、2つぐらいなら、何か手伝ってやろう」

予想外の所から救いの手が差し伸べられてきた。

「本当ですか!？」

躊躇なく、その手に反応する俺。

情けなくなかない。俺のこれからが掛かっているんだから!!

「じゃが、俺が関与したとすぐに分かる様なものは無しじゃし、あいつらが付けた条件を打ち消すようなものも無理じゃ」

「それでも良いです。」

ありがとうございます!!」

速攻土下座で頼み込む。そんな俺の姿に若干引きながらも頷く爺さん。

何にせよ、少しでも次の人生をマシにする必要がある。

その事を理解すると、俺はすぐにその場に座り込み、G O D E A T E Rの主人公について考え始める。

無印の頃はソーマに殆ど全部持っていかれ、BURSTではリンドウさんがメインになったので結構微妙。

神機使いとしての潜在能力は非常に高い。

神機の組み合わせが何故か一人だけ自由——まあ、ゲームだしそりやそうか。

男キャラでやると、アリスのフラグがすごい立ってる(ように見える)のに全く回収せず。

女キャラだとガチ百合(かなり濃い友情)に見える。

成長速度が異常。

無言。

こうして考えてみると…

「…あれ?結構好待遇?」

まあ、そこに至るまでに地獄の特訓が必要なのだろうけれど。

さて、どうしようか?取り合えず、死なないためには身体能力が高くないといけないから…:身体能力強化系の条件が良いな—

でも、表だって分かりやすいものだといけないんだから…:ああ、オラクル細胞との適合率が高いから、ある程度は誤魔化せる筈。

と、なると、

「二つ目は、元々の身体能力がL V 3のリンクバースト状態となるこ

と」

こうしておけば、捕食をあまりしなくてもなんとかなる時が増えるし、バーストモードになっただけで普通のゴッドイーターの何倍もの強化が出来るはずだ。主人公として生れるなら、死亡フラグは別にして身体能力も凄いはずだし…なんとかなるよな？

加減を覚えるのは大変そうだが、頑張ろう。…捕食する、しないは別。

「ふむ、それぐらいなら大丈夫じゃろう。

次じゃ」

もう一つ、か…これはもう決まってる。

「二つ目は、俺の部屋の冷蔵庫の中身に、俺が望んだ食材が必ず入っている様にしてください」

アラガミなんていう化け物がGOD EATERの世界には発生しているため、あの世界は食糧状態が非常に悪い。仕方ないことだけれど、俺にとっては、やっぱりそれは我慢できないことなんだ。美味いものさえ食えるなら、例え地獄だろうと構わん!!

…いや、やっぱり地獄は嫌だけどさ。

「…むう、本当にそれで良いのか？」

いつでも原作が見れるように、とかでも良いのじゃぞ…？」

俺の二つ目の望みを聞いた爺さんは、結構重要な望みを進めてきてくれた。確かに、原作が見れるのはこれ以上ないぐらい良いことだろう…普通は。

けど、それ以上に、

「食事が不味い世界なんて嫌だ」

俺にとって食事は大事なことなのだ。三食全部、ジャイアントトウモロコシなど、御免こうむる!!

「まあ、お主が良いならそれで構わんが…

多分、大丈夫じゃから、原作開始と同時に発動するよう調整して…」

どこか渋りながらも納得してくれた爺さんは何やらごそごそと目の前の空間を弄ると、

「逝っていい」

俺の足元にでっかい穴を開けてくれやがりました。

「ぬおおおおおー！ー！ー！ー！！」

重力があるのか、そのまま下に落ちていく俺。急速に落ちていく意識の中に、

《ごめん、皆》

家族や、友人たちの姿が朧気に浮かんで来ていた。

1 品目 俺を喰うならアラガミを…!!

さて、そんなこんなでやってきましたGOD EATERの世界。因みに、現在の俺の肉体年齢は15歳で、精神年齢で言えば30歳を越えており、あのツバキさんより年上ということになるが…うん、考えないようにしよう。

今迄俺が暮らしていたのはこの世界でも、昔で言う日本。現、極東。そのフェンリル支部の外部居住区である。

…まあ、ゲームの主人公として生きていくことになるのなら当然のことである。

だが、極東は、流石アラガミと人間の死闘の最前線と言うだけあり、結構な頻度でアラガミが居住区内部に侵入してくるのだ。最近では少なくなったが、アラガミ装甲が貧弱だった以前の居住区では大型のアラガミが破壊して侵入してくることもあった。アラガミ装甲が強固になった昨今では大型のアラガミは流石に少ないが、オウガテイルとか、ザイゴートといった小型のアラガミはどこからか侵入してくる。

その時、住民はゴツドイーターが駆け付けてくれるまで逃げ回るのだが、何人か喰われて死んでしまう人もいた。

…この世界での俺の両親もそう言った人たちの中の一人だ。

あれは、俺が10歳の頃。

生れてからずっと以前の世界での意識があったため、さぞかし不気味な子供だった俺を母親は庇って死んだ。居住区内に侵入したアラガミ——この時は、シユウだった——に襲われそうになっていた俺を突飛ばし、母はシユウの両爪に切り裂かれ、頭と体を二分され、首から噴水のように鮮やかな血を噴き出して絶命。

今でも、母の体から噴き出す血の生温かい感触ははつきりと思い出すことが出来る。…いや、忘れようとしても忘れられない。

父は、それ以前。

俺と母をフェンリル職員に預けたまま、助けを呼びに行つて、その途中でヴァジユラに喰われたらしい。『らしい』と言うのは、死体が

残っていないのだ。

自分でも、世紀末だと、生きていくことが難しい世界なのだとは知っていた。けれど、父の死、母の死、この二つが当たり前前のものとして片付けられていく世界を見て、

「……死にたくない」

より一層、生への執着を覚えた。あんなにも簡単に人の死は片付けて良いものであるはずがないのに、それを当然と捉えている世界に恐怖を覚えたのだ。

それ以来、自分の出来る範囲内でひたすら体を鍛え抜いた。

自身が主人公となることが分かっていたからじゃない。

ただ純粹に、死にたくなかったから。

おかげで、なんとかアラガミから逃げられるようになったし、今迄無事に生きている。一応外部居住区には学校もあるのだが、あまり行っていない。籍だけはあつたし、現代——ここに来る前の日本——でいう小学校まではちゃんと通った。

けれど、中学にはあまり行っていない。

必要なことは以前の世界で大体習っていたというのものもあるけれど、働かなければ生きていけなかったからだ。働く、と言ってもしっかりと就職している訳ではなく、日雇いの仕事を当日の朝に見つけて夜までこなす。見つからなければ学校に行く。……大人でも職に困る世界だ。俺みたいなガキがそう簡単に仕事にありつけるわけじゃない。ありつけたとしても、もらえるfcは微々たるもの。早々簡単に生活が改善出来るほどにはなりはしない。一応食料の配給は受けているから飢死することはないだろうが。環境を少しでも良くしようと思えば働くしかない。

そんな日を繰り返し、ある程度資金が貯まれば学校に行く。金がなくなればまた労働へ。

まあ、俺が特別という訳ではない。

人がよく死ぬ、こんな世界ではよくあることだ。そんな生活がキツイと思っただけじゃない。

ただ、食事が酷いのは流石にキツイ。

分かってはいたけれど、ここまで酷いと……

一日でトウモロコシー本は良い方で、酷い時には1週間配給がストップする時がある。

これも原作開始までの我慢だ!!

と思つて、耐え抜いてきたが…：やっぱり、記憶が無い方が良かったんじゃないかと思う。その方が、現在の食糧事情を当然のものとして過ごすことが出来たのだろうし。

まあ、それも今日までだ。

先日、フェンリルの極東支部から召集令状が届いた。そう、遂に原作開始、待ちに待ったまともな食事が出来る日だ。



アナグラの入り口で、どこかの防衛班班長に口説かれている受付嬢のヒバリさんに挨拶をして、召集令状を見せると、

「階段を上がったところにあるエレベーターで訓練所に向かつてください」

と言われたので、そのままエレベーターに乗り込み、地下の訓練所へ。まだ準備が出来ていなかったのか、扉が開かない。なので、訓練所の前に置いてあったベンチに座り、少々待機。完全防音の扉にでもなっているのか、準備をしているはずの訓練所内の音は全く聞こえない。

「…それにしても、いよいよ、か」

中々感慨深いものがある。

GOD EATERの主人公と言えば、空気なことで有名だけれども、台詞がないんじゃないやそりゃあ空気にもなるさ。俺はちゃんと喋れるから、そんなに気にしている訳ではないけど…：ソーマに持つていかれるのならそれ以外の所で頑張ればいいだけのこと。

「エリック上田氏のこととか、リンドウさんのこととか色々あるけど」
取り合えず、この適性試験を無事終えなければ。確か、激痛がするらしいし。

あー、やだやだ。

けれど、この試験を終えなければ食事が、いや食材が手に入らない

!!

それなら、

「耐えてやる!!」

そう、改めて気合を入れるのだった。

・

自分で気合を入れ直してから更に5分経過し、ようやく、

『待たせてすまない。』

準備が終わったので入ってくれたまえ』

扉の上から声が掛けられた。スピーカーが扉の上部に付いており、そこから声が聞こえてきたのだ。

「おゝスピーカー越しとはいえ、こっちの世界でこの声を聞くと身が引き締まるなー」

本来であれば分かるはずのない事を口走りながら立ち上がり、目の前にある扉に手を掛け、大きく息を吸う。

ここから先は、本当に気が抜けない。今迄もそうだったけれど、以前は逃げていればよかった。

だけど、これからは違う。

俺は闘うんだ、人類の敵であるアラガミと。

そう自身を奮い立たせ、抜けていた気を入れ直し、

「よし」

ガチャ

鍵の開いた扉を押し、訓練所に足を踏み入れる。

一步踏み込んだ先は、

「おおっ」

ゲームの映像と同じく、だだっ広い空間の中央に病院の診察台を二つ重ねた様なものが置かれている部屋。

多分、あの診察台の様な機械の間に俺の相棒となるはずの神機が寝

かざれているはずだ。

《うわゝ…あれで腕輪を取り付けるのか》

そりや痛いって。

ゲームじゃ声は出てなかったけど、あれは声を充ててないだけだろうからな。しかも、オラクル細胞なんていう、本来人間には適さない異物を流し込むのだから激痛で済むだけマシなのだろう。

実際、神機に適合していない人間は、神機に喰われて肉片になるらしい。

その機械と入口の扉を結ぶ直線の延長線上にある壁の上部に人が数人立っている様子がガラス越しに見える。

あそこの部屋に支部長とかがいるんだろうな。声も支部長のだったし。

どうすればいいのかは分かるけれど、勝手に動く訳にもいかず、俺が黙ったままその場に立って目の前の機械に視線を注いでいると、

『長く待たせてすまない』

支部長の声が聞こえてきた。

「い、いえ」

『さて、ようこそ…人類最後の砦「フェンリル」へ』

若干緊張しつつ慌てて返事を返すも、向こうは聞こえていないのか淡々と言葉を続けてくる。

そりやそうか。防音設備があるのなら声が聞こえる訳ないはずだし。あれ？

それならゲームのチュートリアルとかだとツバキさんはどうして
るんだ…？

『今から対アラガミ討伐部隊、「ゴッドイーター」としての適性試験を
始める』

「はい!!」

取り合えず聞こえていないとしても返事ぐらいはちゃんとしておこう。ひよつとしたら、初の新型のデータとして録画ぐらいしているかもしれない。

疑問は一先ず措いておいて、気を引き締め直す。

が、

『少しリラックスしたまえ。』

その方が良い結果が出やすい』

そんな俺の様子が伝わったのか支部長にリラックスするよう促される。

「……はあ」

ゲーム通りの言葉だけれど、タイミングが良すぎて気味が悪い。

そもそも、リラックスして良い結果に変わる訳ないでしょうが。人の気の持ちよう次第でゴッドイーターが誕生するのなら、もつと大量にゴッドイーターがいるはずだ。

溜息を吐きつつもそんなことを思うけど、口には出さない。出したところで何かが変わる訳でもないのだから。

まあ、それでも若干肩の力は抜けた。その点だけは感謝だ。

『心の準備が出来たら、中央のケースの前に立ってくれ』

「Yes, sir」

若干ふざけた調子で答えを返しつつ、目の前の機械へと足を進める。本来であれば、ここでそれなりの躊躇いがあるのかもしれないが、心の準備など今更俺には必要ない。この世界に生み出された瞬間から、ここに来ることが決まっていたし、知っていたんだ。ゴッドイーターとして闘い、生きていく覚悟はどうに出来ている。

「……」

機械に寝かされている神機が目に入る。

刀身はゲームの中では最初に支給されるロングのブレード。装甲部分は支援シールドで、半分に分けられた装甲の間から50型機関砲の銃身が身を覗かせている。

間違いない、新型神機だ。

握って下さいとばかりに、柄の部分はこちらを向き、そこから自身に向けて伸びる半円形の溝。赤い腕輪と思わしき物の片割れがその溝の中に埋められている。

《おお、こうして腕輪の内側が見れるのって、改めて考えるとこの時ぐらいしかないよなー》

勿論、ゲームの中ではリンドウさんの腕輪をパヴァアジュラから引き抜いた時とか、あるにはあるけれど、機械の中に埋まっている姿は珍しい。

ゲームでも最初の機械のシーンをマジマジと見てた訳でもなかったし。

まあ、それはいい。

今はこの神機を掴む。掴んで…これ以上考えるのは止そう。結果がある程度分かっているとはいえ、嫌な気分になる。

「よし!!」

声で完全に意志を固め、眺めていただけだった神機へと勢い良く手を伸ばす。伸ばした手は途中で減速することなく、

ガッ!!

しつかりと目の前にある神機の柄を掴む。

……そのまま数秒経過……そろそろか？

体感時間としては、1分、或いは1時間ぐらい経ったように感じていたのだが、実際はそんなことなく、

ガシヤンツ!!

勢い良く上から落ちてきた機械に自身の右腕が挟まれ、同時に、

ぐちゃ、ぐちゃ、ぐちゅ…

腕輪が作動し、偏食因子が体の中へと送り込まれ始め、更に神機が俺のことを捕食しようとする。

「ぐ、があ、あーっ!!」

体内に異物——それも凶悪な——が入り込み、俺の身体を作り変えていきやがる!!

しかも、神機の捕食も同時に始まるもんだから、体から何か大事な物が抜けていく様な喪失感。

くそ、予想以上にキツイ……けどなあ、

「喰われてたまるかあーっ!!」

喰うのは俺だ、お前じゃねえんだよ。

仮にも、俺の相棒になろうってんなら、

「人のモノを喰うんじゃねえ!!」

他人の喰い物（からだ）を横取りすんな!!今の俺と神機（お前）は喰うか喰われるかの間柄なのかもしれないが、それが終われば、互いの“食”のために命を預け合う仲になるんだろ!?それなら、今こんな喰い物（俺の身体）で満足せずに、二人?でウマイもんを探してみようじゃねえか!!だから、こんな所で、折角適合者が見つかったって言うのに終わって良い訳ないだろ!!

そんな俺の心の言葉が通じたのか、徐々に体の中にある異物感と右腕の痛みが退いていく。

「はあ、はあ、はあ……終わった、のか?」

痛みは消えていつているとはいえ、機械が全く上に上がる様子を示さないで、終わったのかどうか分からない。

分からないが、

「……………」

適合が成功したことは何となく分かった。

何故なら、さつきまでの被捕食者としての感覚は消え、右腕の先にある神機との同調感の様なものを感じられるようになったからだ。

程なくして機械が開き、右腕が自由になる。

改めて視界に入った右腕に付けられた腕輪からは黒い靄の様なもの漏れ出している。

うん、これまたゲーム通り…だけど、やっぱり不安だ。

「よ、っと」

機械が完全に開かれたのを見届けると、神機を掴んだまま右腕を自身の傍へと引き戻す。顔の近くで神機をしげしげと眺めていると、神機から黒いコード?の様なもの伸び、腕輪に接続される。すると、先程まで感じていた同調感がより一層強まり、身体に力が漲る。

「ふむ……………」

これだけ大きな物なのに、全く重さを感じない。羽毛の様な軽さですごく振りやすそうだし、今なら何でも出来そうだ。

そんな充足感に俺が浸っていると、

『…………おめでとう、君がこの支部初の新型「ゴッドイーター」だ』

支部長が声を掛けてきた。

「あ、ありがとうございます。」

「……新型？」

支部長たちがいる方向に視線をやり、一応、お礼を言いつつ（何のことか知ってはいるけれど）一応頭を捻り、分からないフリをしておく。普通そんなことを気にする余裕はないかもしれないけど、反応してしまったのだし仕方ない。

『適性試験はこれで終了だ。』

次は適合後のメデイカルチェックが予定されている』

けれど、あちらもこちらの疑問には特に興味もないらしくスルーしてくれた。

……ありがたいつちやありがたいんだが、全くこちらの言葉に反応がないと少々不安になる。取り合えず、上げていた手を下ろして神機を下に下ろす。軽いとはいえ、適正試験を終えたばかりだから若干体が気だるいのだ。

それにしても、メデイカルチェックか……実際に何をするのかは分からないんだよなー

ゲームではそのシーンはカットされてるし……いやまあ、意識の無い主人公が知ってても変な気はするけれど。

ま、ゴッドイーター全員が通る道なんだし、担当はあの榊博士だ。そんなに気にする必要もない。

『始まるまでその扉の向こうの部屋で待機してくれたまえ。』

気分が悪いなどの症状がある場合はすぐに申し出るように』

言葉につられて指示された方向を見ると、確かに扉がある。

……入口と同じように見えるのは気のせいだと思いたい。

「了解しました」

了承の意を示し、窓越しの相手に向かって頭を下げる。事件の黒幕だとはいえ、これからお世話になる組織のトップなのだ。挨拶はちゃんとした方が良い。

頭を上げ、相棒となった神機を肩に担ぎ、指示された扉から出ていこうとすると、

『……期待しているよ、真城（ましろ）クウヤ』

最後の台詞が掛けられた。

ゲームと違うのは、俺——真城クウヤの名前が入っていること。その言葉に、軽く頭を下げ、神機を挙げることで返事とし、指示された扉を開き訓練所から出ていく。

……ヨハネス支部長の狙いがゲーム通りなのかどうか知らないけれど、俺は支部長の狙い通りに動くつもりはない。

俺の目的は二つだけ。

死なないこと、そして美味しい飯、それだけだ!!

だ、か、ら

お前もウマイアラガミを喰ってくれよ、神機（あいぼう）……？

2品目 上よりも下を気にするべきだろう!!

訓練場から出た俺は、神機を指示された場所に置いて足を廊下の先へと進める。向かう先にいるはずの同期の少年の顔を思い浮かべつつ、

《…やっぱりあの台詞から始まるのかね?》

若干の期待を未だ見ぬ少年に込める。

が、個人的には寧ろあの通りではなく、しっかりと残っていて欲しいのだが…無理だろうなあ。というか、人に勧めるぐらいならガムの残りの数ぐらい把握しておけと思う。

《まあ、会えば分かるか》

考えててもしようがないし、さつさとエレベーターへと入り込み、エントランスのボタンを押す。指定した階に到着すると、左手にある階段を音を鳴らしながら降りる。

さつきまでいたはずの受付嬢のヒバリさんが何故かおらず、いるのは例の人物一人だけ。足を交互に揺らしている…少し落ち着けよ。

《おく、本当にゲーム通りの服着てるんだな》

と、ある意味当然のことに軽い感激を覚えつつ、

「なあ、隣座って良いか?」

声を掛けてみる。

黙ったまま勝手に座っても良いのかもしれないが、そこはこんな成りでも一応極東（日本）人。こんな世界になっても、いや、こんな世界だからこそ礼儀は大切だと思う。

「うん? ああ、どうぞどうぞ」

こちらを見上げながらやや驚いた表情で口に何か——十中八九ガム——を含みながら答えてくれる黄色い少年。

「サンキュ」

軽くお礼を言いながら、俺も隣に腰を下ろす。

ふうー、疲れた。ようやく座れた。適性試験からずっと、立ちっぱなし歩きっぱなしだったからな。身体的にはそれほどでも、精神的に結構きてるものがある。

ようやく座れたことに安堵し、俺が気を緩めていると、

「ねえ…ガム食べる？」

隣の少年が予想通りの言葉で話しかけてきた。

お、きたきた。いや、何か感慨深いものがあるな。

本当に、俺もGOD EATERの世界に主人公として参加したんだとこの台詞を聞いていると思えてくる。

「ああ、もうう」

頭を縦に振り、催促する。

そして隣の少年は残りのガムを入れていたズボンのポケットを漁り始めたわけなのだが、

「あ、切れてた」

「おい!？」

予想通りの結果に。

分かっただけはいたものの、つい突っ込んでしまう。

「いや、いま食べてるのが最後だったみたい。

ごめんごめん」

気楽に謝ってくるが、

「いや、許さん」

「え？」

「自分から食べ物を勧めておいて、なかっただど？」

いくらなんでもそんな冗談はこの御時世やったらいかんだろうが
!!

本心としては、別にそんなことで一々目くじらを立てたりはしていないが、若干からかうつもりで言ってる。

「い、いや、そんなこと言われても。」

もうガムだつて切れてるし…」

初対面の俺——しかも、同い年——に突然説教をかまされて混乱している少年——藤木コウタ。俺だって彼の立場に立つたら混乱するだろうから、そのことについてとやかく言いはしない。

「なら、今度会った時何か食べ物をおごる様に、以上!!」

「え? あく、え?」

い、いいけど…」

俺に押し切られる形で了承してしまったコウタ。……彼の未来が少々、いやかなり心配である。ゲームだったら家族想いの、明るい良い少年なんだけど。

「つてのは冗談として…」

俺も、この辺りでおふぎけを止めることにする。このまま続けても、藤木少年が可哀想だ。

「はいい!？」

俺の突然の変わりように驚くコウタ。うん、まあ、そんな反応で当然だろう。

が、コウタの驚きなどスルーして、

「お前も適合者だろ？」

俺は、眞城クウヤ、よろしくな」

先に自己紹介を済ませてしまう。

「あ、ああ、そうだよ。

俺は、藤木コウタ、よろしく」

若干ビビりつつ、自己紹介をしてくるコウタ。そんなに、脅えられないようなことしたっけな、俺…？

頭を捻りながら悩んでいると、

「いや、ビビった。クウヤって何歳？」

俺より年上に見えるけど…」

ビビりは治まったのか、先程までの様にコウタが気楽な調子で話しかけてくる。

最初から名前で呼んでくるとは、流石。台詞が違う気もするが…まあ、些細な問題か。

「15だが…」

「嘘おつ、同い年!？」

返事を返すと驚愕される。

「…そんなに驚くことか？」

中身はともかく、年相応の外見だと思っただけだな。

「いや、てつきり17、8に見えたから…」

まあ本人が言うならそうなんだよな
んじやあ、改めて、よろしくな後輩!!」

「後輩?」

「ああ、一瞬とはいえ俺の方が先に適合者になったんだから、俺の方が先輩だろ?」

「なるほど…」

まあ、そうかもしれないが、ほとんど変わらないと思うぞ。

「まあ、よろしくコウタ」

「ああ、よろしくなクウヤ」

ガムの件や、なんやかんやでゲームとは違う出会い方だったような気もするが、まあ、それが当然か。俺はこうして俺のまま生きているんだから。

そのままコウタと雑談をしていると、

カン、カン、カン

鉄板の上をヒールで歩く人の足音が聞こえた。音の方に視線をやると、

《おお、ツバキさんだ。

本当にあんな服着てるんだな…》

雨宮ツバキ教官の凛々しい御姿が。

右手を腰に当て、左腕でクリップボード?を抱えたままこつちに向かって来ているのが分かる。

今更着ている服を説明するつもりはないけれど、男なら誰もがあのトップスのスーツの間から覗く豊かな胸元に視線が惹かれると思う。下手なグラビアよりよっぽどエロい格好である。

だが、それ以上に俺にとって疑問なのは、下。

彼女のボトムスは腰の部分の両側がザツクリと開いているのだ。

紐が布地の間に掛かっているとはいえ、

《下着とかどうしてるんだらうか…?》

まさか、ハイテナイなんてこと!》

到底下着を装着しているとは思えない。いや、紐とかだっただら有り得ない話じゃないけれど…かなり無理があるだろうな。

上ならまだ良い：いや、健全な思春期の——精神年齢30超えとか言わない!!——男性としては全くもって良くはないが。まだ、背中と脇バツクリのサクヤさんとか、下から乳が覗いているアリサとか、ツバキさんみたく、あるいはそれ以上に胸元が開きまくっているジーナさんとか知っているから。

けれど、下はない。

ズボン、という一見鉄壁のガードを身に着けているかと思いきや、ツバキさんは肝心な部分の横が開いてしまっているため、逆に妄想が膨らむ!!それは、カメラをローアングルにすれば中身の見えてしまうミニスカのアリサ——いや、アリサもハイテナイ疑惑満載だが——やアネットなど比べ物にならない破壊力を生み出すのだ!!

閑話休題

俺がツバキさんの方を見ているのがコウタにも分かったのか、コウタも雑談を止めツバキさんの方に視線を向ける。ついでに言っとくが、視線は当然の様にスーツの間から覗く豪勢な胸元へ。まあ、年頃の男子としては当たり前前の反応だ。

ツバキさんもそんな視線には気付いているだろうに、全く気にする素振りを見せず、受付の前を横切り、真っ直ぐ俺たちの座っているシートへと向かってくる。

そうして、俺たちの前で立ち止まって一言。

「立て」

問答無用の上官命令。俺にはマゾっ気なんて無いから分からないが、その類の人なら聞いただけで背筋に電流が奔るんじゃないかと思えるぐらいの上官口調。

「はい」

俺は分かっていたということもあり、返事を返してすぐに椅子から立ち上がる。

「は、はい!!」

ゲームでは戸惑っていたコウタも、俺につられたのか、はたまたツバキさんの威圧感をもろに感じ取ったからか、やや緊張しながらもしっかりと返事を返してその場に立つ。

うん、二人揃って最初から叱られなくて良かった、良かった。

……ただ、コウタ、お前はどうして上を向いて立ってるんだ……

胸元に視線を向けないためなのかもしれないが、逆に何言われるか分かったもんじやないぞ？

「よろしい。」

これから予定が詰まっているので簡潔に済ませますぞ」

が、ツバキさんも怒ることなく、話を進めてくれる。自分でもその格好が周囲に与える影響を分かってくれてるのかもしれない。まあ、それなら、ちゃんとした服を着て欲しいものだが。

勿論、思うだけで口には出さない。

出したら最後。きつと、地獄のアナグラ生活が幕を開けるのだ

「私の名前は『雨宮ツバキ』、お前たちの教練担当者だ」

ええ、よく存じております。

原子炉の爆発に巻き込まれても死ななかつたこととか……ていうか、どうしてあれであの3人は死んでないんだ？ 周囲のアラガミは全滅してるのに……うん、気にしたら負けなんだろう。

若干冷や汗の垂れてきた俺と、相変らず上を向いたままのコウタを気にすることなくツバキさんは話を進めていく。

「この後の予定はメデイカルチェックを済ませたのち、基礎体力の強化、基本戦術の習得、各種兵装の扱いなどのカリキュラムをこなしてもらおう」

あい、まむ。

心中返事を返しつつ、言われた内容について少々考えてみる。

基礎体力の強化は、まあ、なんとなく想像がつく。

オラクル細胞投与によって身体能力はかなり強化されているだろうが、それらを扱う体力がなければ意味がない。ゲームでは今一何をしたのかよく分からないものだったが、現実として考えると、何よりも重要な訓練だと思う。

基本戦術の習得は、ゲームでいうスタングレネードを使ったのか、部位破壊とかバーストモードのチュートリアルだろう。

訓練用の動かないヴァジュラに攻撃を当てて結合崩壊をさせてみ

たりとか、バーストモードによって身体能力が上がった時点での闘い方などが学べるはず。確かに、ゲームと違ってアラガミを倒すのに精一杯なら、一々全部位結合崩壊なんて考えてられない。

それなら、一番攻撃が良く通る場所は知つとかなないといけないだろう。……まあ、ゲームと同じなら大体の弱点部位や属性、攻撃方法は知ってるが……

各種兵装の扱いは、基本中の基本。

幾ら身体能力が高くても、神機を使わなきゃアラガミは倒せないんだから。

となると、どの組合せが良かったことだよな……

旧型神機と違って、新型神機はそれぞれの兵装が3種類ずつあり、それらを組み合わせることによって、様々な対応が可能になる。

刀身は、ショート、ロング、バスター

銃身は、アサルト、スナイパー、ブラスト

装甲は、バックラー、シールド、タワーシールド

それぞれに秀でた面があり、劣っている面がある。2からはブーストハンマーと、チャージランスとか言うのが増えたみたいけど……残念ながら発売前にこの世界に来てしまったのでよく知らない。まあ、恐らくまだこの時点では開発されてなかったんだらうから、考えなくて良いだろう。

疑問なのは、漫画内で見受けられるブーメラン型の神機とかだけど、まあ、使うつもりはないから良いや。とりあえず、一番安定しているのは、最初の組み合わせでもある、「ロング・アサルト・シールド」の組み合わせだと思うが……

あ、因みに俺がゲームでよく——というか、ほとんど——使っていた組合せは「ショート・スナイパー・バックラー」の軽装装備の組み合わせだ。防御よりも、回避が専門だったな。

……無印の頃なんて、後半になると防御力は有って無い様なものだったから……

そうになると、下手に動作の遅いタワーシールドよりバックラーの方

が良かったのだ。出来れば、この世界でもこの組み合わせで行きたいとは思うんだが、これだと一発デカイのを喰らうとすぐ死ぬ可能性が高い。

だから、回避しつつ防御力もある程度有った方が良いから、

《【シヨート・スナイパー・シールド】かな》

タワーシールドでも良いが、それだと動きが鈍くなる可能性があるので、シールドが良いと思う。貫通特化で、破碎がほぼゼロになってしまうのは分かっているが、

《スナイパーで遠くから打ち抜く方が安全だし》

ブラストを使って誤射姫の仲間入りはしたくない。ゲームだと笑い話？で済んだけど、実際にあんな頻度で爆発を喰らったりすれば死ぬ可能性が高いと思うから……

それに、もしゲーム通りに進んだとしたら、ウロヴオロスの単独討伐、なんて言う無茶をやらなければならぬのだから、遠距離狙撃に慣れておきたかったりもする。

《破碎は、ソーマとかブレンダンに任せよう、うん。

銃破碎はカノン：いや、エリツクもいるけど、ああ、そう考えるとやっぱり助けた方が良いのか!》

とまあ、俺が勝手に今後の方針を頭の中で決めているうちに、

「今までは守られる側だったかもしれないが、これからは守る側だ。

ツバキさんの話が佳境に入っていた。

つまらないことで死にたくなければ、私の命令には全てYESで答えろ、いいな？」

ゲームでは最初のシーンだったため、全くもって実感が湧かなかつたが、今なら分かる。アラガミに喰われる人たちを目の前で見ながら、隠れている自分をどれだけ情けなく思ったか。必死に助けを求めてくる人たちを振り切って逃げた自分をどれだけ責めたことか。けど、今ならそんな人たちを助けることができる。

それが、ツバキさんの言葉で改めて分かったから、

「ほーに！」

今迄にないぐらい力強く返事を返すことが出来た。

「はいー」

コウタも若干空回りしている節はあるものの、元気よく返事を返している。ここで変に弱い返事を返すよりは全然マシだ。

そんな新人二人の力強い返事にツバキさんはある程度満足そうに頷きつつ、

「よし、いい返事だ。」

早速メデイカルチエツクを始めるぞ」

次の指示を矢継ぎ早に口にしていく。時間が詰まっているのは事実のようだ。

俺の方を見ながら、

「まずはお前だ。」

ペイラー・サカキ博士の部屋に一五〇〇までに集まる様に」

そう言ってくる。

「はい」

「それまで、この施設を見回っておけ。」

今日からお前らが世話になるフェンリル極東支部、通称「アナグラ」だ。

メンバーに挨拶の一つもしておくように」

「はい」

ほんとに「はい」しか言っていない俺。ツバキさんの影響力がそれだけ凄いつてことなんだろうが……

改めて彼女の力強さを感じている俺たちを置いて、ツバキさんは去って行った。

彼女が区画移動用のエレベーターに乗り込み、姿が見えなくなる
と、

「はあ〜」

気が抜けたのか、コウタはその場に座り込む。

「おっかね〜人だな。」

こう、いかにも軍人って感じでさ」

「まあ、そりやそうだろ。」

新人担当の教官が優しくても駄目だろうし」

これでカノンみたいな性格の人が教官だったとしたらそれはそれで逆に怖い。

「というか、コウタ、人の、それも上官の話はちゃんと聞くべきだぞ？ 体反らすなんてどうしたんだ…？」

分かってはいるけど、一応聞いておく。

「だって、あの胸で、あの服装だぞ!？」

クウヤは何も感じなかったのかよ!？」

座ったままだけど、興奮した様子で熱く語り始める藤木少年。周囲に誰もいないから良いけど、ここにもしもアリサがいたら凄まじい勢いで引かれてるぞお前。

「勿論、気にはなつたさ。」

けどそれ以上に気になるところがあつたからな!!」

それに乗る俺も俺か…

「それ以上!？」

あの谷間以上に気になる所なんてあつたのかよ!？」

俺の言葉に驚愕するコウタ。

フフフ、まだまだ甘いなコウタよ。そんなではこの【アナグラ】の女性陣と付き合っていく——別に男女の関係ではなく——など不可能だ!!

「そう、それはあのボトムスの両側だ!!」

「なん、だってえ〜!？」

「フフ、胸元にばかり視線が行っていて気付かないとはまだまだだな」
驚くコウタにそのまま、前述したツバキさんの服の素晴らしさについて熱く語って聞かせてやる。そう、雨宮ツバキちゃん、「ツケテナイ ハイテナイ論」である。……いや、アリサもそうだけどき。

それがどれだけ世の男子に素晴らしい夢を与えてくれるのかについて。

「そ、そうか、目の前にあつた“あれ”は囿で本命は…」

「そう、決して見せない露出プレイにある!!」

本命に見える囿だからこそ誤魔化されるが、まず間違いなく上は囿で下が本命だ!!

女子に聞かれたらほぼ間違はなくドン引きされるであろうトーク。そして、ツバキさんが聞いたらまず間違はなくぶち殺されるであろう背筋が凍りつく恐怖感。昼間っから「アナグラ」のエントランスで何してるんだろうな、俺たちは。

「フツ、分かったらそれで良い」

震えるコウタを見据えながらも、本当はもつと話していたかったが、流石にいい加減人が来るだろうと思いい、無駄に格好つけて話を切り上げる。

「俺はそろそろ行くぜ、コウタ、お前は どうする」

「ああ、俺も適当に回ってくるよ」

「そうか、じゃあ後でな」

「おう!!」

互いに右手を挙げて、更に親指も立てる。出会って僅か1時間も経っていないが、掛け替えのない友を手に入れることが出来たぜ!!

そんな充実感を感じながら、俺はエレベーターを使ってそれぞれのフロアに移動することにした。

ただ今の時刻一三〇〇

博士の部屋に行くまで後2時間程度はある。さあて、どっから巡ろうかな。

3品目 挨拶回り↑重要なのは、やはり食

「こんにちは」

今日からこちらでお世話になることになりました、眞城クウヤです。

よろしく願います!!」

コウタと別れた俺はエレベーターを使い、案内図を見て目的の場所に来ていた。そして、初めての挨拶ということもあり、しっかりと頭を下げ、にこやかな笑みで自己紹介をする。

「はいよ、よろしくね」

目の前にいる歴戦の勇士もそんな俺の挨拶に気を良くしたのか、嬉しそうに返事を返してくれる。

「それで、あんた、何か食べてくのかい?」

「いえ、先程昼は済ませてきたので、また夜にでもお伺いしたいと思います。

今は、今後お世話になるだろうと思っている所に挨拶で回っているところですので」

「へえ、そりや感心だね。

「ここは何番目なんだい?」

「勿論、一番目です!!」

「はは、そりやあ良い心掛けだよ。

よおし、今夜はあんたの就任祝いだ。メデイカルチェックが終わったらすぐに来な!!

良い物を用意して待つといてあげるからね」

「本当ですか!?

ありがとうございます!!」

よっしやーっ!!

これで今日半日また闘えるぞ!!

……いや、闘うたっていつでもメデイカルチェックぐらいしか予定はないんだけどさ……

因みに、今俺がいる場所は食堂で、話している相手は食堂のおばちゃんだったりする。昼を少し回ったばかりだから皆さん仕事に出ているのか、食事を取っている人は少ない。

おばちゃんに今日の夕食を楽しみにしていると告げ、食堂を後にする。

うん、やっぱり食事は大事だよ。それもこんな時代なら尚更。

食堂を後にした俺は、一先ずエントランスに戻ってきた。

意外とおばちゃんと話しこんでいたためか、先程エントランスを出てから30分程経過している。それでも後1時間半ぐらいあるんだけどな。

「さてと、取り合えずいる人にでも挨拶しましょうか」

エントランスにいるのは……何故か真ん中に立つているコウタとゲンさんと……お、

「リックカさんがいる……」

他にもヒバリさんとか、裕福そうな少女とかいるけれど、先に彼女に挨拶をしまおう。

BURSTではレンとの事で、準ヒロインみたいな扱いになっていた彼女だ。

頭にゴーグルを着け、整備で汚れてしまった頬を手で拭う様になっている。上半身が灰色のタンクトップだけだが、あまり色っぽさは感じず、むしろ頼もしさが感じられる姿。

神機の整備を親の代からしてくれている少女である。

「こんにちは、はじめまして。」

今日からお世話になります。

新人の眞城クウヤです」

近づいて、挨拶。

「あ、新型の人だね、はじめまして」
うえい？

なんで俺の顔見ただけで新人って分かるの？ああ、整備班の方にはもう連絡が行ってるってことなのか？

「あたしは楠リックカ、よろしくね」

「はい、よろしくおねがいます」

「ま、神機のことでは何か分からないこととか、不具合とかがあったらすぐに聞いたり、言ってね。」

「神機の整備は最善を尽くすけど、何かがあるか分からないんだし」

「はい、その時は是非」

「そーいや、この人これでも18歳で、今の俺より3つも上なのだ。更には高卒で、割とこの世界では高学歴。正直、もつと年下に見えるが……些細な問題なんだろう。」

「いや、確かにアリサの方がリツカさんより全然年上に見えるけれど……主に胸とか。流石に、防衛班の某女性ゴッドイーターよりはあるけれど。」

「……今、何か失礼なこと考えなかつた？」

「ギクツ!？」

「い、いえ。」

「別に何も考えてませんよ……？」

「じゃ、じゃあお忙しいでしょうし、この辺で……」

「……あ、うん。」

「また今度食事でもしながら、じっくり神機について教えてあげるとね」

「いそいそと逃げるようにして急いでその場を後にする。」

「リツカさんは不思議そうな顔をしていたけれど、仕事を思い出したのかすぐにエレベーターの中へ消えていった。」

「ふう、危ない、危ない」

「アナグラの女性陣に胸の話は禁句、かな……？」

「第一部隊は巨乳ぞろいだけど、それ以外の方々は普通か小さめ（一人例外がいるが）、という訳の分からない括りになってるからな。」

「ま、いいや。」

「おーい、コウタ。そんなところで何してんだよ!？」

「アナグラの女性陣の疑問を打ち切り、エントランス上階部分でうろろしているコウタに声を掛ける。あいつも、挨拶回りをしていると思ったんだが……」

「あ、クウヤ!!」

丁度いい所に!!」

どうやら違ったらしく、若干涙目になったコウタが継りつくように寄って来た。

ええい、暑苦しい!!

「おう、どうした？」

ツバキさん……じゃない、兩宮教官にさっきの話でも聞かれたのか……？」

それだつたら俺もすぐに逃げなければ。

どちらかと言えば主犯格？は俺だしな。

「うんにゃ、さっきの話は関係ないんだけど……クウヤは俺のメデイカルチエックの時間って聞いているか？」

「いや、聞いてないぞ。」

大体、俺のメデイカルチエックの時間言ったら、すぐどっかに行つたしあの人」

「ううー、だよな〜」

俺が頼りにならないと分かり、ガツクリと大きく肩を落とすコウタ。配属初日でいきなり大問題に出くわしたコウタは、近くにあるソファに座り込み、どうしたものかと頭を抱えている。

「別に、直接聞けば良いんじゃないか……？」

ミスかもしれないし。

そう言つて、行動するよう促すが、

「いや、聞いた気はするんだよ。」

けど思い出せないんだよなー

だから余計に、何か言われるんじゃないかと思うと怖くて……」

「あー……」

ドンマイ。

確かに、それだつたら聞くに聞けないな。俺でも無理だわ。

「じゃあ、他の人に聞いてみるのはどうだ……？」

「他の人？」

「ああ。」

例えば……そう」

受付にいる女の人のか。

「はじめまして。」

今日からお世話になります、眞城クウヤと、」

「藤木コウタです」

「よろしく願います」

しよぼくれるコウタを引き摺りながら、階段を降り、受付にいるヒバリさんの所に向かう。ゲームだとツバキさんが近くにいたが、幸いにも今はいらつしやらない。

「はい、こちらこそよろしく願います。」

私は、オペレーターの竹田ヒバリです。

ミッシヨンの受付とかは私がやっていますので、よろしく願いますね」

受付嬢お得意の接客スマイルでにこやかに返事を返してくれるヒバリさん。

……成程、この笑顔にタツミさんは惚れたのか……分かんねえ。

「すみません、早速で悪いんですけど、こいつのメデイカルチェックの時間って分かりますかね?」

「イテツ!？」

……願います」

コウタの肩をポン、と軽い気持ちで叩きながら二人揃ってヒバリさんに頭を下げる。やたらとコウタが痛がっているのが不思議だが……そんなに強く叩いた訳じゃないんだけどな。適合したから身体能力も上がってんのかな?けど、それならコウタも同じはずだし……

「え、と……しよ、少々お待ち下さい」

まさか新人二人がいきなり頭を下げてくるとは思っていなかったのだろう。まあ、普通誰も想像できるわけないか。

戸惑いながらも、悩む俺とコウタを目の前に、手元のモニターを

弄って調べてくれるヒバリさん。

うう、良い人だ。

暫くして、

「えっと、藤木さんのメデイカルチェックは一五三〇からですね。

眞城さんの30分後です」

調べ終わり、時間が判明したのか、これまた眩しい程のスマイルで教えてくれる。

………やっぱり分からんぞ……!?

いや、可愛いとは思うけど、あそこまでスルーされてもこの笑顔が欲しいかと聞かれると、俺はノーだな。

「あ、ありがとうございます!!」

よ、良かった……初日からあの教官に叱られずに済んで……良かった!!」

時間が分かったコウタは心底安心したようで、受付にへたり込んでしまった。

「あ、あの……?」

受付にもたれかかっているコウタに戸惑うヒバリさん。そりやそうか。いきなり新人がこんな態度を初見の相手を取るんだから戸惑って当然だ。

「大丈夫ですから、気にしないでください。

ちよつと色々あったもんで……ほら、コウタ。時間も分かったんならしつかり立てよ」

じゃないと、後で某第二班の隊長に殺されるぞ……!?

とは、今はまだ知らないはずなので言わないが、どちらにせよ、新人が取って良い態度ではない。

「あ、ああ……」

気を持ちなおしたのかノロノロと置き上がるコウタ。

「それじゃあ、これで失礼します」

「ありがとうございます」

「え、ええ」

不安そうに俺たちを見送るヒバリさん。

そりやまあ、第一印象は良くはないから仕方ないが……

「ま、時間も分かったし、良かっただろ。」

取り合えず心配事は消えたんだしな」

「そ、そうだよな。」

うん、時間は分かったんだから、後は遅れないようにすれば……」

「じゃ、俺は行くからまた後でなく」

「おう、ありがとな!!」

取り合えず一段落したので、コウタと別れ再び挨拶回りに。

近場にあつたので、よろず屋さんや、迷子になっていられると思われる裕福そうな少女——エリナちゃん（かの上田氏の妹である）——それに、歴戦の古兵である百田ゲンさんなど、一通りの人物に挨拶して回った。

よろず屋さんは今後のこともあるから商品チェックも兼ねて結構な時間話し込んだし、ゲンさんには戦場での心構えを教わることが出来た。

前者は流石に序盤ということもあつてか、品揃えはまだまだ初期段階のままだったけど……

《まあ、新人がいきなり後半の制御ユニットとか買えても逆に危険だろうしな……》

というか、そんな高額の商品をいきなり買える訳がない。

今の俺の所持金は500fc程なのだから。無印の値段設定だったら幾らでもfcは溜まるが流石にそんなことはないだろう。

あとは……ミッションに関係ない品もいくつかあるな。

まあ、個人の趣味——主に現第一部隊リーダー——の為の酒とか煙草とか……お、携帯音楽プレイヤーも何故かある。

そういや、ゲームで後半は素材集めついでに高額報酬のミッションをクリアしてればfcは知らぬ間に溜まっていったから良かったけど、こつちではあんな鬼畜ミッションってどうなってるんだろうな……?

リアルで難易度10までの『ピルグリム』やら『帝王の骨』、更には『貴人の食卓』辺りはあってもおかしくない——BURSTで大分楽

になった——が、チャレンジミッションとか、DLCミッションの、『鬼退治』とか、『ゴッドイーター』もしくは『ゴッドイーターバースト』、『百鬼夜行』、『ピルグリム2』なんてやらなきゃいけなくなったら軽く死ねる気がする。ゲームでは割と楽だった…？けど、実際に異常進化したハンニバル二体とかやりたくない。

ミスってAエリアに行ったらコクーンメイデンが復活するし…

閑話休題

ゲンさんから聞いた戦場での心構えは、流石正規軍出身の人物だけあり、ある意味ツバキさんよりも余程軍人らしいものだった。

それが若者には若干煙たいのだろう。普段からそんな反応を若者にされているせいか、熱心に話を聞く俺に対して、

『お前は、変わったやつだな…：まあ、期待しとるぞ、新入り!!』

ゲンさんは、逆に反応に困ったようだった。それでも、戸惑いながらも笑って励ましてくれる辺り良い人だ。

さて、そんな風にあいさつ回りをしながら時間を潰していると、メデカルチエツクまで後20分程となった。

《そろそろ行くか。

博士の研究室だから、ラボラトリ、だよな…？》

エレベーターに乗ってラボラトリの階のボタンを押す。

…：ゴウン

重低音が鳴り、エレベーターが作動して動いていく。

ああ、そういうや新人区画にシユンがいるはずだが…

《ま、いいや。

ガキだし》

とても18歳とは思えない言動や行動をしているロングブレード使いの第三部隊所属神機使い——小川シユン。

BURSTではリンドウさんが最終的に新型？になったため、唯一の純粋な旧型ロングブレード使いである。が、それだけなので、結果として殆どゲームでは使われないキャラだったりする。

…：一応、カレルと揃ってヴェノム要因ではあるが…

《実際、ロングならリンドウさんとか、アリサとかいるからな…

タツミさんとか、ブレンダンさんなら無印の頃から割かし使ってたけど》

第三部隊だと、他にはカレルとかジーナさんがいるが……

うん、結構性格に色々抱えてる人が集まる部隊なのかもしれない。ジーナさんは普段は良い人だけど……それ言ったら、件の誤射姫もそうか。

「まあ、いずれ会う機会はあるだろう」

別に今急いで会わなくても良いや。あまり惹かれるものもないので、新人区画のボタンは押さず、そのままラボラトリへ。

……ゴウン

再び重低音が響き、エレベーターが停止し、扉が開く。
と、

「あ……はじめまして……」

そこには度々話題になる某有名ゴッドイーターの姿が。

見たことない人間の顔に、やや戸惑い気味。

どんな遺伝子を持ってすればそうなるのか——ピンク色の髪。その髪を編み込んでカチューシャの様な形にしたショートカット。

どことなく森を彷彿とさせる緑のワンピースに、黒のレギンスと白に茶色のベルトを付けたブーツ。

右腕にはゴッドイーターの証である赤い腕輪がある。

うん、間違いない、台場カノン嬢だ。

無印の頃から圧倒的な誤射率を誇り、BURSTでもそれはあまり変わらず。(…まあ、多少マシになったが)戦闘時との性格のギャップが一番激しい女性でもある。一回、見てみたいけど……それには同じミッションに行かないといけないわけで……

あー、うん、止めとこう。

ブラストでふっ飛ばされてるうちにヴァジュラの突進喰らったら、ほぼ間違いなく即死になる気がする。機会があれば行くぐらいの気持ちでいりゃいいや。

確か、そんなミッション有ったはずだ。報酬fcが548(誤射)という部分で爆笑したのを覚えてるし。

一応こんな見た目でも19歳で、ゴッドイーターになってからまだ1年ちよい。

無印からBURSTに移行する際、第三部隊の女性スナイパーが減ったのに対し、こちらの方は増やされたという疑惑がある。新人気分が抜けていないからか、未だにアナグラの中で迷子になるらしいし、基本全員に（日常生活では）敬語で話すとのこと。

母と妹がいるらしい。

……因みに、衛生兵（同じ職種にサクヤさんがいる）

「は、はじめまして」

そんなことを思い出しながら、戸惑いつつ挨拶を返すと、

「ああっ、新人の方ですよね！」

2人新しい方が来るって言ってたっけ……」

伝達事項で回っていたのだろう、思い出した様子でカノンさんは顔を明るくした。

「あ、はい。」

今日からお世話になります、新人の眞城クウヤです。

よろしく願います」

頭を下げつつ、本日何度目かの自己紹介をする。

割と慣れてきたかんじがするが……そりやそうか。

「はい。」

私は、防衛班第二部隊所属の台場カノンと言います。

こちらこそよろしく願います」

頭を下げる俺に対して自身も深々と頭を下げながら自己紹介をしてくれるカノンさん。……先輩にも年上にも見えないのに、さん付けで呼んでしまうのはやはりゲームを知っているからだろうか……？

すごいよなー、あの二重人格。

「新人さんで、ここにいらっしゃるってことは……今からメデイカルチェックですね！」

「はい、そうです。」

一五〇〇までに榊博士の部屋に行くよう、雨宮教官に言われまして……」

「それなら、この廊下の突き当たりがサカキ博士のラボですよ」

そう言つて、エレベーターの正面から一直線に伸びる廊下を指さすカノンさん。

一応、ゲームと違って他にも通路や部屋はあるが、まあ今は関係ない。居住区画だったら他の部隊の人たちの部屋もあるから関係あるかもしれないが、ラボラトリだったら実験用の部屋とかだろうし……あ、病室もあったな、そういや。

「ありがとうございます。」

今後、ミッションで同行させてもらう機会があつたら、その時はよろしくお願いします」

「はい！」

新人研修、頑張つてくださいね！」

にこやかに手を振り、俺を廊下の奥へと送り出してくれるカノンさん。

……その笑顔が怖い。いや、今は大丈夫だと思っけどさ……

取り合えず、俺も笑いながら手を振り返し、廊下を奥へと進んでいく。ふと振り返ってみると、なんとカノンさんはまだ手を振っていた。

……ほんと、どうして“あれ”が“ああ”なるのさ……!?

再び手を振り返しながら、俺は非常に居心地の悪い気分になるのだった。

4 品目 支部長って暇なんだろうか？

カノンさんと別れた俺は、そのまま廊下を奥へと進み、榊博士の部屋へと向かう。扉の前に到着し、

コンコン、コンコン

一応ノック。

「はい、どうぞぞ」

「失礼します」

返事があつたので、こちらも入室の時によく使う言葉を言いつつ扉を開き中に入る。

部屋の中にいたのは二人の男性。

一人はモニターとかキーボード類に囲まれた椅子に座っている洋服と和服を合わせたかのような若作りの男性——ペイラー・サカキ博士。

こんな顔でも47歳なんだよな……童顔ってレベルじゃないぞ？
改めて見ると、上と下の服の差がすごいことで……なんだよ、このチェック柄の和服みたいな服。派手なのか地味なのか分からんぞ。

というか、細目で開けているかどうかとも分からんのに眼鏡してる意味あるのかよ……？

……結論、頭は良いかもしれないんが色々な面で疑問の多い人物。

もう一人は白いコートに黒いマフラーという出で立ちに端正な作りの顔を乗せたテレビでよく見る顔——ヨハネス・フォン・シツクザール支部長。

45歳、こちらもサカキ博士程ではないけれど若作りだ。この時点だと割とまともな支部長に見えるのだから侮れない。

まあ、原作通りだ。ひよつとしたら支部長辺りは忙しくて来てくれなかつたりしないかと期待したのだが……そりゃ、いるわな。

「ふむ……予想より785秒も早い。」

よく来たね「新型」くん」

「は、はあ……」

原作でも思ったけど、細かいなと思う。大体、予想する意味が全

く分からないのだが。

そんなことするぐらいならサツサと準備しとけ……ああ、予想より早く来たから準備が出来てないのか……

俺が漏らした戸惑いなど無視して、サカキ博士は言葉を進めて行く。

「私は『ペイラー・サカキ』。

アラガミ技術開発の統括責任者だ。

以後、君とはよく顔を合わせるようになると思うけど、よろしく頼むよ」

「あ、真城クウヤです。

こちらこそ、よろしくお願いします」

「ああ、よろしく」

自己紹介していただいたので、俺も自己紹介。とつくにプロフィールは送られていると思うけど、一応初対面なわけだし、しっかりしておかないと。

機械を弄りながら軽い調子で言葉を返してきた博士は、そのまま言葉が続ける。

「さて、と……見ての通り、まだ準備中なんだ。

ヨハン、先に君の用事を済ませたらどうだい？」

いや、何してるのかなんて分かりませんから。

見てるだけじゃ準備不足かどうかなんて素人の俺には全く分かりません。多分、隣にいる支部長とかリツカさんなら分かるのだろうが、今日初めて配属された新人が分かるはずないでしょうに。

とまあ、そんなことを考えている俺を余所に、話を振られた支部長は億劫そうに博士に言葉を投げかける。

「サカキ博士、そろそろ公私のけじめを覚えて頂きたい」

が、支部長の言葉になど、まるで反応せず博士はひたすら機械に何かを打ち込み、それをモニターでチェックする作業に没頭していた。

……あんたが振ったんだから反応ぐらいしてやれよ。

そんな博士の様子に溜息を洩らしたものの、それ以上何かいうこともなく、支部長は博士から俺に視線を戻して、これまた自己紹介。

なんか苦勞してるんだなー、と支部長に同情。計画はともかく、下にいる技術屋のトップがこれでは大変だろう。

「適合テストではご苦勞だった。」

私は「ヨハネス・フォン・シツクザール」。

この地域のフェンリル支部を統括している」

「改めまして、眞城クウヤです。」

よろしく願います」

ラスボスだけれど、一応この支部では最高権力者なのだからしつかり挨拶。明確な行動を示すようになるのはシオが出てきてからだから、それまでは良好な関係を築いていけたらと思う。……最終的には裏切りますけどね。

「改めて、適合おめでとう。」

君には期待しているよ」

「ありがとうございます」

期待している、と言われても、最終的には裏切るんだからなく

なんだろう、今のうちに「御期待に沿えず申し訳ありませんでした」ぐらい、心の中で言っておいた方が良いのだろうか？ひよつとしたら心変わりして支部長側に付くのもありかもしれないが……うん、ないな。

「彼も元技術屋なんだよ」

パネルを弄る手を止め、唐突に博士が会話に割り込んできた。

「ヨハンも『新型』のメデイカルチェックに興味津々なんだよね？」

「貴方がいるから、技術屋を廃業することにしたんだ……自覚したまえ」

「ホントに廃業しちゃったのかい？」

「ふっ」

新人の前で何やら裏のある会話をする組織のトップと技術屋のトップ。

やめい。

支部長、そこで明らかに含みのある笑みをするのは駄目でしょうが。例えば俺が何も知らなかったとしても絶対あんたに何かあると思

うぞ。実際、初めてゲームをした時は『あ、こいつ絶対暗躍してる』って思ってたし。

止めたいけど、ここでおかしな発言をする方がマズイだろうからひたすら真面目な顔で沈黙。……（個人的に）気まずいっただらありやしねえ。

「……さて、ここからが本題だ。」

我々フェンリルの目標を、改めて説明しよう」

やたらと含みのある会話と、思わせ振りの間を終え、支部長が俺に向き直って再び説明を始める。二人の間に流れる空気はごく普通のものに戻っているのだが……俺だけ疎外感が半端ねえ。

「君の直接の任務は、ここ極東地域一帯のアラガミの撃退と素材の回収だが……それらは全てここ、前線基地の維持と、来るべき『エイジス計画』を成就するための資源と」

「この数値は!？」

「!？」

「……うんっ!!」

説明真最中の支部長の言葉を遮る博士の驚愕の声。

つい、そちらの方を見てしまうが、支部長の咳払いで元に戻す。つと、確かに支部長が説明しているというのに博士の方を向くのは駄目だな。博士が大きい声で言うから反応してしまったじゃないか。

「エイジス計画とは、簡単に言うと、この極東支部沖合、旧日本海溝付近に、アラガミの脅威から完全に守られた『楽園』を作るという計画なのだが……」

「ほほっ!？」

「……」

「……………」

再び説明を遮る博士の声。

今度は支部長もスルー。

タイミングが良かったこともあるのだろうが、何も言わず黙り込む。よし、今度は博士の方を向かずに済んだ。

「この計画が完遂されれば、少なくとも人類は当面の間絶滅の危機を

遠ざけることができるはず……

「すごい!!これが新型か!!」

……ペイラー、説明の邪魔だ」

が、いい加減鬱陶しかったのか、ついに支部長が博士に注意をした。
……まあ、確かに説明を聞いている方としてもうるさかったが。

「ああ、ゴメンゴメン。」

ちよつと予想以上の数値で舞い上がっちゃったんだ」

が、支部長の注意を聞いても全く悪びれる様子はなく笑いながら博士は返事を返す。そんな博士の反応は分かり切っていたのか、支部長は溜息を溢すのみでそれ以上言及することはなかった。

………なんというか、本当にお疲れ様です。

「ともあれ、人類の未来のためだ。」

尽力してくれ」

エイジス計画自体は所詮隠れ蓑でしかないので、その計画について尽力するつもりはないが、俺たち（ゴツドイーター）の人生が人類の未来のためにあるということについて異論はない。

だから、

「はい」

しっかりと力強く答える。

少なくとも、俺は、ゴツドイーターが人類の未来を背負っているという点に関しては支部長と矛を交えるつもりはない。問題は、その力をどの様に使っていくのかということなのだから。

俺の返事に満足したのか、しっかりと支部長も頷き返してくれた。

「じゃあ、私は失礼するよ。」

ペイラー、あとはよろしく、終わったらデータを送っておいてくれ」
そして、用事は終わったのか支部長は博士に声をかけ、部屋を出て行く。支部長の言葉に左手を振って合図とし、支部長を送り出す博士。その間も右手は絶え間なくキーを操作しているから、流石だと思
う。

「ああ、もう少し掛かるだろうから、適当に腰掛けて待つと良い」

「ありがとうございます」

やや早めに来ていた事もあるので準備が出来ていないのも仕方ない、か。

特別博士を責め立てるつもりはないので、そのまま入り口横にあるソファーに向かい、座る。

ただ、何も与えられず待つていてくれと言われても暇で仕方ない。これがコウタの部屋であったりすれば適当に何か弄っているんだが、博士の部屋だから勝手に弄る訳にもいかない。なんか、明らかに触ったらマズイであろうものがチラホラ見受けられるし……

仕方ない、さつき支部長が言つてた事について考えてみますか。

先程支部長が態々直接教えて下さった俺の役割は、『ここ極東地域一帯のアラガミの撃退と素材の回収』とのこと。

つまりは討伐班に回されるわけだ。

まあ、リンドウさんがいるというのでも大きな理由だろうし、立場上はゲームの主人公なのだから分かり切つていた事だ。だから、今更とやかく言うつもりはない。

問題は、前線基地の維持とエイジス計画を達成するために俺の回収した資源がどれほど使われるのか、ということだ。前線基地の維持⇨アラガミ防壁の強化や人員への支援だろうし、エイジス計画⇨ノヴァの餌だろう。前者は必須だろうから特に渋るつもりはないが……後者はなあゝ

裏を知っているからあまり協力したくないのが本音である。だが、エイジス計画は極東支部設立の最重要課題となっている以上、表向きは協力しないといけない。

……出来れば質の悪いものを回したい。コアに関しては一神機使いが持つていても仕方ないので幾らでも回すが、石、晶、神酒類や、各アラガミのレア素材は勘弁して欲しい。

ゲームだったら連続パパとかアイテールとか、ウロヴオロスとかやってたけど、リアルでやつたら絶対死ぬる。……眼石採るために何回あいつとやり合ったか。あれがないと、アンダルが強化できないからシヴァが作れないんだよ……ひよつとして、リアルであれをやらなきゃいけないのか？——うわー、やりたくねー

つーか、改めて考えると、個人的には、そんな頻繁にパパとかウロヴオロスがうろついて欲しくない。

と、アラガミはともかく、レア素材はしっかり下にも回して欲しいのだ。

……まあ、その辺りの配分は上が決めてるんだろうけどさ……

シクシク、所詮俺は一兵士にすぎないのだ。討伐班だから、幾らか融通してもらえとは思うけど……

「よし、準備は完了だ。」

そのこのベッドに横になって」

俺が改めて現実に打ちひしがれていると、準備が終わった博士が指示を出してきた。

「分かりました」

ソファァーから立ち上がりサツサとベッドまで移動して靴を脱ぎ、寝転がる。ゴッドイーターなら誰もが通る検査だから特に心配はしていないが、ゲームでは描かれていないので、若干不安だったり。

「少しの間眠くなると思うが、心配しないで良いよ」

「はあ」

寝転がった俺に近づいて来て、何やらケーブルとかを取り付け、薬を飲ませたりしながら笑う若作り。和ませてくれるのかもしれないが、逆に不安が増したぜ。

「う……」

即効性の薬だったのか、急激に眠気が襲ってきた。

「戦士の束の間の休息というやつだね。」

予定では10800秒だ、ゆっくりおやすみ」

まどろみの中で博士の声だけが、やけにはつきりと響いてきた。

……普通に3時間って言えばいいじゃねえか。

目覚めると、当然博士の部屋。

隣にはアホな面して『……バガラー』とか寝言呟いている黄色い

旧式銃型神機使い。そういや、こいつもメデイカルチエツクだったか。

「やあ、起きたようだね。」

これ、君の部屋の鍵だ。番号は鍵に書いてあるし、新人区画に行けば案内板も出ているから分かるはずさ」

「ああ、ありがとうございます」

寝惚た顔で博士から鍵を受け取り、

「お疲れさまでした」

挨拶をして部屋を出る。

そのまま歩いてエレベーターに乗り込み、新人区画の階のボタンをプッシュ。重低音がエレベーター内に響き、動き始める。

ボタン近くの壁に寄りかかりながら渡された部屋の鍵を見る。カード型、所謂カードキーに書いてある部屋の番号は灰色の文字で『000』。

……うえい？

どんな反応をするべきなのか困る。が、新人区画に到着するとこの番号の理由が良く分かった。

「え〜と、『000』は……」

エレベーターから降り、新人区画の案内板を見ると、エントランスから右に伸びる部屋が黒い文字で001〜となっており、左に伸びる部屋は白い文字で001〜という書き方になっている。

つまり、新人区画で言う部屋の言い方は、多分、「黒の『0000』か「白の『0000』」と言うのが普通なのだろう。

……そんな、太極図じやあるまいに……

なのに、何故か俺だけ灰色……エレベーターの前から真っ直ぐに伸びる通路を突き当たったところにある部屋だ。ゲーム通りだし、分かりやすくいいのだが……

《なんか、仲間外れにされた気分……ぐすん》

いらんところで特別扱いされてもなー

あ、因みにゲームでのコウタの部屋が『黒の001』、アリサの部屋が『白の001』でした。

取り合えず、部屋の位置を確認した俺はそのまま食堂に直行し、

「おばちゃん!!」

「お、来たね。」

ほくら、あなたの就任祝いだ、たくと喰いな!!」

「お、美味そう!!」

ありがとうございます!!」

「お代は出世払いにしとくから、しっかりと働くんだよ!!」

「はい!!」

昼間に頼んでおいた食堂のおばちゃんの料理を堪能した。

こんな御時勢だから以前の世界の様な御馳走ではないけれど、この世界に来てからの今迄の食事情を考えると、今回の食事は本当に御馳走に見えた。

ふんわりと、更に光すら漂っているように見える炊きたての白米。

生産量も減ったと聞くのに、出汁をふんだんに使い、豆腐やワカメなどの具がたくさん入った味噌汁。

かけられたソースが肉と絶妙に絡み合い、濃厚な味を引き出すハンバーグ。

ごまが振り掛けられ、茶と赤の色彩が豊かなきんぴらごぼう。

こちらの世界ではあまり見かけなかった円筒状の器に蓋が載った料理。

蓋を取れば芳醇な出汁の香りが広がり、黄色の海の中で泳ぐ椎茸や蒲鉾、鳥肉、ギンナン、ユリ根といった具材の上にミツバが乗った茶碗蒸し。

それに、デザートなのだろう、胡麻団子が付いて来ている。

……何度も言うが、スゴイ!!

以前の世界では、御馳走というより、家庭料理という感覚かもしれないが、これだけの食事をこの世界で作ろうと思っただけ金がかかるか。

「いただきますっ!!」

逸る心を抑えながら、まずは一口。ナイフで切ったハンバーグを口の中へ。

ぬお〜!!

ソース自体も美味しいのに、肉汁と混ざり合って更に味を上の次元に持っていつている!!肉の旨みが消えることなく、尚且つソースの良さも消えていない。互いが互いを支え合っている!!じんわりと噛み締めれば更に肉の旨みが溢れてくるのがまたなんとも!!

この世界では、調理法などはデータとして残っているが実際に調理できる人間は限られている。材料の不足もあるし、料理に手間暇かけている余裕が無くなったのだ。

悲しいことだが、時代背景上仕方のない事。

だが、今食べている料理は間違いなく以前の世界でもプロとして通じるそれ。この食堂のおばちゃんは何れほど技術があるというのだ!?

ハンバーグだけじゃない。

ご飯も、みそ汁も、きんぴらも、茶碗蒸しも、デザート胡麻団子も、どれもがハイレベル。

正直、弟子入りしたいぐらいである。

気がつけば、ゆつくりと楽しむことなく、全て食べ切ってしまった。いた。

……おそろしい。

食器を返却口を持っていく一步が惜しい。出来ることなら、まだまだ食べていたいのに……!!

「ごちそうさまでした!!」

「あいよ、どうだった?」

「最高、でした!!」

「そうかい、そりゃよかったよ。

また、何かあったら言いな。

あんたぐらい、嬉しそうに食べてくれる人ならこっちも作りがいがあるってもんさね。記念の時は私たちが総出で祝ってあげるから

ねえ」

「ありがとうございます!!」

深々と頭を下げ、おばちゃんたちに挨拶をすると、調理上の奥の方から、

「頑張んなく」

「いつでも来ると良い」

「良い食材が来たらメールするからねえ」

等々暖かい声が。

緩む涙腺を抑え、何度も何度もお礼をしながら俺は食堂を後にした。

……うん、一日一回、必ず来よう。例え、普段の材料が酷くても、ここなら良いものにしてくれる!!

5品目 情報確認って大事だよな

「えーと……」

食堂から意気揚々と自室に戻ってきた俺は、早速ターミナルを弄っていた。

神に頼んでおいた冷蔵庫については備え付けのものであったが、確かに部屋に置いてあった。中には神からの手紙——というか説明書が入っており、

【望む食材を冷蔵庫に付いているモニターに入力すれば、それが現れる。

また、お主の部屋が変わった場合、冷蔵庫の機能もお主の部屋にある冷蔵庫に移動する】

と書かれていたので、早速確認。

見れば、確かにモニターが付いており、一番下の見えにくい位置に【入力】とだけ書かれた表示があった。そこに名前を打ち込むと、確かに食材や飲み物は出てきたので、取り合えずよしとした。

一応キッチンもあるにはあるが、あまり大きなものではないので手の凝ったものは難しそうだ。調理器具が一通り揃っていたから、料理する際に器具が無くて困ることはないであろうことには、素直に感謝だ。

そんなこんなで確認も終わり、元々少なかった荷解きと整理もサツサと終わってしまったので現在はターミナルを弄っているのである。

ターミナルには普通のターミナルとしての機能と、アーカイブとしての機能がある。

前者はゲームの機能を想像してもらおうと分かりやすいと思うが、所持品の整理やアイテム変換、装備の強化や合成、変更が付いての発注、バレット作成・編集機能、メール機能、各種アラガミ、スキル、単語などのデータベースが付いている。

所持品の整理については、預けるものと引き出すものを事前に発注しておけば、預けるものは受付に渡せば良いらしく、引き出すものはミッションに向かう際に支給されるとのことらしい。ゲームの様に

その場で済ませられないのが残念と言えば残念だが、実際はそんなものだろう。

勿論、組織だから管理はきちんとしなければならぬだろうが、戦闘に影響のある範囲であれば多少融通が利く。素材類は、普通は帰還した際に引き取られ、そのまま倉庫の中へ、とのこと。持っただろうが、どうしようもないだろうから別に構わないが……ああ、何かに必要となる場合は預けなくても良いらしい。そうじゃないと、シオの食事とかドレスは出来ないだろうから非常に助かる。

ただ、ここに書いてある説明では、アラガミ装甲の強化に必要な素材を持っていた場合は徴収されることもあるらしいが……まあ、ごく稀。

アイテム変換も一応あるにはあるが、リストが殆ど空。

研究が進めばきつと埋まってくれと信じよう……うん。そうじゃないと、流星に原作知識が抜け落ち始めてる俺としては、キツイからな。必要だったアイテムの変換は大体覚えているが、あまり使わないアイテムについては、かなり曖昧。ゲームで使わなかったアイテムが現実では必要になるかもしれないから、慎重にいくとしよう。

あ、変換にかかる費用は殆どゲーム通りだった。

装備については、殆ど空。

【強化・合成・変更の発注】という項目があるにはあるが、まだ何も素材を得ていないのでやることがない。

説明文だけ読むと、強化と合成はほぼゲーム通り。素材を集めて、必要な素材が集まれば強化や合成の発注が可能になるのだ。流星にゲームの様に一瞬で強化や合成が出来るわけではないが、強化であれば約1日、合成であれば3〜4日程で完成させてくれるらしい。なので、アラガミに対応した装備を新しく作る際には、前もって発注しておいた方が良い様だ。変更は、出せばサッサとやってくれる模様。

任務に出る際に発注しておいた装備に変更してくれるようになっていくとのこと。

……まあ、今は変更するほど装備の数がある訳じゃないんだがね

……

一応、前から考えておいた【ショート・スナイパー・シールド】の初期装備である【ナイフ・ファルコン・支援シールド】の構成で発注はしておいた。

新人が初日にいきなり装備の変更を頼むのもおかしいことだと思われるだろうが、出来るだけ早く装備の構成に慣れておきたいのも事実。戦場での慣れは油断に繋がるかもしれないが、武器に関して言うのであれば、早いに越した事はないだろう。

バレットは大体ゲーム通りだ。

初めにメニュー画面が表示され、そこから、

- ・バレット作成
- ・バレット編集
- ・バレット複製
- ・バレット名変更

の、項目にそれぞれ移動できる。作成や編集については、操作方法は違うものの、設定のやり方などはゲーム通りだったし、画面上で問題なく試射も可能。ただ、作ったり、編集したバレットを完成させ、実戦で使うとなると、自分の手元にやって来るまで大体2〜3日かかるとの事。この辺りは装備の強化や合成とほぼ同じなのだろう。

ああ、何故か「毒」とか「麻痺」属性とかにも普通に弾丸以外のバレットがあつたな。上手くいけば、一発でアラガミを「毒」などの状態異常に出来るバレットが出来るかも。まあ、今は金がないのであまり弄らないようにしないとな。

弾丸の種類や属性についても、ゲームという初期の状態。時間が進めばこの辺りはなんとかなるだろう。それまでは普通に配給されているバレットで良いや。

メール機能は普通にメール機能。

ゲームでは受け取るだけで送れなかったが、流石にそんなことはなく、こちらからも送れるようになってる。今はまだツバキさんとか、管理部などの必要不可欠なメンバーしか登録されていないが、初日だしそんなものだろう。

データベースは、まあ、百科辞典みたいな感じだな。

アラガミの写真と説明文、後、効くであろう攻撃方法。

この辺りは結構曖昧な説明文も多いし、下手に信用するより、あくまで参考程度に考えといった方が良いな。一応、ヴァジユラとか、コンゴウ、シユウ師匠といった一般的な所は割と詳しくデータが載っている。だが、墮天種や、スサノオを始めとした接触禁忌種のアラガミとかの情報になると、乗っけていても写真が無く、説明文だけのものもあるし、そもそも説明文自体が無い方が多い。説明文があったとしても、すごく曖昧で参考にならない。

スサノオみたいな有名どころ？はあるが……他の第一種接触禁忌アラガミであるカリギユラやラーヴァナ、それに当然であるが、未だしっかりと確認されていないであろうアラガミであるパパさんや、ツクヨミ、ハンニバル、無印のラスボスであるアルダノーヴァは名前すら載っていない。アマテラスっぽいばやけた写真はあがあるが、これだけだとウロヴオロスなのか、墮天種なのか、アマテラスなのかよく分からない。パパさんって、リンドウさんが昔ロシアでやり合ってるはずなんだけどなくこれなら、まだ、俺のゲーム知識の方が使えるわ。

ちよいちよい、ゲームでは見たことのないアラガミが載っているから、それらを参考にするぐらいだろうか……？

スキルとか単語は本当に説明だけだ。

単語の方はまだしっかりと説明されているものが多いが、スキルの方は凄く曖昧。

……俺は大体名前で見分けるから良いけど、他の新人だったら苦労するぞ、これは……

仕方ない事なのかもしれないが、極東支部の今後が非常に不安である。

取り合えず、ターミナルの現状としてはそんなところ。

他にはアーカイブと言う機能が付いているが、こちらは殆ど個人の趣味嗜好の為に使われる機能だ。映像や画像を保存したり、音楽の再生、それと、軽い戦闘マニュアルなどが用意されている。ここで『バガラリー』を見たり、腕輪に残されたデータを再生したりするのだろう。

お、音楽リストの中に『No Way Back』とか『無慈悲な王』、それに『Over the clouds』が入ってる。

流石、GOD EATERの世界だぜ!!



「んーっ!!」

寝ていた体を起こし、思いっきり伸びをする。

と、昨日とは何か違う。

……何か体が昨日より軽いぞ……!?

体が軽いし、妙に力が湧き上がってくるというか……

急いでベッドから降り、身体の確認をする。軽く跳ねたり、壊しても大丈夫な物を軽く握ってみたり……

跳ねると勢い良く天井に激突し、その場で更に足を動かすとまさかの空中ジャンプが可能となり、天井にめり込みそうになった。

物——取り合えず手近にあった漫画雑誌——を握ると、あっさり貫通して抉り取ってしまった。

……うええええ!!

いや、いくらなんでも上がり過ぎだろこの身体能力!!

若干どころじゃない、マジでドン引きするレベルだぞこれ……

リンクバーストLv3ってこんなに強かったか?

……ま、いいや。

神に頼んでおいた特典か、それとも単にオラクル細胞を投与したからか……まあ、多分両方なのだろう。与えられた力が異常なのは問題ではあるが、それも制御すればいいだけの話。かなり疲れるだろうが、自分で頼んだことだ。制御しないでどうする。

驚愕して呆けている自分を奮い立たせ、サツサと服を着る。

着ながら、

《そういや、あの時はあんまり真面目に考えてなかったけど、リンクバーストLv3ってどれぐらい性能がすごかったっけ……?》

ふと、思い返す。あの時は取り合えず死なない様になって言うのと、

ばれない為にもGOD EATERの世界観の中で強化した方が良いという考えが先行し過ぎていて、実際問題、身体強化がどれだけされるのかあまり考えていなかったからな……

この際だ、しっかり思い出してみよう。

えくと、確かリンクバーストはバースト状態を更に強化した感じだったから、バースト状態の能力が引き継がれているはず、で、良かったよな……？

……バースト状態の効果は、

- ・ ステップの移動距離が延長
- ・ ステップの速度が上昇
- ・ 空中ジャンプが可能
- ・ 各アクションのスタミナ消費量が低下
- ・ 刀身の攻撃スピードが上昇
- ・ 剣攻撃の攻撃倍率が上昇
- ・ ショートブレード使用時は、剣攻撃で敵を状態異常にしやすくなる

る
・ バスターブレード使用時、チャージクラッシュの溜め時間が短縮される

- ・ オラクルゲージが自動的に回復
 - ・ 攻撃を受けても吹き飛びにくくなる。
 - ・ 受けるダメージが軽減される
- で、リンクバーストはそこに、

加
・ 強化されるほど、スタミナ消費の軽減効果とOP自動回復量が増

で、
が付け加わっていたはずだから……身体能力の強化以外に、デフォ

- 【ステップ距離→】・【空中ジャンプ】・【アスリート(Lv3)】・【全力攻撃(スタミナ消費なし)】・【状態異常攻撃→(ショート限定)】・【チャージ速度→】・【総合被ダメージ減少】

上記のスキルが付いていることになり、スキルには存在しないが、
【ステップ速度→】・【剣攻撃速度→】・【オラクル自動回復量→(Lv

3)・【ひかえめ(おおげさの逆)】

とでも言うべき能力が備わっていることになるのだろう。

(“Lv3”とは、リンクバーストLv3の身体能力なので、効果が強化されたという事)

……いや、はつきり言ってチートじゃね、これ…?

今迄特に気にも留めていなかったが、改めて考えると、神機を装備しなくてもこれだけのスキルが元々付いているのであれば、余程酷い装備じゃない限り大抵の敵には勝てる気がする。勿論、油断しなければ、だが。

更に言えば、スキルじゃなくて身体能力自体も、多分並のゴッドイーターをはるかに凌ぐ性能になってしまっているのだろう。

未だ訓練をしていないし、実戦に出ていないから本当かどうか分からないが、確かGOD EATERの主人公は適合率が高く、身体能力がかなり強化されていたはずだ。だからこそ、あんなに早くリーダーになれたのだろうか……

そして、主人公の立場になっている俺にゲーム通りの効果が本当に起きているのだとしたら、そりゃあ、凄まじい事になるだろう。ただでさえ高い主人公補正の身体能力に、常時リンクバーストLv3状態の強化が為されているのだから。

濃縮アラガミバレットが撃てるわけではないが、これだけの力が元から備わっている。

しかも、捕食したり、受け渡し弾を貰ったりすれば、更なる強化が可能になるのだ。単純に、バースト状態の恩恵として受けられる全ての能力が倍になると考えてもらえると分かりやすいだろう。

《……こりゃ、強化パーツとか制御ユニットの選び方も大事だぞ……》

今まで何となく頭に思い浮かべていた構成を一度やり直さないといけない。

《身体強化は十分だから、能力強化系か……?》

ふと身体を見ると、いつの間にか着替え終わっていたことに今更ながら気付いた。時計に目をやると、着替え始めてから5分が経過し

ている事に気付く。それだけ、知った事実には呆然自失となっていたの
だろう。

「マジかよ!?!」

慌てて部屋の鍵を引つ掴み、照明を消して部屋を後にする。

今日から新人研修が始まるのだ。昨日ツバキさんから送られてき
たメールによれば、訓練場に〇九〇〇までに集合との事。

因みに現在、〇八一五。

朝食を摂って訓練場に向かうとなると結構ギリギリだ。

急げ!!

と思つて、扉の鍵を閉め、走り出した瞬間、

ガンツ!!

「ぐげえっ!?!」

強化された自分の身体の事を忘れていたせいで、勢い良く廊下の床
と熱い接吻を交わしてしまった。うう、本気で日常生活での加減を覚
えないとヤバいぞこりや……

6 品目 ゲームのチュートリアルⅡ地獄or新人虐め

食堂で朝食を食べ終わり、食べてる最中に会ったコウタと二人、急いで訓練場へと向かう。一応時間は15分前だから大丈夫なのだろうが、あのツバキさんが指導教官なのだ。罷り間違っても遅れるわけにはいかない。

「いやー、朝からあんな食事が食えるなんて、ゴッドイーターってホントに優遇されてるんだな」

「全くだ」

上機嫌で話しかけてくるコウタに機嫌よく返事を返す。

流石に昨日の夜の様な贅沢過ぎる食事ではなく、トウモロコシのパンと目玉焼き、それに簡単なサラダ程度の（前世で言えば）簡素な食事だったが、それでもゴッドイーターになる以前とは格段の差だ。まあ、これだけの朝食は新しい配給品が大量に支部に保存されたばかりであるからという理由もあるのだが……

食料が減ってきたらレーション三昧になるらしいし。それでも、三食しっかり食えるのは非常に助かる。外部居住区じゃ食えない時なんてザラだったからなく

俺の場合、飽きたら最悪自室で何とかなるが……匂いが廊下に漏れると面倒なことになりそうなので、早いうちに匂い漏れ対策をしないとイケないだろう。換気扇が繋がっている先は建物外なので良いとして、問題は扉と窓だよな……

そもそも消臭効果のある製品なんて殆ど売られていないし、あつても非常に高価だ。一神機使いが常備出来る様な代物ではない。となると、自分で作るのが最善かな？

消臭効果って言えば炭とかか？あとは、コーヒーの出廻らしとか、使い終わったお茶の葉とかだろうな。コーヒーとかお茶はある程度支給されているから不可能ではないし、件の冷蔵庫から取り出せばなんとかなるだろうが……そもそも目的は料理の匂いを部屋の外に漏

らさないことにある。

サラダとかの野菜類や果物類は余程弄らない限り大丈夫だろうが……肉とか魚はどうしたって漏れそうな気がする。

……はあ、どうすりやいいのかなあ？

週一ぐらいのペースにすれば『食堂のおばちゃんに食材を分けてもらったから』で済むと思うけど……さすがに週一何て言う悲しいペー
スには陥りたくないし。

と、俺が今後の食事情について頭を悩ませていると、

「はあく、ノゾミの奴にも毎日これだけ食わせてやれたらな……」

コウタがボソリと言葉を洩らした。

「うん、誰だ？」

「ああ、妹だよ。」

ノゾミって言うんだ。いつか機会があつたら紹介するわ」

「おう、楽しみにしてる」

出会ってからまだ1日と経っていないのにシスコン全開（と言うほどでもないが、まあそれなり）である。こんな時代なのに、これだけしつかりと家族の事を考えてやれる奴なんてそうはいない。

家族関係も、大抵どこかで捻じれてしまつてることが多い。ま、それでも生きてるだけマシだな。天涯孤独の身としては、若干羨ましくはあるし。

「あ、そうだ。」

「コウタ腕輪出せ」

「あん、どうして？」

「良いから」

「ん〜？」

首を傾げながらも、俺の言ったとおりに腕輪をしている方の腕を差し出してくる。その差し出された腕輪に俺の腕輪を向かい合わせ、

「ほいっつと」

ピッ

腕輪に付いているボタンを押せば、アドレス送信完了だ。後は、コウタから俺に向かって同じ作業をしてくれれば良い。それでも、メー

ルはターミナルを使わなきゃいけないのだから面倒と言えば面倒だが。

「何したの?」

「ああ、俺のアドレスをお前の腕輪に送つていたんだよ。」

「だから、次はお前が俺にアドレスを送ってくれや」

「あく、そう言えばそんな機能もあったね。」

えくと……あ、これか。

ほいさ」

ピッ

「サンキュ」

今度はコウタから俺にアドレスが送られてきた。これでメールのやり取りが出来るようになったはず。

「やく、便利な腕輪だね」

「……そうか?」

携帯電話なんていうもつと便利な機械を知っている身としては、やはりどこことなく不便なのだが。

「そうそう。」

こんな一瞬で出来るんだから」

それでも、コウタの様な知らない人間には便利なのだろう。

一応言っておくと、この世界に携帯電話は普及していない。あるにはあるのだが、一般人が手を出せる代物ではないのだ。

纏って暮さないと生きていけないから特に不便ではないが、やはり元現代っ子?としては少々物悲しかったりする。

「ま、そう言うわけで今後ともよろしくな」

「うん、よろしく」

そんな風の上機嫌に話しながら、俺とコウタは一路訓練場に向かうのだった。

◆ ◆ ◆ ◆ ◆

「も、もう無理……吐く」

ドサツ!!

訓練場の床に勢い良くコウタが倒れ込む。

『だらしなげ、藤木!!』

眞城はまだまだだというのに!!』

倒れ込むと即座に飛んでくる教官からの怒声。

「そ、そんなこと言われても……」

「おーい、コウタ」

生きてるか?」

足を止めることなく訓練を続けながらコウタの側を通り、声を掛ける。

いや、ぶつ倒れているコウタとは違い、全く体力が減ってる気がしない。このままのペースで後100周ぐらいはいけるだろう。

「なんで、お前は、ぜえ、ぜえ……そんなに……平気、なんだ、よ……?」

「さあ?」

息も絶え絶えに話しかけてくるコウタを横目にひたすら走る。

一応、今俺たちが課されている訓練内容についてだけけど、非常に単純なもので、ただひたすら訓練場を外周に沿って走り続けるというもの。

いつまで、とかは決まっていない。ただ教官が『よし』と言うまで延々と。ペースは特別決まっているわけではないが、歩く事だけは厳禁。因みに、現在俺は70周ぐらいで、コウタは50周ぐらいだ。

……終わりが分からないものだから地獄である。

『……まだまだ平気そうだな、眞城』

ぶつ倒れたコウタを余所にひたすら俺が走り続けていると、上の階から様子を見ていた教官が声を掛けてきた。

「ええ、なんでか分からないですけど、全然疲れなくて……」

いや、オラクル細胞を投与したからなんだろうけど。それにしただって異常だろう。現に、同じように投与されたコウタは御覧の有様なのだから。

ただ、俺の場合は「元々適合率が高いこと」＋「神からのサービス」

が有るからなのだろうが……それにしたってスタミナまで上がるものなのかね？確かに「アスリートLv3」があるから本来とは比べ物にならないほどスタミナ消費は少ないだろう。なので、多分スタミナが増えたというより、一回の動作で消費される割合が極端に少なくなっていると考えた方が良いんだろうな。

……まあ、スタミナ自体がそれなりに増えているということもある程度はあるのだろうか……

『……ふむ、恐らく適合率がかなり高いのだろうか……』

他の神機使いに比べてアラガミ化する可能性が高いから注意は必要だが……今は関係ないな。

よし、それならば単に走るのではなく、ステップで進んでみる』

かなり不安の残る台詞を間に挟みつつ、新たな指示を出してくる雨宮大尉。……俺は知ってるから良いけどさ、普通新人に伝える情報じゃないよね、それ。現にコウタが顔を青ざめさせてるし。

後でちゃんと説明してあげて下さいよ？

「ステップ、ですか……？」

教官の不安を煽る台詞は置いておいて、言われた事を考える。勿論、走りながら。

ステップっていうと、ゲーム内にあつたあれなんだろうな。普通に走るより速いけど、スタミナ消費量は段違いになる。ショートだったらかなりその消費も抑えられたけど、今は何も持っていない状態だし。

『そうだ。』

慣れない動作かもしれないが、足捌きは近接戦闘をこなす神機使いにとって非常に重要なものとなる。走ることは誰でも出来るが、ステップは遠距離用とは違い近接用の特権だからな。

この際だ。資料は提示するから、ある程度覚えてしまえ』

「……了解しました」

まさか初日からそんな訓練を受けることになるとは思ってもしなかったが、確かに早いに越した事はない。神機を持っている訳じゃないが、足捌きは重要だろう。

『それと、藤木!!』

いつまで休んでいるつもりだ!!』

いい加減訓練を再開せんか馬鹿者!!』

「は、はいいい!!」

俺に指示が飛んでいる間休んでいたコウタに教官から再度のお叱り。指摘されたコウタは慌てて身を起こすと、再び訓練場の外周に沿って走り出した。

「さてと……」

走り出したコウタは置いていて、俺もステップを試してみますか。今後シヨートでいくつもりなら尚のこと重要だろうしな。

◆ ◆ ◆ ◆ ◆

時刻は現在一三〇〇午前の訓練も無事?終了し、現在は昼休憩を間に挿んだ後に行われている座学の時間である。

最初は、ゲーム通りサカキ博士の部屋で行われるものだと思ったのだが、そうではなくブリーフィングルームを使うこととなった。普段はミツシヨン前の神機使いたちが使うため使用不可だが、今日はたまたま空いていたらしい。

因みに、講師はサカキ博士ではなく、ツバキさん。

講義内容は「神機の扱い方について」というもの。

「……であるからして、神機がアラガミ共に有効となり得るのは、連中の細胞結合を断つことが可能だからだ。そして、アラガミは仕留めたと思ってもコアを抜くか、破壊しなければすぐに復活してしまう。

故に、素材の回収が任務の場合、捕食が不可能な旧型の遠距離式ゴツドイーターは捕食が可能な旧型近距離式か、新型と可能な限り組む必要がある。単にアラガミの討伐のみが目的であれば遠距離式のみでも問題はないが、その様な事態は討伐班であるお前たちには稀だ。

だが、いざという時には防衛にも回ってもらおうことになるであろうから、少しは考えておくように。

……今迄のところでは何か質問はあるか？」

「……いえ、特には」

「……ZZZZZZ」

「そうか……起きんか、藤木!!」

「……ふえ……?」

「私の講義で寝るとはいい度胸だな……」

「あ……」

「サツサと顔を洗ってこい!!」

「は、はい!!」

ツバキさんの剣幕に押されて、起きたばかりのコウタが慌てながら椅子から立ち上がり、部屋の外に駆け出していく。……まあ、ゲーム内におけるコウタの講義中の態度を知っていたし、訓練直後で午後一発目の座学だからしょうがないと思う。俺だっけかなり眠い中頑張っているのだから。

「全く、あんな奴に任せて大丈夫なのか……?」

ツバキさんは額に手を当てながら悩ましそうにブツブツ何かを呟き始めた。詳しい所は聞き取れないけれど、一言だけははっきりと聞こえた。

《コウタが使う神機ってツバキさんが使ってたやつだしなく》

モウスイブロウだったはず。

それを知った時は、最初からフルチューニングの神機を使えるなんてズルイと思いはしたが……こっちは新型なのだから仕方ないと思いついて今に至る。なので、ツバキさんがそれだけ心配になるのも分かる気はする。

自分の愛機を使っていくことになる人間なのだから。

一応、ゲームでは尽く死亡フラグを回避する男として役に立っていたが、現実ではどうなるか分からない。

と、そんなことはともかく、コウタが顔を洗いに出て行ってしまったため、講義は中断されている。かといって、今の状態のツバキさんに話しかける気は起きないし……仕方ない、さっきまでの講義の内容とゲームの内容を比べてみますかね。

今のところ、神機の特徴や、機能、そして、それがアラガミにどの様にして効果を発揮するのかといった仕組みをツバキさんは話していた。今迄の範囲では、ゲームとの大きな違いは見られない。むしろ、より詳しいところまで教えてもらったお陰で、ゲーム内ではあまり説明されていなかった事が分かったりもしたので個人的には非常に満足だ。

具体的には、神機の整備方法だとか、貫通や破碎などの計測基準などについてである。ゲーム内だったら特別気にする必要はなかったけれど、現実に関自分が暮らしているのだから、知っておいた方が良かったら。

最悪、ブレンダンさんやカノンさんたちみたく行方不明になった時は自分で整備はしないといけないのだから。

……多少気になることもあるが、まあこの後の話で出るかもしれないし、今は気にしなくても良い。

それから、先程までやっていたステップの感覚を少し思い出してみたり。

感覚としては、一般的な足取りと言うより連続ジャンプが近い気がする。ジャンプと言っても、上にはなく前へ。幅跳び見たいな感じだ。勿論、幅跳びよりも数段勢いがあるし、上に跳び上がりもしない。

が、前傾姿勢に体勢を保ちながら両足に力を込め、勢い良く自身の身体を前方へと押しやるのは思っていたよりも難しかった。飛び出すのは出来ても、上手く勢いを殺して止まることが出来ないし、足捌きが難しく何度か転びそうになったり、実際に転んだりした。うん、要練習、だな。

「す、すみません」

と、そこまで考えたところで、ようやく申し訳なきような顔をしたコウタが部屋に戻ってきた。

ツバキさんの顔色を伺いながら座席に戻り、気合を入れてでもいるのか、自身の顔を両手で挟むようにして両頬を叩と、

パァンッ

快音が部屋に響いた。

「……では、続きを始める」
そんなコウタに嘆息しつつ、ツバキさんは講義を再開するのだっ
た。

7 品目 祝？・神機デビュー（やり過ぎは程々に）

先日幕を開けた新人虐めじゃないかと疑いたくなるような基礎訓練も今日で早1週間。

基礎体力の強化訓練については、俺とコウタ、二人揃って昨日終了が言い渡された。

いやー、感無量とはあの事なんだろうな。コウタなんて実際、眼が潤みまくってたし。

普通に走っているだけなら俺は初日で何とかなっていたのだが、ス Tepp となるとこれが予想以上にキツかった。スタミナはガリガリ削られていくし、足捌きを一瞬でもミスしようものなら、その場で床に強制ヘッドバッドである。何度意識が飛んだことか……

それでも、この1週間毎日行っていたお陰で、咄嗟の事でもない限り前後左右、自在に動けるようにはなった。

戦場ではまだまだ物足りないものだろうけれど、未経験よりは全然マシなはずだ。ツバキさんにも及第点はもらえたから、全く使えないということはないだろう。

座学は毎日内容を変えてはいるものの、常に神機を用いた戦術について、旧型神機の特徴を中心に、遠近両方の闘い方を満遍なく教わった。

やや遠距離寄りの戦術内容だったとは思いますが、指導教官がツバキさんなのだし、新人は両方遠距離が出来る人間なのだ。遠距離寄りの戦術内容でも特に問題ないはずである。

……個人的には、座学はゲームの様なアラガミの生態や、フェンリルの組織についての説明かと思っていたが、そう言うのは実際に戦場で使えるようになった人員になって初めて教えてもらえるらしい。……まあ、下手に先入観があつて『戦えません』なんて事態は避けるに越した事はないから当然と言えば当然だろう。

逆に知識も何も無くて良いのか、と聞かれるかもしれないが、この世界で生きている以上一度もアラガミを見たことがない人間なんてほぼいないはず。恐怖の代名詞としては十二分に役立っている。

まあ、そんなこんなで本日からようやく、神機を使った訓練開始である。

……うう、捕食したくない……

◆ ◆ ◆ ◆ ◆

『では、昨日通達していた通り、本日から実際に神機を使った戦闘訓練へと移る。』

各々自身の神機を手に取り、指示する位置へと移動しろ。

神機を掴む際は、必ず腕輪の付いている方の手で掴む事。無事神機を手に取れたら、真城は右手に見える小型アラガミを模したダミーの前へ、藤木は左手に見える的の前に立て』

「了解」

「分かりました」

ツバキさんの指示に簡潔に返事を返して、目の前に鎮座している神機に歩み寄る。

この一週間、ツバキさんの地獄の指導を受け続けた俺とコウタは、とつくにツバキさんに逆らう気力など失せていた。……だってさあ、少しでも反抗的な態度を取ろうものなら、

『よし、ならば明日までにオウガテイル殲滅戦の有効な戦術を組み立てて報告してみろ。』

出来なければ訓練時間は倍増だ』

やら、

『今晚中に訓練場の床を汚れ一つない程に磨き上げておけ。』

そうすれば、間違っても汚すような行動はしないでろう……?』

等、頭と体、どちらにも深刻なダメージを負うことになるであろう罰を強制的に受けさせられるのだ。当然拒否権はなし。

更に不服を言おうものなら罰が増加するので下手な事は言えない。……ああ、リンドウさんとかアナグラの皆さんが全くは向かおうとしない理由が良く分かったよ。

「へく、クウヤのはいかにも新人用って感じだな」

サツサと自身の神機を手を取ったコウタが俺の神機を覗き込みながら話しかけてくる。

「……まあ、そうだな」

俺の相棒はコウタのとは違い、全くもって汚れや傷が見受けられない。コウタの神機が中古店で取り扱っている商品なのだとすれば、俺の神機は正規店で取り扱っている真正正銘の新品だ。

実際、俺のは新人用というよりは、この支部初の神機なのだから新品で当然だ。

……というか、一応先週分の座学の中でその説明はあつたんだが……ああ、また寝てたのか。

「お前のは……旧型アサルトか」

ゲーム通りモウスイブロウである。

「おう。」

ツバキさんが使ってたやつらしいからな。

……なんか、いらんプレッシャーがあつてさ……替えれるもんなら替えて欲しいぜ」

「無茶言うな」

前任者と比べられるのは確かに嫌だろうが、裏を返せばそれだけ熟知している人がいるという事。困った時には聞ける人がいるというのは、何よりも強みになるだろうに……

それに比べて俺は、経験者が周囲に全くおらず、新型の戦術について教えてくれる人がほとんどいない。近接は旧型近接、遠距離は旧型遠距離の人にそれぞれ聞けばいいのかもしれないが、その場合切り替えるタイミングなどの新型特有のアクションは全く教えてもらうことが出来ない。

俺以外の新型の人間といえ、アリサや後半の新人二人など、途中から増える人間しかいないのだ。それまで手探りで進まなければいかず、下手すれば俺が教えなきゃいけない立場になる。そんな俺と比べれば、コウタはかなりマシだと思うんだが……まあ、相手がツバキさんだったという時点で御愁傷様である事に変わりはないか。

「よしと」

「……」

コウタに対する愚痴を脳内で漏らしつつ、台座に寝かされている自身の愛機に右手を伸ばす。

適合試験の時の様な緊張はない。

あるのは、遂に逃れられない捕食の時間が来てしまったことに対する諦観の念のみである。

神機を右手で掴むと、神機から黒いコードの様なもの伸び、腕輪に接続される。それと同時に体に漲る充足感、先日適合試験の際に感じたものよりも強く、しかしあの時の様な一時の昂りではなく、不安定に揺れていた俺自身の力を安定させ、支えてくれているかのような充足感だ。

『よし、では早速移動しろ』

俺とコウタが神機を持ったのを確認したのか、ツバキさんが次の指示を出してきた。言われるままに移動する俺たち。コウタの方はどうなっているのか知らないが、俺の目の前にはゲームのチュートリアルで見た、不気味な色合いをしたオウガテイルもどきが鎮座していた。

流石に地面から湧いて出てくるような仕掛けはない様だが……はつきり言って気色悪い。

目の前に立ったはいいが、どうすればいいのやら……斬るなら斬る、撃つなら銃形態で攻撃するのだが、訓練なのだから開始の合図もないのに勝手に始めるのはマズイだろう。だからって、こんな毒々しい人間大のモンスターを目の前に据えられたままと言うのは、決して良い気分にはならないものだ。

若干俺が視線を逸らしつつ立ち尽くしていると、ようやくツバキさんが声を掛けてくれた。

『真城、それは小型のアラガミ、オウガテイルを模して造られた訓練用のダミーだ。』

お前には神機の扱いを一通り慣れるまで、そのダミーで訓練を行ってもらおう』

「……了解しました」

『ダミー相手とはいえ侮るなよ？』

まずは10分間、ダミー相手に好きに動いてみる。

その上で、追って指示を出す』

「分かりました」

ツバキさんとの会話が終わると、それまで黙ったまま動こうともしなかった目の前のダミーがスイッチでも入ったかのように——実際に入ったのだろうか——突然動きだした。

蹲っていた体勢から立ち上がり、体を伸ばす様な行動をして、周囲を見渡すように首を振る。

《……成程、動きは確かにオウガテイルそのものだな》

前世のゲームでの記憶や、今世で何度か見たオウガテイルの動きと目の前のダミーの動きは完全に一致する。動きのみに着目するのであれば、確かにそれはオウガテイルそのものであった。

「よつと」

一先ず習得したばかりのステップを使い、ダミーから距離を取る。神機を持つているが、行動に然したる影響は見られない。むしろ今迄足りなかったものがすっぽりと納まったパズルの様に、今迄の訓練時の動作以上に体の動きが完成している気がする。

「……うん」

ダミーとの距離も、予想通りだ。一週間前だったら加減が出来ず、必要以上に距離を取ってしまったていただろう。それを考えると、俺も成長したと思う。

《さて、と……どうするかね》

距離を取ったからといって銃形態に神機を変えるつもりはない。まともに訓練を受けていない銃を使うよりは、近距離式の特訓をする方が良いだろう。大体、銃形態の訓練ならコウタと同じことをさせるだろうし……

《この距離なら、エミッター系のバレットだったら使うんだが……セツトしてないしなあ》

熟練の銃型神機使いなら近接戦でも無問題だろうが、新兵の俺には無理だ。

《取り合えず、ゲーム通りの戦法がどこまで通じるか試してみるか》
オウガテイル相手に戦法も何も無い様な気はするが、何事も基本が大事。相手の全面に付いている威圧感大な頭部よりも、尾の部分に注意しつつ攻めてみますか。

「グルルウウー……」

「お、来るか?」

俺に気付いたのか、低く唸り声を上げるダミー。今にも飛びかかって来そうな雰囲気だ。

《先に一撃加えるべきか……?》

ゲーム通りなら、今はまだ出会いがしらの威嚇状態だ。一瞬で距離を詰めれば一撃ぐらいは叩き込めるはず。

「……やるだけやってみるか」

即断即決、攻めると決めたのだから即座に行動しよう。

唸り声を上げ、尻尾を振り上げているダミー目掛けてステップを使い正面から突っ込む。さつき下がった時の様な加減など皆無。自身の出せる全力で床を蹴り、前方に加速。勢い良くダミーへと迫る。

《……思ったより速いな……けど、これなら相手の攻撃前にこっちが攻撃できる》

本気でステップを使ってみたのは初めてだったが、幸いにも自分が反応できないほどの速度ではなかった。ダミーに迫りながら神機を右手で大きく振り上げ、迫る勢いそのままに、

ザンツ!!

振り下ろす。振り下ろした神機は狙い通り、ダミーの首の部分を斬り裂いた。斬り裂き、着地すると同時に敵の反撃を警戒し、再度ステップを使ってその場から離脱する。

「……え?」

着地し、離れた位置から敵の方へと眼をやると、信じられない光景が。

若干勢いに押されたのか、首の中程ではなく根元部分にずれてしまったが……それは構わない。不可思議だったのはその威力。

ショートだから切断はそんなに威力はないと思い、手加減せずに思いつき振りつたのだが……

ド、ドサツ

見事にダミーの頭部と胴体を分離させていた。

自分でも信じられないが、目の前には確かにダミーの頭部と胴体が横たわっていた。

「……マジですか？」

いや、自分でも特典のお陰で大分強化されているとは思っていたけど、まさかダミーを一撃で仕留められるだなんて思ってもみなかった。

そりゃ Rank 10 辺りまで強化した武器なら一撃で倒せるだろうけど、俺が今使っている神機は新人に支給された Rank 1 の最弱装備。いくら相手がダミーとはいえ、そう簡単に敵を倒せる筈がないのだ。……でも、チュートリアルでリンクバースト Lv3 はできないから、ゲーム上で実際にどうなるか分からないが……

(オウガテイル相手なら試せるけど……どうだったっけな?)

『……真城、今何をした?』

「いや、何と言われましても……こう、ステップを使ってダミーに近づいて、首?の部分に神機のブレード部分を振り下ろしただけですけど……」

ツバキさんが珍しく呆気に取られたかのような声で俺に問いかけてくるが、俺だって現状が把握できていない。だから、取り合えず先程の一連の流れを口にしながらゆっくり目に再現してみたのだが……

『……お前、本当に新人か?』

逆に怪しまれてしまったようだ。

「本当に新人です。」

適合試験の資料ならサカキ博士に頼めば見れると思いますが……」

まあ、前世でのゲームのプレイ時間や内容を考えれば既にベテラン級ではあるかもしれませんが……そんな内容はここでは通じないだろうし、言えるわけもないのだが。

『いや、すまん……予想以上のことでつい取り乱してしまったようだ。』

ともかく、これまでの訓練内容から、お前が今迄の新人と比べて能力が非常に高いことは良く分かった』

呆れから一転、落ち着いた様子のツバキさん。それでも声はまだどこか震えており、驚愕から醒めきれていないようだ。

『……ともかく、お前はダミー程度ならどうとでもなるようだ。』

ならば、今日のところは藤木と同じ訓練に移ってもらう。

藤木の所に移動しろ』

「了解」

ということとは、これから射撃訓練か。

こればかりは練習するしかないから早目にやるときたかったんだよ。うん、そう思うとダミーをやってしまったのも割と良い事だったな。

・
・
・

【翌日】

昨日の射撃訓練も無事終了し、本日は再び近接戦闘の訓練である。

射撃訓練は遠くの動かない的を銃型神機で狙い撃つというもの。

コウタがアサルトであるのと違い、俺のはスナイパーなので若干訓練の仕方も違ったが。詳しく言うと、コウタは中距離——凡そ50m

——からどれだけ連続して的に当てられるかというもので、俺の場合は遠距離——大凡100m——からどれだけ正確に的の中心に当てられるかというもの。

まあ、各種兵装に合わせた特訓としては当然のものだと思う。

ブラストなら近距離での放射や爆発、アサルトはショート並の連撃、スナイパーは敵の弱点を安全圏から狙い撃つ狙撃。利点⇨基礎、だからな。

『藤木は昨日と同じ内容を行ってもらおう。』

真城は昨日ダミーと向き合った場所に移動しろ。指示はそこで出

す』

「了解」

「は〜い」

コウタと別れ昨日の場所に移動すると、スピーカーからツバキさんの声が。

『では、お前にはこれからこちらが指示を出すまで一切の攻撃を禁じる』

「はいいいいいいっ!?!」

『うるさい、黙って聞かんか!!』

驚愕の声を上げた俺を速攻で黙らせ、ツバキさんは説明を続けて行く。

『昨日のことでお前は攻撃についてはほぼ問題がないことが分かった。』

だが、それではアラガミの動きに付いていけるかどうかという点では不安が残る。基礎訓練時の動きからほぼ問題ないと判断できるが、実際に相手がいる状態の動きの訓練は当然必要だ。

故に、お前にはこちらが指示をするまでひたすら攻撃を避け続けてもらう』

そこまで言ったツバキさんが手元のボタンを押すと、

ゴウンツ

目の前の壁が開き、奥から昨日俺が対峙したのと同じ形態のダミーが登場した。

……ただし、5体も。

「うええええ!?!」

いやいや、いきなり訓練のレベル上がり過ぎじゃありませんかツバキさん!?

『では、訓練を開始する。』

最初の目標は、10分間逃げ切ることだ——始め!!』

「ちよっ、まっ!!」

俺の心情など何のその。

ツバキさんの開始の合図とともに、ダミー5体は咆哮を上げ俺に飛

びかかって来た。

《ふざけんなあーっっっ!!》

8 品目 最終訓練とは恐怖の対象である

最近は、回避↓攻撃↓回避という俺特製の近接訓練をひたすらこなす日々。初日は5体だったダミーもこの数日で10体に増え、ゲームの【ダンシングオウガ】を超える忙しなさを味わい続けている。

……絶対、新人にさせる訓練じゃないだろうに。

一応射撃訓練も挟みながら行っているのですが、銃型にもかなり慣れてきた。

まあ、それらの訓練も今日で終わりのはず……なのだが、その最後に残った訓練内容が非常に不安である。ゴッドイーターの主人公としては避けようのないイベント……というか、戦闘アクション。

そう、神機を使った捕喰である。

なんだかんだで今までは使わずに済んできたが、流石に訓練内容とされている以上やらないわけにはいかない。俺に出来るのは精々ダミーの味が酷くない事を祈るぐらいだ。

「……はあ」

自然、溜息もこぼれ出ようというもの。

「なぐにへこんでんだよ!!」

バシッ!!

「つつ!!」

ノソノソと訓練場に向かってしていると後ろから思いつきり背中を叩かれた。

「つく、いきなり何するんですか、タツミさん!」

若干眼を潤ませつつ振り返ると、豪い爽やかな笑顔を浮かべた某第二班の班長がいた。時間があればヒバリさんを口説いているというのに、何故今こんなところにいるのだろうか？

「なに、新人が暗い顔してうろついているれば励ましてやりたくなくなるってのが先輩ってもんだ。

なあ、ブレンダン」

「……そうだな。」

精神的な負荷は新人のうちがどうしても多いから、経験のある人物

が相談に乗ってやるのが効率的な方法だ」

「あ、ブレンダンさんも居られたんですね。」

「おはようございます」

「ああ」

タツミさんの後ろからひよっこり顔を覗かせたのはブレンダン・バーデル。

この二人にカノンさんを加えた三人がゲーム上では第二班のメンバーだ。

タツミさんの上着は赤色だが、ブレンダンは青色。遠目から見ても分かりやすい色合いの二人だ。

タツミさんは同じショートブレード使いとしてツバキさんに紹介され、色々アドバイスをしてもらった良い先輩と後輩というような関係。ショートブレード使いは極東支部では珍しいのか、嬉々として立ち回り方法や有効な戦術を教えてくださいました。

ブレンダンはよくタツミさんと一緒にいるので自然と知り合いになったし、戦術理論を色々教えてもらっていた。バスターブレードの戦術理論は、正直あまり役に立つとは思わなかったが、カノンさんがメンバーにいる際の立ち回り方法などは……うん、本当かどうかはともかくネタとして考えれば十二分なレベルだったような気がする。

「それで、まだ実戦にも出てないのになんでそんなに暗くなってるんだ？」

「……違うぞ、タツミ。」

「実戦に出てないからこそ実戦が不安になるものだ」

「ああ、新兵だもんな。」

「そりやそうか……仮にも隊長だったのに気付かないとはなー、で、実戦が不安で合ってるのか、真城？」

「……まあ、そんなところですよ」

実際は実戦以上に「捕喰」という行為が不安なのだが、そんな事言えるわけない。それに、実戦が不安って言うのも間違っではない。どうしても捕喰する必要がある——戦闘ではしなくても良いかもし

れないが素材回収とか——のが実戦だし……

「お前は討伐班だったっけ？」

「はい」

「なら、初めの内はあまり気にせず好きにやると良いさ。

防衛班（おれたち）だったら逃がす訳にはいかないが、討伐班ならアラガミを逃がすなんて話はよく聞かぬ。だから、取り合えず死ななきゃ何とかなる。

……まあ、カレルの奴とかだったら「逃がしたら報酬が減る」とか言いそうだがな」

「いや、そう言う訳にも……」

「タツミの言うことはやや極論だが、あまり気にしない方がいいというのは同感だな」

「ブレンダンさんまで……」

「お前の様に変に気負い過ぎると、すぐ死ぬことになる。もつとりラックスしていくべきだ。

幸い、お前の配属先のリーダーはリンドウさんだからな。新人のミスなんて幾らでも処理してくれるだろう」

「はあ……」

第二班のお二人からありがたい話をしていただけなのは嬉しいのだが……違うんです。不安なのは実戦中より、実戦後のことなんですよー

「こんな職場だ。

もつと気楽にいこうぜ。気分が塞いでるんだったらバガラリーでも見るんだな」

最後に初期のアリサに聞かれたらかなり反感を持たれるような言葉を残し、タツミさんは去って行った。ブレンダンさんもそれに続く。

「あ、ありがとうございます」

とりあえず頭を下げお礼を言っておく。タツミさんたちも手を振りながら答えてくれた。

彼らが廊下の角を曲がり、見えなくなるまで見送る。

さて、俺もそろそろ訓練場に向かわないと。あー、足が重いぜ、ちくしょう。



『では、真城の実戦前最後の訓練を行う。』

藤木は先日と同じ訓練を行う様に。

5分後から訓練を開始する。

それまでに所定の位置へ移動しておくように』

「了解」

「はい」

そんなこんなで始まりました。

実戦投入前の最終訓練——捕喰。

既に俺もコウタも自分の神機を持っているから、後は所定の位置に移動するだけだ。

「にしても、クウヤはもう実戦か」

早くねえ?」

右手に持ったモウスイブロウを弄りながらコウタが話しかけてきた。愛機を弄る手も初めの頃よりかなり手なれた感じになっていて、無駄に頼もしく思えてくる。

「俺もそう思うが、上が決めたことだから仕方ないだろ」

正直、もうちよつと訓練していたかったりするのだが。

まあ、極東支部初の新型十異様に動ける新人、ということ、色々な思惑が働いているのだろうさ。そうでなければ、なんで新人に「ダンシングオウガ」涙目の特訓をさせるのか分からない。

「ま、俺もすぐに追い着くつもりだからさ。

気を抜いてる暇なんてないと思うよ」

「ふふふ、それはそれで楽しみだから、頑張ってくれ」

やや苦笑しながらコウタの意気込みに返事を返す。

以前の記憶通りなら、コウタと初めて一緒に行くミッションはコンゴウの討伐だったはずだ。記憶通りに事が推移するかどうかは分か

らないが、もし記憶通りなのだとしたら、コウタにもある程度強くなっておいてもらわないとキツイ。

……まあ、前提としてそれまで死なずにいないといけないところがあるんだが、それは気にしても仕方ないから考え過ぎないようにしないといけないか。

チラリと時計をみれば、そろそろ5分が経過しようとしていた。

「ほら、そろそろ時間だぜ」

「ああ、ホントだ。

んじや、クウヤ、また後で」

「おう」

コウタと別れ、俺は普段通り、訓練場の片隅に置かれているダミーの許へと向かう。お、昨日までは10体ぐらい置かれてたのに、今日は1体だけだ。

なんだか感慨深いものがあるなくこれまでの地獄を思い返しつつ、目の前に眠るダミーをどこか優しい気持ちで眺めていると、

『では、これより実戦投入前の最終訓練を始める。』

「準備は良いか、真城？」

俺が所定の位置にいることを確認したツバキさんが声を掛けてきた。

「はい、準備完了です」

それに、簡潔に返事を返す俺。

一応、普段通りに見えるよう簡潔な返事で返しているが、内心は、今にも逃げ出したいほど緊張しまくっていた。なんだか、背中の辺りがベトベトするんだが……

『よし、それでは訓練内容を説明する。』

今回のターゲットは強化ダミー一体。

条件は、捕喰形態で捕喰を行い、神機解放を行ったうえで討伐すること。条件が満たされない限りは何度もダミーは出現するのでそのつもりでかかれ、以上だ』

「……了解」

《何その訳の分かんない条件!!》

攻撃を仕掛けられた方のダミーが完全に戦闘モードに移行した。大音量の雄叫びを周囲に響かせ、俺目掛けて自慢の尻尾を振り抜いてくる

「やっべ」

慌ててシールドを前方に展開し、そのまま勢い良く後ろに下がる。振り抜かれた相手の尻尾と、後退を始めたばかりの俺のシールドが激突し派手な音を立てる。そして、弾き飛ばされるように——事実弾き飛ばされている——宙を舞った俺は、

トン

「ふいっ、危ない危ない」

空中で体勢を立て直し、しっかりと両足から床に着地した。シールドを閉じ、ダミーに向けて神機を構えなおす。

《……にしても、強化ってそういうことかよ》

ダミーを視界に収めながらも頭は回る。

弾き飛ばされたお陰か、ダミーとの距離はかなり開いている。向こうも、すぐに追撃を掛けてくる様子はなさそうだ。

《対貫通か、対切断か……もしくは対斬撃そのものを想定して外皮を組んでいるのか。》

或いは、単に今迄俺が首ばかり狙っていたから首の防御を重点的に仕上げたのかもしれない》

実際、今迄の訓練でのダミーに対する俺の攻撃は、それぞれほぼ首元の切断を狙った一発ばかりであった。

ダミー相手の銃撃訓練は別にしろ、接近戦の場合は首元ばかり狙っていたと思う。どうしたって胴体より薄いし、防御も軽い。切り落とせば頭部と胴体が分離して動作を停止するのだから、下手に頭や尻尾を狙うより楽でもあったのだ。

その結果が、これである。

《面倒な相手にしてくれちゃって。》

……まあ、どっちにしろ捕喰をしないとイケないんなら、一撃で殺す訳にはいかないか……》

捕喰は非常に不安だけれど、やらなきゃ訓練が終わらないのだし仕

方がない。確かに、今迄の俺のやり方じゃ捕喰の訓練なんて出来ないわな。

《なら、足でも狙いますか》

足を狙って攻撃し、相手がダウンした瞬間に喰らう。今回の訓練内容ならこれが最善な気がする。

「さ、てと……方針も決まったし、行きますか」

ガシャン

神機を銃形態に変形し、強化ダミーを見据える。変形するのに掛かった時間はおよそ1秒。新人にしては十分速いとは思うけど、この先の事を考えると、ほぼノータイムで変形して欲しい所だ。たかが1秒、されど1秒である。戦場ではその1秒が生死を分けることもあるのだから。どうすればいいかは、地下アリとかに書かれていたから何となく分かるのだが、現状では無理だ。未だに、神機と自身が一体化することに違和感を覚えているのだから。どうすればこの違和感を消せるのか考えているにはいるのだが……まあ、今はまだ良いや。せめて、中型アラガミたちとやり合うまでには、どうにかしておこう。さて、話を現実に戻そう。

神機を変形させたのは、もしも、相手の外皮に対斬撃の処置が施されていた場合のためだ。ただ、それだと捕喰がしにくいし、金もかなりかかるから、そうそうないと思うが……念のため。

俺が考え事をしていた間にかかなり近付いてきたかと思ったが、どうやらそうではないらしい。近寄って来てはいるものの、まだまだ遠い。

《今迄の奴より遅いな。

装甲を厚くした分、速度が下がったか》

だとしたら、尚の事好都合である。安心して、相手を狙い撃つことができるというものだ。

気を落ち着け、銃形態の神機に取り付けてあるスコープを覗きこむ。ゲームの様なエイムモードに近いが、流石に画面一杯に広がるあれとは違う。

《狙いを相手の足に合わせて……》

狙うはダミーの左足。続けて、右足を撃てるよう体勢を整える。今神機にセットされているバレットは各属性のレーザーのみ。範囲は狭いが、その分狙いがより細くなる。

そうこうしているうちに、ダミーが近付く速度を上げて来た。

まあ、今迄が普通の歩みなら、今は精々競歩程度の速さなのだから、変に焦る必要もないがな。

《よし、そのまま、そのまま……よし!!》

神機の引き金を引き、弾丸——レーザー——をダミー目掛けて発射する。放たれた赤色のレーザーは尾を引きながらも、俺の狙い通りの位置に向かって流星の如く突き進む。平坦な訓練場で遮るものなど存在するはずもなく、

「グ、ガアッ!!」

見事に敵の左足を貫いた。

ダミーが怯んでいる間にすかさず照準を補正し、再度引き金を引く。

「ギャウツ!!」

再びダミーの左足を貫くと、立つ事が出来なくなったのか、ダミーの体が訓練場の床に豪快に倒れ込んだ。

《よし》

一先ず銃撃が聞いて一安心だ。

スコープから眼を放して肉眼でダミーの様子を視認する。

「……念のため、もう一発いっとくか?」

見れば必死に右足を使って立ち上がるようとしている。

二足歩行だからまともな行動はできないとは思いが……

「やっどくとするか」

確実に、より安全に捕喰を行うためだ。あまりの不味さに俺がのたうち回らないとも限らないのだから。

再度スコープを覗きこみ、ダミーの右足に照準を合わせて引き金を引く。

「ギャンツ!!」

銃身の先端から放たれた赤色のレーザーが見事に相手の右膝?辺

りを撃ち抜いた。

立ち上がるともがいていたダミーが、再び訓練場の床に沈む。短い両腕を暴れさせて必死にもがいているが、立ち上がる様子は見受けられない。

「……ふむ」

10秒ほど相手の様子を観察し、暫く経ち上がる様子がないと分かったので、銃形態から剣形態へと神機を変形させる。

そのままゆつくりとダミーに近付きながら、

《さあ、食事だぜ、神機（相棒）》

神機をダミーに向けて突き出す状態で構え、指示を出す。

それだけで、剣形態だった俺の愛機は捕喰形態（プレデターフォーム）へと変貌を遂げていく。

ブレード部分がやや奥へと引っ込み、柄の部分との間に出来た隙間から黒い……なんだろう、肉？、闇？、触手？、どう形容したらいいか分からない物が溢れ、ゲーム内では何度も見たことのある顎門を形作る。

《……想像以上に威圧感があるな》

自分の手の先に現れた“それ”を改めてみると、下手な武器以上の威圧感を感じ取れる。武器が命の危機を感じ取る人間としての感覚なら、今の神機（こいつ）から感じ取れるのは『喰われる』という生物としての絶望感。自身に向けられていないとはいえ、ここまで濃い恐怖を感じ取れるのだから、実際に喰われるアラガミはどう感じるのだろうか？

ひよつとしたら、これ程の感覚を持ってしてやっと対等なのかもしれないが……

グルルウ

《ああ、悪い悪い》

俺が呑気にも考え事をしていると、手の中にある神機が震えたような気がした。錯覚かもしれないが、神機にも意志があることは知っている。生れたばかりのこいつの意志がどれほど育っているのかは知らないが、“喰らう”という一点においては疑う余地もない程最初か

ら明確であるはずだ。

なんせ、神機（こいつら）はその為に創り出されたのだから。地面に寝そべりながらも必死に俺に襲いかかろうとするダミー。そいつを、

「よし、喰らいつけ!!」

問答無用に喰らい尽くす!!

「グ、ギャアーーーーッ!!」

俺が突き出した神機は見事にダミーの胴体に齧り付く。味わってでもいるのか、ぐちゃぐちゃと音を立てながら噛み切ったダミーの肉片?をしつかりと噛み締めている。

……さて、どうなるんだろうか?

「……………う!!」

捕食形態が納まり、柄の中に戻っていくと同時に、口の中に何とも言えない不味さが広がった。

「ぬ、が、ぐーーーーっ!!」

苦い、辛い、甘い、というか、濃い!!

精々、不味いといつてもすごく苦いとか、その程度のものだと思っていたが、これは桁違いだ。色んな味が混ざり合ったまま、まるで調和が取れていない。

「むぐーーーー!!」

一つ一つの味の自己主張が激しく、しかもべつたりと舌に張り付いてくるかのような濃厚さ。

やべえ、こりやマジで死ぬかも shouldn't ……

確かに、捕喰のお陰か、力は溢れているし、スタミナやオラクルの消費量も下がっているのだろう。だが、それ以上に、口の中に広がる味の氾濫に精神が侵されそうだ。

「うあー」

意識を若干虚空に飛ばしながらも、とりあえず、忘れないうちにということで、両手でしっかりと握りしめた神機を、未だ床に転がっているダミーに恨みを込めて本気で突き刺す。偶然にも首元に向けられていた神機（それ）は、弾かれることなくしっかりとダミーの体を

突き抜け、頭部と胴体を切り離していた。

「あー、うー、あー」

ダミーの頭部が床に転がり、完全に胴体も沈黙したのを確認した時点で、俺も床に転がる。隣にダミーの頭部と胴体の残骸があるが気にしない。

もう、口の中の不味さを和らげるには、体を動かして、他の感覚で上書きするしかない!!

『条件クリア、対象の撃破を確認。』

よくやった、真城。

これでお前の訓練は無事全て終了だ……が、どうした?』

「き、気にしないで下さい」

訓練場の床をゴロゴロと転がっているとダミー撃破を確認したのかツバキさんが声を掛けて来る。

来たのだが……流石に俺の状態が不自然だったのだろう。非常に怪訝そうな声で訊ねて来た。

そろそろ味も薄れてきたので、思いつきり息を切らせながらも返事を返す。流石に神機が喰らった物の味が分かるなんて言えるわけがないし。

『……まあ、お前が良いなら構わんが』

不信感を漂わせつつも、納得してくれたのかそれ以上何も言うてくることはなかった。

……いや、助かるから良いんだけどさ、教導官としてはどうよそれ?

追及されないことに安心しつつも、どこか不安なものを感じて俺は首を捻るのだった。というか、ダミーでこれなら、本物のアラガミはどうなるんだろうなあ

9 品目 初ミッション……なんだけどなく

「……はあ、なんでこんなことになってるのやら……」

贖罪の街に流れる乾いた風に吹かれ、俺はビルの間から見える空を眺めながらポツリと呟いた。アラガミに喰い散らかされた街並みは、改めてこの世界が世紀末なのだと思わせてくれる。が、そんな世紀末の光景も今の俺にはどうでもいい。

ゲームでどんな街になっているのかは知っていたわけだし、この世界で十数年生きてきたのだから覚悟も当に出来ている。だから、街の光景が問題なのではない。

「お〜い、どうした真城」

「……両宮少尉、俺、何か悪いことしましたっけ……?」

「リンドウで良いぞ、名字で呼んだんじゃ姉上と被るだろ」

「はい、リンドウさん、じゃあ、俺もクウヤでお願いします」

……で、本当になんでこんなことになってるんですか」

「さてなく、何にせよ放っておく訳にはいかんだろ、これは」

「そうかもしれないけど……」

隣で広場の状況を確認しながら声を掛けてくる討伐班の隊長——
両宮リンドウ少尉——に返事を返しつつ、更に沈んでいく俺。

広場には、本ミッションの討伐対象であるオウガテイルが1体……
だけではなく、オウガテイル墮天、ヴァジュラテイル（火）、ヴァジュラテイル（雷）がそれぞれ1体ずつうろついていた。討伐対象はオウガテイル1体だが、リンドウさんの弁通り、こんな状態を放っておく訳にもいかない。全部討伐しないといけないのだろう。

オウガテイル4体なら、まだ新人の任務としても納得いくのだが、ヴァジュラテイルまでいるとなると……少なくとも、新人に割り当てられる任務内容ではないはずだ。

……本気で、なんでこんな状況になっているのか分からない。ここに来るまでは、ゲーム通りの展開で順調だったはずだ。

アナグラのロビーでリンドウさんと合流し、サクヤさんとの勝ち組

としての姿を見せつけられた後、ヒバリさんからミッションを受託。この街までヘリで移動し、到着した後はリンドウさんから実戦での注意を受け、街の散策を開始。道中、素材を回収しつつ対象となるオウガテイルを捜索。この時までには、まず間違いなくゲーム通りの展開で、広場に広がる光景なんてまるで予想していなかった。

……ホントに、どうしてこうなった!?

「クウヤ、さっき俺の言っていた事を覚えてるか?」

「さっきって、どれですか?」

自分に原因があるのかなー、なんて軽く現実逃避をしている俺に、リンドウさんが話しかけてくる。聞かれてもここに来るまでに色々とお話をしていたからどれのことを指しているのか分からない。いや、多分、あの有名な台詞なのだろうけれど。

「ミッション開始の前に言った命令だ」

「ああ、『死ぬな、死にそうになったら逃げろ、そこで隠れろ。運がよければ不意をついてぶっ殺せ……あ、これじゃ四つか』ってやつですか?」

ゲーム通り、ミッション前に言われたあの名言。GOD EAT R、もしくはBURSTのプレイヤーとしては、直にあの台詞を聞けたとあって、その時は非常に喜んでいたものだ。なのに、今は広場の状況のこともあり、テンションだだ下がりである。

「ああ、それであってるぞ。」

「それさえ守つときや後は万事どうとでもなる」

「分かりました」

部隊のリーダーとしては駄目な部類に入るであろう適当さ加減だが、それが数多の死線を潜り抜けて築き上げられたものだとして知っている。だから、落ち込みつつも返事はしっかり返す。

俺だって、まだ死にたくはないし……いや、一回死んだけどさ。

「俺が前衛でアラガミ共を惹きつける。」

「クウヤ、お前は遊撃だ」

「え、いいんですか?」

「まあ、新人の実戦指導としてはあまりよろしくないのは確かだが

……状況が状況だ。

旧型なら俺がサポートしながらで良いだろうが、お前は新型だしな……ま、初めての实戦なんだから自由に動きたいように動け。それでお前にあったやり方を見つけられれば、初回としては十分だ」

「はい、分かりました!!」

リンドウさんの指示に力強く頷き返し、神機を強く握り直す。そうだが、ここで落ち込んでても仕方ない。どうせ、今後のミッションでは嫌というほどこいつらと戦うことになるんだ。単に、その時期が早まったと思えば……ああ、ごめん、流石に初陣では早過ぎるわ。

それでもやるしかないことぐらい分かってるけどな。

「よし、良い返事だ。

じゃあ、おっ始めるか」

「はい」

返事を返すと同時に神機を銃形態へと変形させる。

まだ、あちらはどいつも俺たちに気付いていない。ならば、初撃は俺たちの好きに出来る。

「俺の合図と同時に、オウガテイルを狙え。

そっから先は、お前に任せる」

「了解です」

返事を返しつつ、しゃがんだ状態で神機を構え、スコープを覗きこむ。照準はオウガテイルに合わせ、物陰から様子を伺う。

スコープ越しに見える敵は、未だ何かを食べており、こちらに気付いた様子はない……問題なのは、オウガテイルと俺たちの間に、ヴァジュラテイル（火）がいること。広場をうろついているだけだが、心なしか周囲を警戒しているようにも見える。

「……く」

両腕で支えている神機が震える。自分がバレットを放つと同時に、戦闘開始。それが今更ながら分かり、訓練ではまるで感じなかった緊張に包まれる。

とつくに覚悟していたはずの、殺し、殺されるという日常に足を踏み入れるという事実が心が震え、体も震え、神機も揺れる。定まって

いた狙いはぶれ始め、発射することすら危うくなっていた。

その震えを、

ゴンツ!!

自分で自分を殴る事で無理矢理抑え込む。震え、怖がっている自分を分かっていた事だと理性で叩き直し、揺れていた照準を再びオウガテイルに向け直す。

そうして、

「3、2、1……ファイア!!」

実戦開始の声がリンドウさんの口から発せられた。

・
・
・

合図と同時に俺の神機の銃口が火を噴き、水色のレーザーが尾を引きながらオウガテイルへと突き進む。

狙いはオウガテイルの胴体。

俺とオウガテイル、彼我の距離差は50mぐらいなので、あまり銃撃に慣れていない俺には足などの細かい部位を狙い撃つことは難しいのである。

俺が撃ったレーザーは狙い通りの位置へと進み、

「ギャウツ!?!」

見事にオウガテイルの胴体を貫いた。

「よしっ、よくやった!!」

俺の射撃を見届けると、リンドウさんが潜んでいた物陰から飛び出す。

彼の向かう先にはヴァジュラテイル（火）が。先程の射撃音で俺たちの存在に気付いていたのか、俺たちに対して唸り声を上げ、威嚇をしてくている。だが、そんな威嚇にまるで怯むことなくリンドウさんはヴァジュラテイル（火）へと突き進み、

「おらあっ!!」

威勢の良い掛け声と共に自身の神機を振り下ろしていた。

その一連の流れは、無駄な動きなど一切なく、目の前のアラガミを

必ず仕留める、という意志がありありと感じ取れる。

《……と、とと、俺も動かないと》

リンドウさんの動きに一瞬見とれてしまっていたが、一拍遅れて俺も物陰から飛び出す。飛び出しながら、神機に命じて剣形態へと変形させ、周囲の状況を確認、

《オウガテイルは、まだ動けない。

ヴァジュラテイル（火）はリンドウさんが抑えてくれてる。

となると、残りの墮天種と、ヴァジュラテイル（雷）は……》

視線をオウガテイルの後方へと向けると、路地の隙間から顔を出したヴァジュラテイル（雷）を発見。一方の墮天種は、

「ギアアーーーツ!!」

「つつ!!」

雄叫びを上げながら、俺の方に向かってきていた。慌てて振り向いた俺の目は、正確に敵の姿を捉える。向かってくる化け物の顔に一瞬体が硬直しかけるが、無理矢理足を動かして敵の射線から離脱する。一瞬遅れて、さつきまで俺のいた場所を巨大な針が通過していった。

「っ?」

右腕に僅かな痛みを覚え、視線を向けると、微かな切傷が。先程の針が掠っていたのだろう。

「危なかった……」

一瞬の気の緩みが即座に死に繋がるとはよく聞いていたけれど、身をもって体験するとは思わなかった。

「……よし!!」

気合いを入れ直し、神機を握り直す。力一杯握り締めるのではなく、ある程度余力を残した状態で。

針を放った墮天種を視界の端に収めつつ、再度周囲を一度見回す。ヴァジュラテイル（火）は変わらずリンドウさんと交戦中、距離も離れているし大丈夫だろう。基本種は徐々に体勢を立て直しつつあり、ヴァジュラテイル（雷）もこちらに威嚇している。

墮天種は俺が相手取るが……どうやら、あまり時間は掛けていられないようだ。ゲームだと然して問題はないが、実際にこの数を相手取

り飛ばしていた。

「つし、次!!」

墮天種の身体が地面に沈む音を背後で聞きながら、次の相手を見据える。

《近いのは……ヴァジュラテイル（雷）の方か》

俺の方に尻尾を振り上げ、何やらやろうとしているヴァジュラテイル（雷）を視認すると同時に、俺は急いでその場を離れ、ヴァジュラテイル（雷）に向かって駆け出した。

《さっきの格好がゲーム通りなら、この後に来るのは『落雷』》

オウガテイル基本種、墮天種なら針、ヴァジュラテイル（火）なら火球、そして、ヴァジュラテイル（雷）なら落雷である。ゲーム中で大型のアラガミと一緒にこいつが出てきた時、何度喰らったことか。こつちが、攻撃に移ろうとすると『落雷』が発生するのだから、堪ったものではない。

が、それも大型と組んでいたらの話。

《『落雷』中は隙だらけだろ……?》

ゲーム内とは当然、動きが異なるとはいえ、幾らか被る行動があるのも事実。もしもその通りなら、こいつは『落雷』中は隙ができるはず。ゲームの様なものではないにしろ、付け入る価値は十分にあるはずだ。

「ギィィィー……ッ!!」

その暗い体毛からは想像しにくい甲高い遠吠えを上げ、前傾姿勢のまま尻尾を振るヴァジュラテイル（雷）。一際高く尻尾が振り上げられたのと同時に、両足に力を込め、飛び出す。後方で激しい音が鳴り響いたが、俺の体にはまるで影響が無い。勢いよく飛び出した俺は、神機の剣先を敵目掛けて構え、さながら砲弾の如く突き進む。

遮るものもなく、相手も隙だらけ、

「ギ、ガアァァァァァァッ!!」

俺の神機はヴァジュラテイル（雷）の胸元に深々と突き刺さった。

が、相手もアラガミ、捕食者としての意地があるのだろう。胸を刺されながらも、近くにある俺の頭に喰らいつこうとする。だが、それ

より速く、

「サービースだ、喰え!!」

神機を捕喰形態へと変化させ、ヴァジュラテイル（雷）の体内を思う存分喰らわせる。神機から生じた黒い顎は、遠慮などまるで見せず、ヴァジュラテイル（雷）の体内を思うままに蹂躪する。そして、体を形成するために必要不可欠なコアを捕喰したのだろう、捕食者から被捕食者へと変わったヴァジュラテイル（雷）は呆気無く黒い塵と成り果てた。

それと同時に黒い顎は神機の中へと戻っていき、

「むぐあつ!!」

俺の口の中へと神機が味わったアラガミの味が流れ込んでくる。

ただではなく、全身の細胞が熱く煮えたぎるかのように湧きたち、体中に力が漲っていく。

のだけれど……

《す、酸っぱ!!

いや、しょっぱ!!

ぐあゝ、苦みまで!!》

そんな充足感以上に、味の衝撃が俺を襲っていた。前回のダミーの味は調和が取れておらず、味が異様に濃かったが、こいつは調和は取れている。

だが、

《ひ、一つ一つの味が……異様に強い!!》

前回の濃さが1なら、今回は5ぐらいの濃さ。味の種類は少ないが、不味さの質が段違いだ。

それでも、以前の様に地面を転がる様な真似はせず、すぐさま行動に移る。

……もつとも、顔は凄く歪んでいそうだが……

神機に命じて銃形態へと変化させ、

「リンドウさん!!」

先程俺が喰らったヴァジュラテイル（雷）のオラクル細胞からなるエネルギー弾をリンドウさんに渡す。

「お、なんだこりゃ……?」

「リンクバーストです!!」

制限時間があるのでその間に!!」

「ほほう、これが姉上の言ってたやつか……了解、ならサツサと仕留めますかね」

俺からエネルギー弾を受けたリンドウさんは、先程までの勢いが冗談に思えるぐらいの速さで動き出した。一瞬でヴァジュラテイル（火）を両断し、置き上がり自分に向かってきていたオウガテイルを返す刃で胴体の真ん中を切り捨てた。

……考えてみれば、あの掃討作戦にいたんだから、この程度のアラガミ、リンドウさんなら一瞬で片付けられるはずだ。それなのに、ヴァジュラテイル（火）を抑えていただけなのは……

《俺のため、なのかね……》

今思えば、リンドウさんは、ヴァジュラテイル（火）を相手取りながらも、いつでも俺を援護できる位置にいた。

《……流石》

周囲を見渡し、殺り残しが無いかを確認しているリンドウさんを見ながら、ふとそんな事を思うのだった。自分も大概反則だとは思いうけど、リンドウさんには到底敵う気がしない。

「よし、ミッション終了。」

初陣にしては、十分過ぎるほど動けてたわ。ま、それでも所々不安な部分があるが……それは追々で良い。

取り合えず、早いところ背中を任せられるぐらいにはなってくれ」

周囲の確認が終わり、ミッション終了の合図をしたリンドウさんの総評に耳を傾ける。

「はい、ありがとうございます」

「うし、じゃあ、後は素材回収だな。」

初陣記念だ、素材は全部やるよ」

「………了解」

リンドウさんとしては、気前のいいリーダー振りを見せたつもりなのだろうが、俺としては暗くなるしかない。

広場に倒れ伏しているアラガミの体は計3体。つまりは、先程の様な地獄を3回も味わうということだ。

……拒否したいけど、新人が拒否するのも変な話だし……やるしかない!!

周囲を警戒しているリンドウさんに見守られながら、地面に転がるオウガテイルへと近づき、

「……イタダキマス」

ガブリ、と神機に喰らわせた。

……その後起こった惨劇は皆さんのご想像にお任せします。

10品目 報告書作成の裏で……変なフラグ発生

【真城クウヤ新兵 2071/○/□

ミッション名：悪鬼の尾

ミッション完了日：2071/○/□

討伐対象：(開始前) オウガテイル1体↓(開始後) オウガテイル1体、オウガテイル墮天種1体、ヴァジュラテイル(火)1体、ヴァジュラテイル(雷)1体

場所：贖罪の街

同行者：雨宮リンドウ少尉

回収素材：鬼牙・鬼面尾・鬼氷牙など、対象アラガミの素材計20点。コアの回収も4体全て完了。その他、低強度チタンなど計8点。

報酬：3000fc

所感：初めての戦闘ということもあり、訓練とは違う雰囲気緊張したが、なんとか動けたと思う。実戦評価については雨宮少尉の報告書でご確認いただきたい。個人的な今後の課題は、今回の様な剣形態中心だけではなく、銃形態における戦闘もふまえつつ新型としての役割を果たすことである。」

「……と、こんなもんかな」

ミッションが終わった俺は自室に戻ってターミナルでミッションについての報告書を書いていた。以前の世界では一度も書いたことがなかったもので、あってるかどうか少々不安だが、まあ大丈夫だろう。

「じゃあ、保存して、メールに添付して、送信、と」

保存したテキストデータをメールに添付し、宛先がしつかりツバキさんのアドレスになっていることを確認して、送信ボタンを押す。

この辺りの諸作業は以前の世界とやり方がそんなに変わっていないので助かる。

次に装備の強化に画面を移す。

なんと今回の回収素材の中に低強度チタンが2つもあったのだ。強化に掛かるfcも130程なので、【ナイフ】を【ナイフ改】へと強化することが可能になった。これ以降は【獣剣 陽】だったり【ポイ

ズンピック」に「発熱ナイフ」や「超電磁ナイフ」など強化先が色々な方向へと派生するので序盤はかなり考えて強化を発注しなければいけないけれど、「ナイフ」から「ナイフ改」であれば、純粋に威力が強化できるので何も考えず発注できる。幸い、今強化を発注すれば明日のミッションには間に合うそうなのでその辺りの問題も気にせず済む。……まあ、突然アラガミが侵入してきた場合はその限りではないが、そんなこと気にしては強化など出来る訳がない。なので、強化の画面から発注の部分へと選択を移し、書かれている注意事項をクリアしているのを確認し、何も問題がないので発注のメールを送信。

しばらく画面を見つめて、ちゃんとメールが送られたのを確認すると、

「ふへへ、疲れた〜」

そのまま近くにあるベッドへと倒れ込んだ。倒れ込んだ勢いで、ギイとベッドが軋んだ音をたてるが無視。一々、そんな細かいことに気を払っている余裕なんてないのだ。

「あく、緊張した……」

倒れ込んだ体勢から体を反転させ、仰向けに寝転がる。

四肢をだらしなく放り出し、脱力。体の力が抜けていく。

「はあく、やっぱり訓練と実戦は違うな……」

所詮オウガテイル1体と気楽に挑んだら、あのざまである。覚悟ならとつくに出来ていると思つた気でいたけれど、百聞は一見にしかずとはまさにあの事だ。気楽に考えていた昔の自分を思いつきりぶん殴ってやりたい。

下手したら、初陣で死亡という新人ゴッドイーターとしては割とよくある結果になっていたのかもしれないのだ。

右腕の切傷は既に完治しているが、あれが一瞬でも遅れていたらと思うとゾツとする。

《まあ、慣れていこう。

それしかない》

何はともあれ、こうして生きて帰れたのだ。今はその事を喜ぼう。

と、それでも考えとかなきやいけないことは今のうちに考えておこう。ゲームのシナリオ、というかミッション内容通りに進まなかったという事実は、決して軽視して良いものであるはずがない。偶然なかもしれないが、これが2、3度続くようなら認識を改めなければならぬ。

《……やっぱ、俺が原因なんだろうか?》

少なくとも、ゲーム通りに話が進むのであれば、あんな無茶苦茶な初陣にはならなかったはずである。防衛班なら、居住区内に侵入したアラガミの種類によっては、初陣が大型になる可能性もあるだろうが、仮にも俺は討伐班である。討伐対象が初めから判明しているはずなのだ。

《……まあ、観測班がしつかりしていないのはゲーム中でも語られてたことだけど……》

それでも、新人を回すのだからもう少ししつかりして欲しい。

《もし、俺のせいどころなイレギュラーが発生してるなら、今後も続く可能性があるな……》

流石にないと思うが、こうして起きてしまっている以上無視する訳にもいかない。今日の事から考えると、下手したら、初めての大型アラガミ戦がヴァジュラではなく、プリティヴィ・マータ、或いはディアウス・ピターー辺りになるかもしれないのだ。(コンゴウはあくまで中型アラガミである)

……流石に死ぬるのでやめて欲しいが。

《もしくは、ウロヴオロスがアマテラスになるとか……》

何その無理ゲー……でもない、のか?

自分で考えておいてあれだが、流石にない……と、思いたい。

《まあ、今後の状況次第かね》

「よ、っつ」

一旦思考に区切りをつけ、寝転がっていたベッドから身を起こす。

これ以上考えていたって仕方ないのだ。精々、今後の任務は常に警戒しておくべきだと心得ておくことぐらいしかできないのだから。

身を起こした勢いそのままにベッドから降りて立ち上がり、

「何はともあれ、飯だ」

冷蔵庫の前まで移動し、考える。

今後のことも大事だが、今は何より夕飯が大事。ヴァジュラティル（雷）なんていうくそマズイ奴を喰ってしまったのだから、せめて夕飯ぐらいは美味しいものが食いたい。

《……匂い対策が万全じゃないから、あまり周囲に匂いが漏れるものを使えない。

けど、折角久しぶりに以前の世界での料理が食えるんなら自重するのもあれだし……よし、パスタでも茹でるか》

麺を茹でるだけなら、あまり匂いが漏れる様な事はないだろうし、パスタなら冷製でも十分美味しい。それに、匂いの少ないレシピも幾らか知っている。

「よし、そうと決まれば、調理開始!!」

冷蔵庫に付いているモニターに必要な材料の名前を打ち込んで決定ボタンを押す。

材料名を読みとっているのか暫く冷蔵庫から電子音が断続的に鳴る。そのまま、30秒ほど待っただろうか、唐突に電子音が鳴り止み、自動的に冷蔵庫が開かれた。

中を覗きこんでみると、

「おお、すげえな、こりゃ」

確かに俺がモニターに打ち込んだ食材が冷蔵庫内に納まっていた。しかも、どれも以前の世界の最高級品のレベルだ。正直、俺なんかには勿体ないぐらいの。

「……とと、感心してても仕方ない。

サツサと調理に掛かりますかね」

折角の神様からの御好意なのだ。

放っておいて悪くなったりしたら勿体ないし、この食材に悪い。

冷蔵庫から必要な食材を引っ張り出し、キッチンの上に並べる。羽織っていたコートを脱いでハンガーに掛け、代わりにエプロンを装着。着ているシャツの袖を捲りながら鍋などの調理器具を引っ張り出す。

途中で右腕に着いている赤い腕輪が嫌でも視界の中に入ってくる。

「やつぱ、邪魔だよな……」

ペチペチと腕輪の付いていない方の腕で腕輪を叩いてみたり。せめてもう少し小型化出来ないのだろうか……？腕時計ぐらい小さいと気にならないのだが。

日常生活ではもう慣れたが、料理をしたり、細かい作業をする時にはどうしても邪魔になる。先輩方はよく気にならないものだ。コウタなんて未だに日常生活でも鬱陶しそうにしているというのに。まあ、2でもまだ大きいままみたいだったから当分無理なのだろうけれど……

「はあ、気にしてても仕方ないか」

溜息を吐きながら髪を弄っていると、腕輪が頭部にゴンゴンと当たってくる。

「……………よし、飯だ」

腕輪の事を無理矢理脳内から消し去り、俺は改めて目の前の食材たちを手を伸ばした。



「新しい『新型』ですか……？」
「そうだ」

自身の問い掛けに悠然と頷く目の前の男。

男は、漂わせている空気こそいつもの様におだやかなものだが、これまたいつもの様に端正な顔に付いた眼は深淵から自分を覗きこんでいるかのような鈍い光を放っている。

「しかし、よく本部が首を縦に振りましたね」

世界でも未だ数えるほどしか成功例のない『新型』を1つの支部が2人も保有するなど、よく本部が許可を出したものだと思う。つい先程自身が同行した件の『新型』の少年は、初陣だというのに、いとも容易くオウガテイル墮天種とヴァジュラテイル(雷)を葬ってみせた。初陣故の緊張や高揚もあったようだが、それらを差し引いてみて

も新人の動きではなかった。新人は、あんなにタイミングよく隙を突いて動けるはずがないのだから。

もし、あんな少年の様な神機使いが新たに補充されるといふのであれば、それは一兵卒として素直に喜ばしい事ではある。

が、どうにもきな臭い。

いつも通りのだらしない表情を顔に張り付けつつも、目の前の男の言葉を待つ。

「なに、『エイジス計画』のためだ。

人類の希望たる『エイジス』を守るため、とむしろ快くあちらは賛同してくれたよ」

「そうですか……」

「何か、問題でもあるかね？」

「ああ、いえ、この分だと俺も『デート』の回数を増やしても問題ないかと思ひましてね」

やや気だるい調子で返してみる。が、この男相手に自身程度の演技がどこまで通じているか分からない。むしろ、全て見透かされている様な気さえするのだ。

「ふむ……確かに、彼女が新たに加わってくれるのであれば、君の仕事も少しは減るだろうね。そんな時は喜んで『デート』の相手を紹介させてもらおうとするよ」

「彼女？」

新しい『新型』は女性ですか」

「ああ。その辺りの資料は詳しい日程が決まってから提示しよう」

「……了解」

別に女性だからといってどうこう言うつもりはない。自身の姉だって女性だが、現役時代は並ぶものがないと称されるほどの遠距離型のゴッドイーターだったのだから。そんな姉がいるからこそ、実は女性のゴッドイーターという存在が若干怖かったりするのだが今は関係ない、はずだ。

……一抹の不安を覚えてしまうのは何故だろうか。

「それでは本題に入ろうか。

君から見た新人の「新型」、真城クウヤの評価を聞かせてもらおう」

手を机の上で組み直し、肘を机に付け、自身の顔の前で手を組む目の前の男。雰囲気や視線は変わらないのだが、心なしか重圧が増したような気がした。

「報告書は読んだが、初陣にしてオウガテイル墮天種とヴァジュラテイル（雷）を討伐。それも、観測班の提示していた結果とは違った状況だったのだろうか？

ならば、新人としては十二分過ぎる程に好物件だと思うがね」

卓上にある報告書にチラリと視線を向ける。そこには確かに自分が提出した内容の報告書と、もう一枚、真城が書いたであろう報告書が置かれていた。

それなら、細かい点は省いても問題なさそうだ。

「……『新型』という点は比較対象がないので省かせてもらいます
が……何と言うか……率直に言って、あいつは動きが良過ぎますね」
ガシガシと自身の後頭部を右手で搔きながら、報告を始める。

「……ほう、と言うと？」

が、目の前の男は自身のだらしない態度など歯牙にもかけず、話の続きを促してくる。あまり表情を変化させない男としては、珍しくどこか興味深げな様子だった。

「俺にはまるで相手の攻撃パターンを知っているように見えました
が」

別に、その事自体は問題じゃない。訓練用のダミーとして使っているのはオウガテイルを模したものであるし、真城の場合はそれらのダミー10体を相手取る訓練をしていたのだから、ある程度の攻撃パターンは知っているだろう。

「……訓練の成果かね？」

「恐らくは」

そう口にしながらも、ゴッドイーターとしての自分は違うと否定する。

確かに、攻撃パターンは分かっていたのだが、それ以上に攻撃する

場所とタイミングが的確すぎるのが問題だ。パターンを知っていたからといって新人の体がそれに合わせて動くわけではない。どうしても迷いが生じて、一拍遅れるのが常だ。

が、真城はその迷いが殆ど見られなかった。回転を避けたと思ったら、その後の敵が硬直した瞬間に即座に攻撃を仕掛けた。ベテランならともかく、新人の動きではない。

「それならば大したものだ。」

この場合、彼を褒めるべきか、指導した君の姉上を褒めるべきか……どちらだと思うね？」

「真城を褒めてやってください。」

姉上は貴方から褒められても薄気味悪がるだけでしようから」

「はは、違うない」

どこことなく満足そうな笑い声を上げた目の前の男を見ながらも、

《……それよりも、問題なのは……》

戦場で動いていた新人の姿を思い出す。

《あいつのあり方は、新人というよりは……》

むしろ、ベテランのような……否、ベテランというよりはむしろ、第

3者が真城の体を操っているようにも……

「……さて、期待の新人が使えると分かったところで……リンドウくん」

「……また、ですか。」

今月に入ってももう5度目ですよ」

唐突に思考が回想から現実へと引き戻される。お決まりの冷めきった視線を自身の身に向けられているとあれば、良い心地はしない。

「ああ、急で悪いが次のデートの相手だ」

報告書の隙間を縫い、目の前の男——シックザール支部長から自身に向けて卓上を1つのデータが保存されたディスクが滑って来る。見慣れた光景と言えばそれまでだ。

ただ、

「では、期待しているよ」

「……………了解」

今度の相手はかなりのじやじや馬のようで、気が滅入る。ディスクの表面には、『接触禁忌』の文字が躍っていたのだから。

◆ ◆ ◆ ◆ ◆

リンドウさんとミツシヨンを行った日の翌日。朝食も食い終わり、コウタと一緒にサカキ博士に呼び出されアラガミ講座を受けさせられた。知っている事ばかりだったけれど、何か聞き漏らしがあつてはまずいし、それなりに真面目に受け、それも終わり、俺がエントランスに顔を出すと、

「お、クウヤ」

即座に俺に気がついたリンドウさんが声を掛けてきた。

「はい？」

何かありましたか？」

「次のミツシヨン受注しといたから、準備が出来たらヒバリのところで受けてくれや。」

「了解しました。」

同行者は誰ですか？」

「桶サクヤっていう旧型の遠距離神機使いさ。」

階級は曹長で、衛生兵、お前もこの間会つただろ？あいつだよ」

「あ、黒髪のボブカットの……………」

「そうそう、そいつさ。サクヤの奴が先に出撃してるから、お前は準備が出来次第向かってくれ。場所は【嘆きの平原】。この間の市街地みたいな建物の遮蔽物がほとんどない場所だからな、気を付けてやれよ。」

……………それと、まあ、あまり心配はしてないんだが、サクヤは俺の腐れ縁でな……………気の良い奴だから、あまり怖がらずに接してやってくれ。」

「はい」

あんな、美人のお姉さんとお近づきになれるというのに、何を怖が

る必要があるというのか!?

……いや、リンドウさんっていう相手がいるから手を出すつもりは毛頭無いけれど。俺は、あの素晴らしい横乳を近くで見れるだけで十分さ!!

「ミッシヨンの詳しい事についてはヒバリにでも聞いてくれ」

ええと、サクヤさんと最初に行くミッシヨンは確か……ああ、『破壊の繭』か。幸い、討伐対象のコクーンメイデンなら墮天種が出てこようとも何とかなるだろうから幾らか気楽である。

攻撃の威力や状態異常の数値は上がるけれど、基本的な動作に大きな違いはないんだし。

「了か「サクヤさんよりも、ヒバリちゃんの方がよっぽど可愛いって!!」……いたんですか、タツミさん……」

リンドウさんの会話を遮ったのは誰かと思い振り向けば、そこには赤いジャケットを着たゴッドイーターの姿が見える。まあ、防壁が破られたという報告は聞いていないし、警報も出てないからここにいても別に問題ないのだろうが……

「んじや、クウヤは準備が出来次第、出撃してくれや」

「分かりました」

そう、俺が返事を返すと、リンドウさんは軽く頷き、そのまま階段を昇って出撃ゲートの向こうへと消えていった。あつちもあつちでやっぱり大変なんだろうな

そんなリンドウさんの背中を見送りつつ、視線は受付の方へと移っていく。

「ところでさ、ヒバリちゃん今日暇？」

時間空いてたら俺とデートしようぜ、デート!!」

「あ、カノンさん、ツバキさんから呼び出し掛かっていますよ」

「ふええええええええ、またですか……」

うう、やっぱりタツミさんごと爆砕しちやったのはまずかったかな
」

「いえいえ、タツミさんの件ではなく、どうしてブレンダンさんの神機にあんな傷があつたか聞きたいそうです。」

リツカさんと、サカキ博士もお待ちですよ」

「はうらうらー！ー！ー！！」

タツミさんを見無視しつつも、さり気なくタツミさんが酷い目にあつてるところは認めてるし……タツミさんも諦めた方が良いと思うんだけどな〜

そんなこんなで、俺は自分の準備が完了するまで、「アナグラ」名物になりつつあるタツミさんのピエロっぷりを見ることとなったのでした。

「なあ、ヒバリちゃん、俺今度の任務が終わったら君に言いたいことがあるんだ……」

「ちよ、コウタじゃないのに、こんなところで死亡フラグなんて建てないでください!!」

11品目 繭じゃなくて鬼と虎

準備も完了し、ミッションが実施される「嘆きの平原」へと俺は向かっていった。まだ車を運転できないので近くに向かうへりに同乗させてもらってである。物資運搬が目的のへりの中にいるゴツドイーターは何故か俺一人。護衛用に2、3人は同乗させるものだと思っただけに、このメンバーは驚きではある。

だが、それ以上に俺が不安に思っているのは、

《……ミッション名が『破壊の繭』じゃなかった……》

ということ。受付のヒバリさんから言い渡されたミッション名は『破壊の繭』ではなく何故か『カウボーイ』。CLIENTの部分かフェンリルではなく、『破壊の繭』のように両宮リンドウとなっている辺り芸が細かいとは思う。討伐対象はオウガテイル4体であり、先日突如勃発した墮天種が入り混じった『悪鬼の尾』よりか難易度は下がるが……

《ヤバいつて》

確かに、ミッションの実施場所は「嘆きの平原」だけでも、この展開はまず過ぎる。なんせこのミッション、ゲームでは難易度1のミッションのくせにヴァジュラが乱入してきやがるのだ。ヴァジュラと言えば、ゴツドイーター無印版のパッケージを飾ったアラガミであり、難易度3のミッションを受注するために倒さなければいけない大型アラガミであり、新人ゴツドイーターが越えなければならぬ壁とされるアラガミである。

つまりは、現在の俺にとっては盛大な死亡フラグ以外の何物でもない。

まだ、ミッションを受け始めて2回目の新人である俺が相手取る様なアラガミではないのだ。念のため言っておくが、現在の俺の装備は「ナイフ改・ファルコン・支援シールド」であり、絶対的に火力も防衛もヴァジュラを相手取るには足りていない。バレットも初期に配られたレーザーのみ。一応全属性分持つてはいるけれど、こんな物でどうにかなる相手ではない。

身体能力を特典で上げてもらっているからといって、素の火力が低いのではどうしようもない。先日のヴァジュラテイルの様な小型アラガミ程度ならどうにかなるが、大型アラガミとなると流石に誤魔化しようがなかったりする。

《かといつて、今更ミツシヨンを受けない訳にもいかない》

「ヴァジュラが出るかもしれないから帰ります」なんていう台詞は、ベテランならともかく新人の俺が言ったところでまともに取り扱ってもらえるはずもない。ゲーム中ではミツシヨン中止はメニューから出来たし、実際、状況次第では撤退も当然可能ではあるが、少なくともミツシヨンが始まる前から撤退することは、現状不可能である。

……一応、サクヤさんの（推定）スキルも思い出してみるのが……見事に遠距離型衛生兵のスキルばかりなので攻撃に関してはあまり期待できない。勿論、死にくいという点では非常にありがたいのだけれど。

となると、

《……やっぱ、逃げるしかないよな》

「勝てる」なんて馬鹿な事は考えない。ゲームと現実が違うのだ。ゲーム上だったら難易度1に乱入してくるヴァジュラぐらいどうとでもなるが、現実はそうはいかない。アラガミの唸り声も、被捕食者としての自身の立場も、自身に向けられる殺気も、全て無視できるわけがない。俺に出来るのは、ただ、それらの全てを受け止めた上で、ゴッドイーターとして自身に出来ることをやるだけだ。

だから、アラガミに対抗する1人の人間として、

《……少々ズル賢い手を使わせてもらおうとしますか》

神機を握る手に込める力が意識せず上がる。

……は、精々死なない為には、何だつてやってやるさ。

◆ ◆ ◆ ◆ ◆

「こんにちは、君が真城くんね？」

俺がへりから降り、現場に到着すると、先に来ていた先輩ゴツドイーターの橘サクヤさんがこちらに声を掛けてきた。足音が聞こえたのだろうか？（サクヤさんは戦場となる平原を見下ろす様に前方に視線をやっていたはずだ）黒い布地で全面を覆った服装は裸エプロンかと見間違うほど大胆に体の背部や側面（乳含む）を晒しているのだが。世界が違えば、痴女一步手前の服装である。そんな変態一步手前の格好はツバキさんとある意味同じなのに、ツバキさんの様な冷厳さとは違い、春の様な優しさを感じさせるおっとりとした大人の女性の声なのだ。つい、頬の筋肉が弛みそうになる。それが分かったので、必死に顔に力を入れて真面目さを装う。

「はい。橘さんですね……？」

そのまま、返事を返す。以前に一度顔を合わせているため、互いに顔は見知ってはいたけれど、こうしてしっかりと言葉を交わすのは初めてだ。

「ええ、今後ともよろしくね。」

それと、サクヤでいいわ」

「ありがとうございます。」

じゃあ、サクヤさん、とお呼びさせていただきますね。

俺のこともクウヤでいいです」

「ふふ、構わないわ」

ミッシヨン前だというのに、まるで緊張した様子が見受けられないのは、流石ベテランの神機使いだ。俺なんか、ヴァジュラの事を抜きにしても、戦場に降り立つとあって、未だに緊張しっぱなしなのだ。

「ちよつと緊張してる？」

「え、ええ。少し」

ややびくつきながら首を縦に振ると、ポンとサクヤさんが背中を叩いてくれた。

「肩の力抜かないと、いざというとき体が動かないわよ」

「リンドウさんにも似たようなこと言われたんですけど……中々慣れなくて」

苦笑交じりで返事を返すと、サクヤさんも笑いながら、

「まあ、まだ2度目だものね。緊張するな、というのも無理な話か……でも、初陣は済んでるんだから多少は慣れたんじゃないかしら？」

「……まあ、それなりに、で良いなら」

「今はそれで十分よ。そういった面をフォローするために、私たち先輩がいるんだから」

微笑みながらこつちを見て、そう励ましてくれるサクヤさん。頬の肉が緩まらない代わりに、恥ずかしさで自分でも分かるほど顔が熱くなった。照れ隠しのつもりでソツポを向く。そんな俺を見てくすくす笑うサクヤさん。なお一層顔が熱くなる。ああ、もう。からかわれているのは分かっているのに、反応してしまう自分が恨めしい。

「さて、と……そろそろブリーフィングを始めましょうか」

一頻り俺をからかったサクヤさんの顔が柔らかな女性のそれから神機使いとしての冷厳なものへと変貌する。眼前に広がる戦場を睥睨し、周囲に気を張り巡らせる。

「はい。今回のターゲットはオウガテイル4体でしたよね」

そんな先輩の変化につられ、自然と俺の表情も硬くなる。神機を握る手にも力が籠る。

「ええ。ここは戦場なのだから気を抜いて良い訳ではないけど、ヴァジユラテイルを相手に初陣を飾ったあなたならいくらか気楽にいけるでしょうね」

ああ、情報はなんだかんだで回っているのね。まあ、同じ部隊のメンバー、それも自身が今後背中を任せることになるかもしれない人間の情報なのだから知っていて当然か。

「……今回は、遠距離型の神機使いとの戦い方に慣れるのが目的ですか？」

敢えてサクヤさんの称賛を無視し、ブリーフィングを進めることにする。極東人らしく謙虚に受け答えしていれば良いのかもしれないが、自分の実力を把握していないと思われるのも遠慮したかった。

「そうですね。昨日はリンドウと近距離型同士の連携をやったと思うけど、今日は逆のやり方を学んでもらおう、という訳。

遠距離型の神機使いと組むのは今日が初めてなのだし、わたしが後

方からバックアップ、キミが前方で陽動の遠距離型の神機使いとペアを組む場合の基本戦術でいくわ。

それから、注意事項として、くれぐれも先行しすぎないように後方支援の射程内で行動するように。OK?」

「分かりました。」

「……質問良いですか?」

「ええ、良いわよ」

「サクヤさんの有効射程距離はどれぐらいですか?」

後方支援の射程内で行動しろというのだから、それぐらいは把握しておかないと。無印の頃までのサクヤさんだったら逆にその射程範囲外で活動したいところだけど、そんなわけにもいくまい。回復弾の範囲からわざわざ出るなんて自意識過剰にもほどがある。

俺の質問にサクヤさんが考え込む。

「そうね……バレットにもよるけれど、戦闘中の限界距離は大凡500m程かしら。といっても、限界だから実際の戦闘可能範囲は1000〜2000m程度に落ちるけれど」

「それは、アサルトやブラストでも同等ですか?」

「……いえ、流石にスナイパーよりも落ちるわね。」

私もスナイパー専門だから実際のところどうか詳しくは分からないけれど、これまでの経験から言ってアサルトは500〜1500m、ブラストは1000〜5000m程が有効距離でしょうね。勿論、個人ごとの職種による戦い方や、セットしているバレットによって変わってくるから必ずしもその距離で考えていいわけではないけれど……参考になったかしら?」

「はい、ありがとうございます」

「詳しく知れたかったら帰ってからツバキさんに聞くといいわ。ツバキさんなら元遠距離型の神機使いだし、教官としてたくさんの神機使いを指導してきたから私なんかよりもよっぽど詳しいはずだから」

「分かりました。今度、訓練の時にでも聞いておきます」

次の訓練の予定は今のところ不明だけれど、難易度1から難易度2に移る際にチュートリアルが一つあったはずだから、そのあたりで一

度訓練は入るはずだ。その時にでも聞けば良いさ。それまで今回みたいに遠距離型の神機使いと組む予定はなかったはずだし。

「うん、そうしなさい……それで、他に何か質問はあるかしら？」

無ければこのままミッションを始めるわ」

そう言つてサクヤさんは視線を俺から平原へと向け直す。平原は先ほどもと同じように不気味なほどの沈黙を保っている。平原の中央では竜巻のように大気が黒々と蜷局を巻き空に向かっていているというのに……この沈黙は何なのか。

俺もサクヤさんと同じように視線を平原と向け、考える。

リンドウさんのミッションではかなり自由にやらせてもらったけれど、あれはリンドウさんだからできたことだろう。サクヤさんと戦うときに同様のやり方をしていいとは考えにくい。

《……けど、それならさつきサクヤさんが言つてた基本戦術で十分だよな》

俺も実戦で遠距離型と組むのは初めてなのだから、ベテランゴツドイーターであるサクヤさんの言葉に反対する理由などまるでない……あくまで、ブリーフィングの段階で、ではあるけれど。実際に戦い始めたらどうなるかなど組んでみないと分からないのだから。主に、乱入してくるであろう馬鹿虎のせいだ。

「……じゃあ、質問じゃないんですけど、一つ良いですか？」
さて、

「何かしら？」

「近接で始める前に、遠距離型の戦い方とか狙撃のやり方を教えてもらえないでしょうか？」

ゲーム上では不可能なやり方で一つ行かせてもらいましょうか。

・

・

・

・

・

「ギャウンツ!!」

スコープの向こうでまた1体、水色のレーザーがオウガテイルを貫き、オウガテイルが地面に倒れこむ。

「そうそう、スナイパーならまずは相手の足を止めることを優先して。これは、小型でも大型でも通用するやり方だから。」

もし、アサルトとかブラストに転向するつもりならまた違ってくるけど、それはその時に他の神機使いに聞いてちょうだい」

「はい!!」

サクヤさんのアドバイスに従い照準を倒れていない他のオウガテイルの脚部に合わせ、引き金を引く。神機の先から再度水色のレーザーが発射されるも、今回は残念ながら脚部には当たらず、足元の地面を穿つ程度に止まった。

「うーん、惜しいわね。まあ、素質はあるみたいだから気にしなくていいと思うけど、もしも狙撃がどうしても出来ないっていうんだったらホーミング性能の付いたバレットを使うようにするといいわ。あれならよっぽど下手じゃない限り当たるから」

首を縦に振り了承の意を示すと、神機の銃身を移動させ、スコープ越しに周囲を見渡す。

改めて現状の説明だが、現在俺は、ゲームではスタート地点であり、先程サクヤさんと合流した場所である【嘆きの平原】の南部（ゲームで言うエリアA地点）にある高台からサクヤさん監修の下、狙撃訓練を行っていた。

この位置ならオウガテイルにも気づかれにくいし、仮に気づかれたとしてもオウガテイルなら攻撃が届きにくい位置なので安心して狙撃に専念できる。まあ、ヴァジュラテイルとかヴァジュラだったら余裕で攻撃が届く位置ではあるけれど……ついでに言えば、ゴッドイーターの合流地点とされていることから分かるように、非常に見通しが良く、戦闘エリアの状況が瞬時に分かりやすい位置であり、更にはもしもの時は撤退し易い位置でもあるのだ。

訓練や初陣の時にも遠距離型で射撃はしたけれど、あれはあくまで補助的な要素が強い。訓練の時は捕食した後の予防線だったし、先日の初陣にしたって開幕の一撃のみである。せっかくG O D E A T

ERというバレットの攻撃力が半端ない——「ないぞう」とか「のうてん」とか——世界にいるのに、遠距離攻撃が補助という戦闘スタイルは勿体なさ過ぎる。そのため、スナイパー使いの先輩に色々聞けるうちに聞いておくつもりなのだ。特訓していただけるといふのなら尚のこと。俺は、遠近どちらか一方に特化するつもりなどまるでない。折角の新型神機なのだから両方のエキスパートになってやるさ。話を現場に戻そう。

《……まだ、ヴァジュラは見当たらないな。このまま出てこないなら助かるんだが》

そう思いながらも決して気は抜かない。確かに今のところはオウガテイルしか出てきていないし、このミッションが前回とは違い良い意味でゲームとは違う展開になってくれた方が個人的には非常に助かるのだが……前回の例を考えると、そうなる可能性の方が非常に低いことは分かっている。

……俺、ホントに何か悪いことしたっけ？

「……どうかした？」

心中で思いつき溜息を吐きながら今後について頭を悩ませていると、銃撃を止めた俺をサクヤさんが不思議そうに見つつ話しかけてきた。

「いえ、サクヤさんみたいな美人のお姉さんに二人きりでご指導いただけるなんて……と、思いました」

考えていたこととは真逆のふざけた調子の返事。まるで考えていなかった訳ではないので嘘ではないことは分かってほしい。

「あら、御上手。でも、ミッション中なんだからそういう台詞はあまり使わないようにね」

あつさりと流すあたりに大人の女性の余裕を感じる。くそう、今になつてリンドウさんが羨ましくなってきたぞ……!!

「……はい」

敢えてやや物足りなさそうに返事を返しつつ、再度スコープの照準を合わせ直し、八つ当たり気味に引き金を引く。

「ギャンツ!!」

再度放たれた水色のレーザーは今度は地に倒れていたオウガテイルとこちらに向かつて来ていたオウガテイルの2体を纏めて貫き、双方を黒い塵へと変えた。

「お、2体纏めてなんてすごいじゃない。

……さてと、対象の半分も討伐できたことだし、それじゃあ、そろそろこのミッション本来の目的に戻りましょうか」

監視に徹していたサクヤさんの言葉に、

「了解、しました」

神機を剣形態へと変化させながら、躊躇いつつも了承し、高台から飛び降り、戦場である平原へと降り立った。

《……出来れば、残りのオウガテイルも狙撃で終わらせたかったけど……仕方ない》

サクヤさんの着地音を聞きながら、少し後悔。

今回のミッションの目的の一つである「遠距離型と組んだ時の近接戦闘の仕方」をやる前にミッションを終わらせる訳にはいかないのも分かるし、狙撃訓練も——ミッション中ということを考えれば——十分行ったから切り上げるのも分かる。だから否定する要素などまるでないのだが……

《……はあ、仕方ない。こうなりやヴァジュラが出てこない事を願うだけだ》

心中泣きそうな気分になりながらゆっくりと歩を進める。ゆっくりと、焦らずに、幸い戦闘エリアが「嘆きの平原」なので視界を遮るものはほとんど存在しないから、軽く首を振るだけで周囲の様子が手に取るように分かる。もつとも、平原の中央にある小高い丘？（山？）とその中央から吹き上がる黒い竜巻のせいで、丘を挟んだ向こう側の様子や丘の上の様子はまるで分からないのだが。

丘に沿って時計周りに平原を進む。

「……おかしいわね」

サクヤさんがそんな言葉を漏らしたのは、対象を見つけることなく丘を半分ほど過ぎた辺りに差し掛かった時のことだった。

「何がです？」

そう言われても俺には何のことやらまるで分からない。

実戦経験がないというのもそうだし、仮にアラガミと遭遇していいことがおかしいのだとしても、ゲームでは平原を半分回ったとしても遭遇しないのは特に不思議ではなかったから、俺はおかしいとはまるで思わなかった。

それも、傍から見ればおかしいことだとまるで気付かなかったが。

「初めにキミがオウガテイルを2体仕留めているんだから、残りの2体もとつくに警戒しているものだと思うっていただけ……」

「警戒してたら行動に何か変化でも起きるんですか？」

「ええ。視覚や聴覚などの索敵能力が飛躍的、とまではいかないけれどそれなりに上がるわ」

「……成程」

人間だって仲間がやられたら周囲を警戒し始める。それは、些細な物音に気が向くことや、物陰の変化に気が付くなど、能力が上昇というほどのものではないが、いずれにせよ自身の周囲の変化に気付きやすいということだ。そして、アラガミという一種の野生動物とも言える存在であるのならその変化は人間などとは比べ物にならないはず。

そして、この平原は非常に見通しが良い。警戒している敵がうろついているのだとしたらエリアの半分も来ているのに見つからないのは確かに些か不自然ではある。

《……まさか、ね》

脳裏でゲームの最初のイベントムービーが再生される。

ヴァジュラの死骸に群がるオウガテイルと、それを襲うもう一体の新たなヴァジュラ。それを影に隠れて見るゴッドイーターたち……つまりはそういうことだ。

と、そこまで考えた時、

——ぐううおおおおおおおおおおおおおおおおおんっ！

「……っ!？」

平原一体を強烈な衝撃が襲った。サクヤさんも突然の衝撃に身を強張らせ、顔からは先程までの困惑すら消えている。

《……やっぱ、やらないと駄目なのね》

分かっていた事とはいえ、期待を裏切られた気がしてがっかり。サクヤさんの能面を横目に、俺は黙って神機を構えなおす。ついでに、腰に着けているポーチをそつと確認。

《数は8。サクヤさんがいくら持つてるのか分からないが、足しても精々15前後だろう》

全部使っても可能かどうか分からないが、やるだけやるしかない。覚悟を決め、視線をサクヤさんの顔から衝撃の届いて来た前方に移す。すると、見計らったかのようにそいつが丘の上の獣道から姿を現した。

平原へと降り立ったそいつは6枚の血を想起させる赤色のマントを背に靡かせ、強靱な四肢で地面を踏み抜いた。四足の体軀はオウガテイルやコクーンメイデンなどよりも余程普通の獣の様だが、大きさが違う。人間とは比べ物にならない巨体。体の前方についている頭部だけでも人の体軀と同等。その頭部は虎に似た顔であり、上部は硬化して兜のように見える。

間違いない、ヴァジユラだ。

強靱な体軀は黒い体毛に覆われ、そいつの周囲の空間はパチパチと音が響いている。

低い唸り声を漏らす口からは赤い液体が滴り落ち、白い脚や頭部など体の欠片がいくつかこびり付いている。

《……やっぱり、こいつが喰つてたのか》

なんとなく予想が付いていた事とはいえ、現実として直視しなければいけなくなるとまた違ってくる。

「……仕方ない、行きますか」

次の獲物を見つけた虎の双眸を正面に見据え、俺は一步踏み出した。

12品目 普通の新人ってどう動くんだっけ？

通信機のスイッチをオンに、

「あー、テストス。こちら、真城クウヤ新兵。ヒバリさん、聞こえますか？」

『こちら、竹田ヒバリ。感度良好です、クウヤさん。どうかなさいましたか？』

「現在、ヴァジュラと遭遇。相対距離は目算で10m程」

『ええ!? サ、サクヤさんの指示に従って、す、すぐに逃げてください!!』

こちらからも増援が送れないか至急確認します!!』

「了解……どれだけ頑張れるか分かりませんが、現時点を持って規定のミッションは放棄。撤退戦に移ります」

『……分かりました。死なないでくださいね……』

「努力します。以上、交信終了」

通信機のスイッチをオフに。これで、なんとか増援が来てくれる可能性が出来た。とはいっても、どれだけ急いだって本部からここまで1時間程度は掛かる。ヘリが残っているならもう少し早いだろうが、俺が乗ってきたヘリで今は打ち止めになっていたはずだから、来るなら車になるだろう……厳しいな。

通信を終えた俺は、体の斜め後方に構えた神機を握りしめ、更に一歩、ヴァジュラに向かって踏み出す。先ほどの会話でこちらに気づいたのか、グルルと俺とサクヤさんに向かって低い唸り声を上げるヴァジュラ。その双眸から意志を読み取ることは出来そうにない。まあ、分かったとしてもいかにして俺たちを仕留めるか、という思考だろうからあまり意味がないような気もするが。

両手で持っていた神機を右手のみで持ち、構えを片手持ちへと変化させる。どれだけ再現できるか分からないが、可能な限り体を前傾姿勢に、意識を神機と一体化させていく。両足に力を籠め、いつでもヴァジュラに向かって飛び掛かれる体勢へと体を変化。

「ダメよ、クウヤ、退きなさい!!」

後ろから聞こえるサクヤさんの呼びかけも今の俺には意味がない。

新人の独断専行、力の差を知らない慢心、恐怖心からの暴走などなど傍から見れば処罰対象とも、新人故のミスと馬鹿にされるだろう行為。それを、敢えて行う。

色々疑われることになるだろうけれど、そんなことを気にしていては生き残れない。というか、逃げるのが可能ならとつくに逃走を開始してるさ。

「サクヤさん。スタングレネードいくつ持ってますか？」

「……え？」

自身の指示を無視した新人から返ってきたのは、恐らく予想していなかったであろう問い。それに、一瞬戸惑いながらも、

「や、8つだけど……それがどうしたの？」

しつかりとサクヤさんは返事を返してくれる。ありがたい。

《……俺のと合わせて計16か……十分!!》

「……分かりました。活性化したら一気にそれを使って離脱しましょう」

「活性化って……」

俺の返事にサクヤさんが絶句する。

活性化、すなわちアラガミが怒った状態のことであり、基本的にアラガミの素早さや攻撃の威力が上昇する状態のことである。この状態になると全身を硬化させるアラガミもいるが、幸いヴァジュラは上位種のマータやピターほど硬化しないので、そのあたりを今は考えなくていい。そもそも、活性化したら攻撃するつもりはないのだし。

だが、いずれにせよ今の俺の言葉は本来であれば褒められたものではない。ヴァジュラ自身を強化させるということは、それだけ俺たちが死ぬ可能性が増加するということであり、討伐対象でもない限り、本来であれば避けて然るべき状態なのだ。サクヤさんが絶句するのも当然と言える。

が、逃げるなら時間が長いに越したことはないのだ。

「活性化中はスタングレネードの効果が上昇するはずです。その上昇した効果中に全速で離脱します」

それだけ言って、更に一步ヴァジュラに向けて踏み込む。とつくに

相手は臨戦態勢なのだ。これ以上会話を長引かせても命の危険が増すだけだろう。

「後の指示と、スタングレネードのタイミングは任せます。

……勝手に言つてすみませんが、よろしくお願いします!!」

もう一步踏み込んで、

「クウヤ、止めなさい!!」

サクヤさんの制止を耳に捉えながら、一気にヴァジュラに向けて駆け出した。

◆ ◆ ◆ ◆ ◆

私は、夢でも見ているのだろうか。リンドウやツバキさんからの情報によれば、今回のミッションで私が組んだ相手は実戦2度目の新人だったはず。訓練だけなら人の数倍受けているらしいけれど、訓練はあくまで訓練だ。実戦とは違う。当然、ヴァジュラなどに代表される大型アラガミなど一日二日で出来る様になる訳がない。

そう、なる訳がないのだ。

そのはずなのに……

「ほら、そっちじゃねえ。こっちに来い!!」

私が同行していた新人——真城クウヤは、ヴァジュラ相手に一步も引かない大立回りを演じていた。

常に相手の背後や側面に張り付き、決して正面に立たずに右手に持った神機を軽快に振るう。振るった刃は致命傷を与えるほどに深い傷を残してはいないが、着実に相手の行動を制限し、あいつの注意を私から自身へと向けている。

ヴァジュラが振るう右爪をシールドを展開して受け流し、突進や跳びかかりはステップを使い、一気に距離を取って避ける。跳びかかり後に生じる着地の際の隙や、ヴァジュラの爪を掻い潜りながら神機で体を斬りつけていく。どこからどう見たって新人の動きじゃない。

《……リンドウが言っていた『動きが良過ぎる』ってこういう事だったのね》

るほどに見事な足捌き。タツミにでも教わったのかしら……？けど、タツミのあんな足捌き私は見たことがない。まあ、最近あまり組んで仕事した記憶もないから、その間に習得したんでしょう。

《というか、猫科って……まあ、見た目は虎よね……》

照準を修正しつつ、アイテムポーチ内のスタングレネードの位置を確認。すぐに取り出せるように準備しておく。

《活性化、ね。確かに活性化中は視聴覚が敏感にでもなってるのか普段より良く効くけど……そんなこと、新人が知ってるはずなのに》

仮に講義で教えていたとしても、新人のクウヤにはまだ大型アラガミ戦の講義は行われていないはずだ。

……こうして考えてみると色々疑問が浮かんでくるが、今はそこまですぐにしている暇はない。が、考え事が多少はできると言うことに気が驚く。ここにいるのは自分たち2人とヴァジュラのみ。決して気を抜ける余裕など無いはずだ。現に、

「オオオオオオオーンッ!!」

「っ、マズイ。クウヤ下がりなさい!!」

自身の周りに張り付き続けるクウヤを鬱陶しく思いでもしたのか、マントに雷を纏わせ、一際高くヴァジュラが咆哮を上げる。間違いない。自身の周囲一帯に強力な電撃を撒き散らす放電攻撃だ。巻き込まれれば一撃で命を持っていかれる危険がある。

「了解!!」

私の指示に力強く返事を返したクウヤはステップを使い、一足飛びでヴァジュラの攻撃範囲外へと離脱。速いというより力強い。速いのは確かにそうだ。私に返事を返すのとほぼ同時に動き出していたのだから。リンドウの言っていた思いっきりの良さというのがこの辺りなのかしら？

だけど、私が気になったのは意志の切り替えの速さ以上に、身体能力の高さ。ヴァジュラの放電の範囲外から一息で離脱できる程の身体能力の持主など、私はソーマぐらいしか知らない。

そうこうしているうちに放電が止み、その瞬間を狙ってクウヤは再

度ヴァジュラに肉薄した。

……ほんと、どうなってるのかしらね。この子は。



《つぶねく》

サクヤさんが教えてくれなかったら危うく放電の餌食になるところだった。相手の身体がでか過ぎる所為でどうにも全体の様子が掴みきれない。ゲーム内では余程狭い場所でも肉薄でもしない限り当然のようにアラガミの全体像は見えたものだが、現実になるとそうもいかない。ゲームのOPを思い出してもらえれば分かると思うが、ヴァジュラは非常にでかい。それでも全体像は少し離れば分かるものだが、自分が肉薄しているのだからどうしたって相手の身体の一部しか見えなくなるのだ。さっきからその所為で何度か死にそうになっているが、幸い今の所攻撃が直撃したことはない。所々余波などでかすり傷とかができてはいるけれど。

……ヴァジュラがこれだけでかいのならウロヴオロスはどれだけでかいというのだ……

《そう長くはもたないな、こりゃ……》

今の所はサクヤさんの支援もあり何とかなっているが、この後の事を考えると長丁場は無理だろう。戦闘を開始した直後にはまるで感じなかった疲労感が体には重くのしかかり、限界まで引き上げた身体能力のせいで体の節々が悲鳴を上げ始めている。

《まだか……!!》

限界が近い。

それが分かっているとしても、現状では体から力を緩めることなど到底できむわけがない。

マントを立たせ、その先から集束された雷撃が俺に向かって撃ち出されるのを、ステップで勢い良く前進することでかわす。撃ち出された雷球は俺の頭上スレスレを通り過ぎ、後方の地面へと着弾。背後で地面が弾け飛ぶ音を聴きながら、更に踏み込み神機をヴァジュラの顔

の力強さが体中に行き渡る。戦場を駆ける足にも一層力が籠められ、体の節々に感じていた軋みも一瞬で消え去る。

《くそ、よりによって今かよ!!》

だが、そんな違和感を覚えるということは、一瞬だが大きな隙を作るということ。その一瞬があればヴァジュラには十分。

「グルアアアーーーーーッ!!」

立ち止まった俺の背中に上空から撃ち出された4つの雷球が連続して飛来する。

「ぐっ」

未だに口の中に残る生臭さはそのままに、慌てて振り向きシールドを展開。そのまま後ろに跳び下がろうとして、

ガガガガッ!!

それより速くヴァジュラの放った雷球が連続してシールドに着弾する。

「ギッ!?」

眼前で連続して爆発する雷球と爆発に生じてこちらに流れてくる電流に意識が飛びそうになるのを必死に堪える。だが、雷球の余波は凄まじく、シールドを展開したまま爆発に巻き込まれ、後方——サクヤさんのいる方——へと弾き飛ばされてしまう。地面が弾け、プスプスと何か焦げ付く音が耳につく。

飛ばされながらもなんとか体勢を整え、足から地面に着地。飛ばされた勢いを殺し切れず数メートルほど地面に足を引き摺った後を残し、ようやく停止。

「っ、はあっ!!」

大きく息を吐き出し、展開していたシールドを元の位置に収納。そのまま神機を構え直す。

まだ体の所々に痺れが残っているし、意識が飛びそうだけれど、幸いにも四肢は動く。左腕の感覚が少し悪いが、まだどうにかなるはずだ。それでも神機を支えていた両腕を中心に所々肉の焼けた臭いが鼻を衝く。この程度の火傷ならまだどうにかなる……と思う。幸い、腕は動くし力も籠められる。力を籠めれば痛みが増すが、我慢する。

ほら、こんなふうに」

ぐるぐると腕を回し、飛び跳ね、自身の体が正常であることをサクヤさんに示す。それでも治りたてなのでまだ少し痛かったりする。

「うそ……回復錠を使ったからっていくらなんでも治るの速すぎるわよ」

が、逆にそれがサクヤさんからしてみれば信じられなかったようで、驚きに目を見開いていた。あれー？ゴッドイーターの治癒力ってこんなもんじゃないの？小説版でもギースの奴がアマテラスの熱線を受けて炭化してもかなり早く回復していたからこの回復力でもさして異常じゃないと思っただけだ……サクヤさんの反応を見る限りでは、普通とは言えないようである。

このまま呆けている美人の先輩を眺めているのもそれはそれで楽しいのだけれど、残念ながら今の俺たちにそんな余裕はない。咆哮を上げたヴァジュラの全身の毛を逆立て、遠目から見ても分かるほどに両前足に力を籠め始めているのだ。

素人に毛が生えた程度の俺でも分かる。

今すぐあいつは俺たちに襲いかかろうとしているのだと。

ヴァジュラの一挙手一投足を見逃さないつもりであいてのことを真剣に眺めながら、なにやらぶつぶつと呟いているサクヤさんに声をかける。

「サクヤさん、あいつがスタングレネードの効果範囲まで来たらあいつに向かってスタングレネードを投げてもらって良いですか？」

「それは別に構わないけれど……」

「お願いします。あいつが怯んだら逃げようと思うんですけど良いですか？」

今更だけれど、俺が指示を出してしまっているのだろうか。指示を出している俺はあくまで新兵であり、受けているサクヤさんは曹長だ。どう考えたって階級差がありまくりなのだ。経験でいえば俺も（ゲーム内で得た経験を考えれば）それなりのものだとは思っけれど、実戦の経験など皆無と言って良いのに。

……まあ、当のサクヤさん自身が特に何も不平や不満を言っていない

いいし、反対もしていないから気にしないようにしよう。今はそんな些事より何より生き残ってアナグラに帰ることが先決なのだから。

「了解。」

……なんでそこまでの的確な指示を新人のあなたが出せるのか非常に気になるけど……」

ギクツ!!

サクヤさんの言葉を受けて背筋が震え、冷や汗が軽く頬を伝う。俺が転生してこの世界に来たことなんて普通は考えもしないことだからばれる心配はないが……流石に、指示を出したのはやり過ぎだったか。動きが良い程度なら訓練の成果だと誤魔化すこともできただろうが、指示となるとまた別の経験が必要なのだから。……なんか、変なフラグが立った気もするが気にせずに。

「今は目の前のことが先決。気にしないようにしましょう。」

クウヤあなたが役に立つならこの際何でも良いわ」

それだけ言ってサクヤさんは自身のポーチに収められていたスタングレネードを取出し、左手で握りしめた。

「……ありがとうございます」

俺が誤魔化したわけではない。ただ、保留になったただけだ。それでも、今は行動してくれるだけで十分。

「来ます!!」

「グルアアアーーーーーッ!!」

まるで待つてくれていたかのように、僕たちが会話を終えるタイミングと同時にヴァジュラは叫び声を上げながら大地を蹴った。平原一体に地響きを轟かせ、周囲に土飛沫を撒き散らし、全身に紫電を棚引かせながら俺とサクヤさん目掛けて驀進する様は誰にも止められない。一步踏み出せば大地が弾け、また一步踏み出せば空気が破裂する。嵐を伴った進撃は自身を邪魔するもの全てを破壊しながら前進を続ける。

そんな砲弾のような進撃を、

「それっ!!」

一筋の閃光と爆音が遮った。

「ギャウツ!？」

誰も遮ることの出来ないと思われた怒りに満ちた突進は、向う先に投げ込まれたスタングレネードによつて強制停止させられている。ゲーム通りにヴァジュラが停止してくれているのであれば、ヴァジュラの巨躯は平原の地面に倒れ伏しているはずである。

だがその成果を確認している余裕なんて俺達にはない。

「失礼します!!」

サクヤさんがスタングレネードを投げ込むと同時にヴァジュラから背を向けていたため、幸いにも閃光は俺の眼に影響を与えていない。が、耳栓を着けていたわけではないので、音による影響は全くないわけではない。それでも直近でくらったヴァジュラに比べればまるで問題はない。少々耳鳴りがするが、その程度だ。動くことになんら支障はない。

神機を持つていない左手でサクヤさんの胴体に腕を回し、サクヤさんの肢体を肩の上に担ぎ上げる。

「へ……きや!!」

ちよ、ちよつとクウヤ!？」

当然、突然担ぎ上げられたサクヤさんは戸惑いの声と悲鳴を上げる。おお、さつきまでの凜とした張りつめた神機ゴッドイーター使いとしての声でも、戦闘前の先輩としての意識が強かった優しいお姉さんとしての声でもない。可愛らしい女性としての悲鳴。ああ、もう。こんな生死を分ける戦場だというのについ頬が緩んでしまうじゃないか。

「行きます。落ちないように気を付けてくださいね!!」

背後で巨躯が派手に地面に転がり、転倒する音を聞きながら地面を勢い良く蹴る。走るのではなく、跳ぶ。滑るように地面と平行して平原を突き抜けていく。

「ヴァジュラあが起きたらまたスタングレネードをお願いします!!」

着地と同時に神機を振り、再度地面を力強く蹴る。地面を蹴った感触は先程の蹴りより軽かったのだが、勢いと飛翔距離はまるで変わらない。

再度地面に足を着け、神機を振るい、再び跳ぶ。今度は直前の跳躍

より地面を蹴る感触が重かった。

《ちっ、今のは失敗か……!!》

諦めず、同じ行程を繰り返し、再度チャレンジ。今度は確かに大地を蹴る感触が軽かった。

アドバンスステップ

ショートブレードを使う神機使いにのみ許された特殊行動。ゲーム内ではスタミナ消費は通常と変わらないが、通常のステップよりも早く次の行動に移ることが可能となる。本来は手数でアラガミと戦闘を行うショートブレード使いを助けるものなのだろうが、ゲーム内では最速の移動方法でもあったので、戦闘以上に、戦闘を仕切り直すためや、威嚇中の敵に一瞬で近づく時など、遠距離を移動する際によく使われていたりする。

アスリートやステップマスターなど、スキルでスタミナ消費量を軽減することはできないが、幸いにも今の俺の状態はリンクバーストLv3＋神機解放モードであり、スタミナの消費量は本来のそれとは比べ物にならないほど格段に減っている。

ゲームではなく、実際にアドバンスステップを行うとなるとどうなるのか分からなかったが、足や体に負担が掛かる量が本来のステップよりも非常に少なかった。その負担の減少が次の動きを速めているのだろう。何がどうしてこんな現象が起きているのかは知らないが、助かるから今は気にしない。知りたいなら後で榊博士にでも聞けばいいさ。

そんなもろもろの理由があるから、逃げるだけならこれが一番良いのだ。

最も、

「っ、あ……!!」

ゲームとは違って、自身の体捌きが一瞬を分けるとあって下手なマネは出来ない。

跳ぶ最中にサクヤさんに声をかけ、次にあいつが襲いかかって来た時のための準備を促す。活性化時のヴァジュラのダウン時間は精々8秒程だったはずなので、平原から離脱する前にまた何度か襲いかか

られることになるだろう。なので、俺が逃げに徹することができように、サクヤさんにはスタングレネード投げに徹してもらうことにする。幸い、まだ神機解放モード^{パースト}の効果が切れていないのでスタミナに問題はないだろうし、筋力も上がっているから、サクヤさんもまるで重くない。サクヤさんに関しては、精々俺が神機に触れないように気をつければ良いだけのこと。

……まあ、サクヤさんを肩にうつ伏せの格好で担いでいるせいで、背中と肩にサクヤさんの柔らかなその双丘が当たっていたり、背中がから空きのせいで手にサクヤさんの柔肌の感触がもろに感じられたりと、思春期男子としては色々興奮せざるを得ない状況になってはいるのだが……うん、無事生きて帰れたら今夜は楽しめそうだ。

「え、なに!?!」

聴こえなかったのか、サクヤさんが大声で尋ね返してくる。

「ですから、次のスタングレネードの準備を」

そんな彼女にも聴こえるよう大声で次の指示を出そうとしたところで、

「ギアアアアッ!!」

向かう先から予想もしていなかった唸り声が聞こえてきた。視線を肩に担いだサクヤさんから前方に戻すと、

「ガアアアアッ!!」

一匹のオウガテイルが俺たちに向かって尻尾を振りながら突進してきていた。

「っ、残りのもう一匹がこんな時に……」

「え、なに? どうしたのクウヤ?」

「本来の討伐対象です。一気に突破しますから、サクヤさんはヴァージュラの方をお願いします!!」

「討伐対象って……オウガテイルか。それなら、お願い」

「はい!!」

簡単な会話を跳びながら交わし、スピードを落とすことなく前進。一瞬でサクヤさんを担いだ俺と悪鬼の尾^{オウガテイル}の距離が縮んでいく。

右手に握った神機を大きく後方に振り上げる。意識を前方に。後

脚は確かに宙に足場を捕え再度上空へ跳躍した。体一つ分上空へ進んだが、まだ届かない。

《もう一回!!》

本来なら無理な三回目の空中ジャンプ。だけど、

「今の俺なら……!!」

リンクバーストLv3と神機解放の掛け合わせなら、もう一段階上に行けるはず!!

宙を力一杯蹴ると、確かな感触と共に体が上昇し、目の前が一気に拓けた。無機物な建造物が視界一杯に移っていたのに、それらが無くなり確かな一本の道が見える。

上昇した体は建造物の少し上を舞い、無事、俺たちはスタート地点に戻って来ることができた。

そのまま、姿勢を低くして、出来るだけ道の奥に進む。

「ふへ〜」

サクヤさんを肩からおろし、一息吐く。流石に平原の半分を大人の女性一人を担いで一気に走り抜けると少し疲れるな。

崩れ落ちそうになる身体を無理矢理奮い立たせ、サクヤさんに顔を向ける。

「こら、クウヤ。まだ近くにヴァージュラあが近くにいるんだから、すぐここから離れるわよ」

やや乱れた服を気にしながらそう指示してくるサクヤさんに、

「了解しました」

出来るだけ疲れを見せない様に返事を返す。

道の奥に向かっていくサクヤさんに付いて行く前に、一度平原に視線を移すと、

「うわ……」

俺たちを探しているのか荒い呼吸のヴァージュラが視線をあちこちに向けながら平原を闊歩していた。今の所、建物の上にいる俺たちに気付いた様子はない。

《……うし、次会うのは『蒼穹の月』だろうから、その時にリベンジだ》

忘れない様、大型アラガミの脅威をしっかりとその眼に焼き付け、
決意を新たに俺もサクヤさんの後を追うのだった。

何はともあれ、無事に生きて帰れそうではなかった……